

日韓聖公会青年セミナー報告書

- + 2006年 (日本・河口湖) +
- + 2007年 (韓国・ソウル) +
- + 2008年 (日本・沖縄／青年大会) +
- + 2009年 (韓国・華川／ソウル) +
- + 2010年 (日本・長崎) +



も く じ

2006 年日韓聖公会青年セミナー（日本・河口湖）	1
1) プログラム概略	2
2) 事前研修会要綱	8
3) 事前研修会・香山司祭講演会（レジユメ）	9
4) 共同声明	13
5) 趣旨説明（レジユメ）	14
6) 主題講演 1（レジユメ）	15
7) 主題講演 2（レジユメ）	20
8) 『改憲問題』グループ発題	24
9) 『基地問題』グループ発題	28
10) 『在日外国人』グループ発題	31
11) 『イラク派兵問題』グループ発題	34
12) 『移住労働者問題』グループ発題	37
13) 『青年文化』グループ発題	40
14) 靖国問題レクチャー	42
15) 感想文	44
2007 年日韓聖公会青年セミナー（韓国・ソウル）	56
1) プログラム概略	57
2) 事前準備会資料	68
3) セミナーで用いられた資料	93
4) 感想文	96
2008 年日韓聖公会青年セミナー（日本・沖縄）	98
2009 年日韓聖公会青年セミナー（韓国・華川／ソウル）	99
1) プログラム概略	100
2) 事前準備会プログラム	111
3) セミナーで使用された礼拝式文	125
4) 訪問箇所の案内	127
5) ソウル市内グループ行動計画	128
6) 感想文	131
2010 年日韓聖公会青年セミナー（日本・長崎）	139
1) プログラム概略	140
2) 事前準備会資料	147
3) 訪問先の紹介	150
4) 感想文	152

2006 年

日韓聖公会青年セミナー

日時：2006 年 8 月 11 日～16 日

場所：日本 山梨県河口湖畔

1) プログラム概略

日韓キャンプが一つの区切りを迎え、東アジアの平和を実現していくために日韓両国の青年が集いともに行動するためのプログラムとして始まった第1回目の日韓聖公会青年セミナー。8月11日(金)～8月16日(水)にかけて山梨県河口湖畔にある「四季の宿ポプラ」で開催された。日本からは神戸教区を除く各教区から1名ずつ合計10名の青年が参加し、韓国からは15名の青年が参加した。

▼1日目(8月11日)▼

午後3時、韓国側の参加者は成田空港に到着、そこからバスで東京駅へと向かった。日本側の参加者は午後5時に東京駅八重洲口に集合し、そこで韓国の青年と合流、バスで河口湖へと向かった。午後8時、宿舎に到着、すぐに夕食をとった。その後9時から開会礼拝とオリエンテーションを行った。開会礼拝は矢萩新一司祭の司式でおこなわれ、礼拝に引き続き日韓両聖公会の委員長があいさつをし、スタッフの紹介、参加者の自己紹介と続いた。まだまだ参加者は緊張した面持ちであったが、自己紹介などを通して徐々に打ち解けあっていた。その後は自由時間となり、ホテルの部屋で大宴会。ほとんどの参加者が初めて深く互いに接するため、まず文化や習慣の違い、食事の違いなどで驚くことが双方に多かった。韓国の青年はスタッフともども段ボール箱で辛ラーメン(韓国のカップ麺)とコチュジャンを持参して、初日の夜からソジュ(焼酎)とラーメンで異国文化に浸った。最初は言葉も通じないなかで、手遊びなどゲームをたくさんし、盛り上がり仲が深まっていった。参加者はみな、お互いに興味をもっているので話題はつきない。両国の若者文化にはポップミュージックなど共通するものもあり、ことにプリクラなどを互

いに見せ合ったりして盛り上がった。

日本の青年がとくに驚いたことは、韓国の兵役の事実である。韓国に兵役があることは知られるところだが、実際に兵役を終えた青年、また2か月後に兵役に臨む青年を前にしては、さまざまなことを聞かずにはいられない。どれくらい厳しいものなのか? いじめなどはあるのか? 恋人との仲は大丈夫なのか? などなど。兵役を終えた青年たちは「軍隊流」と称し、ラーメンのアルミ袋にお湯を注ぎ、器ではなく袋のままラーメンを食べたりしていた。日本の青年からすれば兵役など想像だにしないことであり、話を聞くなかで国や制度の違い、価値観の違いもあらためて感じる機会となった。

▼2日目(8月12日)▼

前夜の宴会疲れも考慮して、朝食の後、9時より朝の祈りを捧げ、その後今回のセミナーの趣旨説明が日本聖公会青年委員会委員長の野村潔司祭より行われた。

多くの問題を抱えていた第1回の日韓宣教セミナーから、歴史的なターニングポイントとなった1995年の日本聖公会宣教協議会と戦争告白、そして日韓協働委員会の正義と平和委員会への吸収に至るまでの一連の日韓の聖公会交流の流れについて説明があった。

このような流れをふまえて、この第1回日韓聖公会青年セミナーを通して、両国が過去の歴史を題材に向き合うという関係から、その歴史を携えて「東アジアの平和」という同じ方向を向いて、ともに歩いていく関係となっていくことを期待してこのセミナーを作り上げていきたい、という期待を語った。

なお、その場にて、今セミナーの成果を表現した何等かの共同の文章を作ってはどうかとの提案もなされた。

主題講演 1「聖公会の神学・宣教と公共性」

西原廉太司祭(中部教区岡谷聖バルナバ教会管理牧師、立教大学助教授、世界教会協議会中央委員)から、聖公会とはどんな教会なのか、聖公会の宣教とは何かを「公共性」という概念を用いてわかりやすく講演していただいた。聖公会がそもそも英国の宗教改革以来、常に地域の人々の課題・人間の尊厳と不可分な公共的な教会形成を行ってきたこと、また乱ベス会議の諸決議や日本聖公会宣教協議会宣言に、その質が豊かに流れていることなどをお話いただき、東アジアにおいて、そして各地域において預言的・公共的な具体的取り組みがどのように担えるかが問われている、という問題提起をされた。

主題講演 2「世界教会協議会(WCC)第 9 回総会を通して見えるもの」

昼食をはさみ、引き続き西原司祭に講演をしていただいた。午後の睡魔が襲うなか、参加者は熱心に西原司祭の講演に聞き入っていた。西原司祭は、世界教会協議会(WCC)第 9 回総会に参加された報告を中心に、私たちの教会が世界とどのようにつながっているのか、どのような可能性があるのか、などを、総会の写真なども参照しながら話していただいた。

全世界の教会が一つになって、死を強制するこの世界に「否」を、すべてのいのちに「然り」を告げることの重要性を、アフリカ・ツツ大主教の発言などをもとに語られ、そのなかでの聖公会の役割がきわめて重要であること、したがって日韓の聖公会の青年たちから上がる声は、とても大切な意味を持つことを力説された。

発題 (1)

一日講演をきいたため、やや疲労がたまってはいるものの、青年たちは元気に夕食をとり、その後の発題の時間へと入った。

今回のセミナーでは、日韓双方の青年が各国内で生じている問題を3つずつ取り上げ発表するプログラムが組まれた。一度に3つの発題を行っては、受け手側の情報処理も大変になるので、1組ずつ3回にわけて発表が行われた。そしてその発題ごとに「分かち合い」の時間がとられた。情報を個人的に受信するだけではともに集まる意味はなく、受けた情報を咀嚼し相手と共有するアウトプットも必要となる。

まず日本聖公会は「改憲問題」を取り上げた。日本国憲法の成り立ちとその性質、日本国憲法をめぐる昨今の動向について説明があり、東アジア地域において日本国憲法が果たしている役割などについて意見が述べられた。

大韓聖公会の青年は「イラク派兵問題」を取り上げた。イラク戦争とは一体何なのか、また韓国軍の派兵のいきさつについて説明があり、そこにどのような問題が潜んでいるのかという点について指摘がなされた。そして、韓国社会でのイラク戦争への反戦運動や教会の取り組みを紹介し、それをふまえて自分たちの反戦と平和へのビジョンが語られた。

双方の発題が終了したのち、全員で3グループにわかれて分かち合いの時間をもった。(写真 1)25名もの青年が集まると、その思想もそれぞれであり、多くの興味深い意見が聞かれた。憲法についても改憲派の青年との間で議論が起こるなどした。イラク戦争に関しては、在日・在韓米軍の存在が重視され、安全保障条約の不当性など、多くの思い・意見が出された。まったく別の問題を提起したかにも見えるが、グローバル化した世界において、ことに隣国同志の間柄では、無関係ではなく互いに深く根を張り関係している問題であるという認識を得ることができた、といった声も聞かれた。



写真1 グループでの分かち合い



写真2 金根祥司祭の説教

▼3日目(8月13日)▼

聖餐式

セミナー3日目は日曜日、宿舎のホールにて管区宣教主事武藤謙一司祭(当時)の司式のもと聖餐式を捧げた。金根祥司祭(当時)は説教のなかで、イエスが「わたしをたたえなさい」ではなく、「わたしはご飯。わたしを食べなさい。」と語られたことを、教会は深刻に受け止めなければならないと語られた。私たちの教会は、神と人とが一つになる食事とともにし、そして、イエスご自身がそうであられたように、私たち自身が、自分の命を貧しい民衆のなかに差し出すそのとき、私たちの命は生かされる。金司祭は、キリスト者として、あんぐり間として、今この時代にどう生きるのか、神の創られたこの世界にどう向き合っていくのかをともに考えていきたい、とこのセミナーに対する深い期待を述べられた。(写真2)

河口湖散策

聖餐式のあとは発表の分かち合いの時と同じ3つのグループにわかれて河口湖周辺を散策した。河口湖をモーターボートで周遊したり、ロープウェイに乗り天上山からの眺望を楽しんだり、富士急ハイランドでジェットコースターに乗ったりと、思い思いに午後のひと時を過ごした。

発題(2)

2回目の発題では、日本聖公会青年は「在日外国人」問題を取り上げた。発題のなかで2006年に改正された入国管理法に基づいて行われている入国審査の実態や、外国人が部屋を借りる際に生じる問題、介護分野における外国人労働者の受け入れに関する問題、在日外国人に対する政治家の差別発言など、在日外国人を取り巻く状況について、劇仕立てでわかりやすく紹介された。大韓聖公会の青年は「外国人労働者」問題を扱った。外国人労働者問題の背景と、外国人の労働力搾取や医療や労働災害、児童福祉などに関わる人権侵害の実態について報告がなされ、それに対する民間団体や聖公会の支援活動の現状について説明された。

双方の報告共に、青年たちにとっては、自国内部の問題も日頃意識的には目にしない問題であり、活発な質問が飛び交った。ことに日本の在日外国人問題では、特別永住者に対する指紋押捺の制度に批判が相次ぎ、政治家の差別発言に対しても厳しい批判がなされた。外国人登録法改正に向けた署名運動の活発な取り組みなども紹介され、青年の積極的関わりが提案された。

韓国の外国人労働者問題は脱北者問題ともかわり、「3K」労働に外国人が従事せざるを得ない社会構造について、政府レベ

ル、民間レベルでの取り組みに対する質問などがなされた。韓国ではことにフィリピン人移住労働者の増加による韓国人労働者の失業も問題となり、青年のなかでも外国人労働者の受け入れに疑問を呈する者も多数みられた。

映画『あんによん・サヨナラ』

夕食の後は、映画『あんによん・サヨナラ』を鑑賞した。『あんによん・サヨナラ』は戦後 60 周年企画の日韓共同ドキュメンタリー映画として制作された。この映画は、父親がアジア太平洋戦争中に日本軍に徴用され中国で戦死し、今も靖国神社に合祀され、その合祀取り下げを求めているイ・ヒジャさんと、日本人の支援者との関係をめぐるストーリーが展開していく。劇中では靖国神社神主へのインタビューや靖国神社に対する賛否両論のインタビューも折り重ねられている。日本の植民地支配が朝鮮半島の人々の人生や、日韓の人間関係に、今に至るまでどのような影響を及ぼしているかを考えさせられる内容であった。

映画の時間が長かったため、分かち合いの時間はとれなかったが、その後の交流の時間などに活発な意見交換があった。やはり韓国青年にとって（もちろん日本の青年にとってもだが）靖国神社は異様な空間に映り、なぜ合祀が取り下げることができないのか、なぜ「神様」にするのか非常に疑問となったようである。また靖国神社神主の不遜な態度や、執拗に攻撃を繰り返す右翼団体に対して憤りをこめた感想が聞かれた。靖国にとっての、日本にとっての「神様」「神社」とは何なのか、などの質問もあった。日本の青年はそれら質問に対し、靖国神社が明治以降に形作られた「国家神道」の集約的装置であること、明治天皇を祀り戦死者を英霊とすることで日本の侵略行為と尊い命の犠牲を正当化する装置であること、前近代の数ある神社とは根本的に存立

の基盤・性質・歴史を異にすることなどを説明した。

日韓両青年にとって、靖国神社が表明する立場、英霊論は肯んぜられぬところがあり、その疑問と批判、嫌悪感はその後のフィールドトリップと首相の参拝に接し大きな悲しみと怒りを生み出すこととなった。

交流の合間に「声明文起草委員会」と「パーティー委員会」が開かれた。声明文起草委員会とは、日韓聖公会青年セミナー終了時に今回のセミナーで学び得たことを振り返っての問題提起と社会への呼びかけとして用意する声明文を起草するもので、パーティー委員会とはフェアエルパーティーの計画立てを行った。

▼4 日目(8月14日)▼

セミナーも折り返しを過ぎ、後半戦へ。この日は朝から宿舎でのプログラムが続いた。

発題 (3)

最後の発題として、日本聖公会は「基地問題」を、大韓聖公会は「青年文化」をそれぞれ取り上げた。

日本における「基地問題」のなかでも、とくに沖縄における基地問題に焦点を絞り発題が行われた。基地の存在が沖縄の地、人々の暮らしにどのような影響を及ぼしているかについて説明があり、それら基地問題に対する日本聖公会の動きについて紹介され意見が述べられた。

大韓聖公会の発題では、韓国の現在の青年の文化が、自ら青年が造り出したというよりも、消費生活にあおられている現状を説明し、それに対する教会のオルタナティブな活動について紹介され、教会の果たす役割について意見が述べられた。

「基地問題」に関しては、日韓青年で活発な議論がおこなわれた。日本の青年は、

沖縄に基地が集中している現状や日米安保の問題性を指摘し、韓国の青年も自国の在韓米軍基地問題と重ね合わせ理解をしていた。ただ、韓国の青年のなかには、DPRK(北朝鮮)との関係性維持(勢力均衡)のために米軍は必要とする意見もあった。米軍の軍事力が直接的なDPRKに対する抑止力として働いているという。実際に兵役を終えた青年から多くこの意見が聞かれ、徴兵され国境警備などの任務に就いた青年がとらえる南北問題は、即自的な対応のとれる軍事力が不可欠ということであった。これにも賛否両論多くの意見がだされた。

韓国の青年が示した青年文化の問題は、非常に現代的であり経済成長や社会構造の変革など様々な要因を伴い複雑に起こってくるものである。日本でも同様の問題は早くから説かれているが、教会がコミットして問題を考えるということとはなかなかないことであり、様々に勉強するところがあつた。

昼食をはさみ、午後は管区ごとにこれまでの振り返りのミーティングを行った。このミーティングをもとに夜は全体会を開催し、管区ごとに話し合われたことを発表し、声明文の作成に向けて意見交換を行った。プログラム終了後、起草委員会は明け方5時までかかり声明文の起草案を作成した。

▼5日目(8月15日)▼

敗戦記念日を迎えるこの日、フィールド・トリップを行い靖国神社へと向かうプログラムが組まれた。出発前には野村潔司祭から、靖国神社の歴史と現状、その問題点について説明がなされた。10時に河口湖を出発したバスは中央道を東京へ向けひた走る。途中、サービスエリアで休憩をとった際に、東京方面に向かう大量の右翼の街宣車を目にした。おそらく靖国神社へと向かうのだろう。セミナー一行は東京に入

り、まずニューカマーの外国人の町として知られる新大久保を訪れた。そこでグループに分かれて昼食。それぞれ韓国料理などを楽しんだ。昼食をとりながら店のテレビを眺め、みな小泉純一郎首相(当時)の靖国神社参拝の報道を目にした。日本の青年は、「予想通り」という反応を示したが、韓国の青年にとって加害国である日本の首相が8月15日に靖国神社に参拝するということは考えもつかないことであり、その事実に変な衝撃と怒りを覚えていた。

昼食のあとは新大久保にある高麗博物館にて、博物館理事長の東海林勤牧師(日本基督教団)にお話を伺い、在日朝鮮人の歴史について学んだ。(写真3)その後再びバスに乗り九段下から靖国神社へ。(写真4)靖国神社周辺でバスを降り、境内に向かって歩いて行った。靖国神社周辺には、南京大虐殺や「従軍慰安婦」をでっち上げと主張する集団や街宣活動をする右翼、警戒する機動隊など、ものものしい雰囲気包まれていた。大鳥居をくぐり境内に入ると、旧日本軍の軍服を着た20名ほどの集団が、敬礼などを繰り返し示威行動を行っていた。

「朝鮮人排斥」などと書かれた横断幕もいたるところにみられ、セミナー一行は緊張のなか進んだ。みな8月15日に靖国神社で起こったことを目にし、言葉を失し、深い悲しみと憤りが渦巻いていたようであった。

フェアウェルパーティー

様々な思いを抱き分かち合ったセミナーも終盤を迎え、最後の夜となり、フェアウェルパーティーが開催された。パーティーは大韓聖公会青年による伝統的で華麗な踊りで幕を開けた。(写真5)色とりどりのチマ・チョゴリの衣装は美しい。その後、フルーツバスケットや人間知恵の輪などのゲーム、ダンスなどに興じた。そして記念写真を撮ったりプレゼントを交換したりし、最後に

は河口湖畔で花火もし、楽しいひと時を過ごした。

▼6日目(8月16日)▼

いよいよ最終日の朝。声明文の採択に向けて話し合いが行われた。

前日のフィールドトリップの際、小泉首相が靖国神社を公式参拝したことを受けて、声明文のなかに今回の公式参拝に抗議する項目を加えてはどうかとの提案が、韓国の青年から出された。この項目を加えるか否かについて、加えるならばどのような文言かをめぐり、大いに議論が展開された。これまでのプログラムや交流だけでは知ることのできなかった参加者のそれぞれの想いが、堰を切ったようにあふれ出てきて、多くの青年が涙ながらに言葉を紡いでいった。大韓聖公会の参加者は午後東京に戻り観光をすることが予定されていたが、その予定はキャンセルとなり、結局午後3時まで、予定を3時間超過して声明文が練り上げられ、完成を見た。その声明文は後掲しているのでご一読願いたい。



写真3 高麗博物館見学



写真4 靖国神社



写真5 韓国青年の踊り

2) 事前研修会要綱

(日本聖公会参加者及びスタッフのみ参加)

日程:2006年5月4日～6日

会場:名古屋学生青年センター

主催:日本聖公会青年委員会

5月4日(木・休)

17:45 開会礼拝

青年委員会委員長(司祭野村潔)からの挨拶

参加者の自己紹介、生活に関するオリエンテーション

18:15 夕食

19:30 セッション①

○アイスブレイキング

○セミナー開催の意図、今回の目的と作業内容の説明

○講義「宣教論の転換(ミッション)と日本聖公会の取り組み」

21:00 就寝前の祈り

交流

5月5日(金・休)

8:00 朝の礼拝

8:30 朝食

9:30 セッション②主題講演

「日韓の近代史・教会史、韓国の分かち合いの家と日本の教会のあり方」

講師:司祭香山洋人(立教大学チャプレン、編書に『聖公会神学、アジアからの再検討』)

12:00 昼食

13:30 セッション③ セッション②の続き

16:00 セッション④ 日本社会の諸課題についての学び

18:00 夕の礼拝

18:30 夕食

19:30 セッション⑤ 各課題についての意見の分かち合い

21:00 就寝前の祈り

5月6日(土)

8:00 朝の礼拝

8:30 朝食

9:30 セッション⑥

○グループ作業

○ワークショップ「朝食から世界が見える」

11:45 閉会礼拝

3) 事前研修会・香山司祭講演（レジュメ）

日韓聖公会青年セミナー事前研修会Session II

「日韓の近代史と教会史、韓国『分かち合いの家』と日本の教会の在り方」

2006年5月5日

香山洋人

09:30～10:30（第一場）「韓国朝鮮と出会うということ」

- ・ワークシート
- ・個人的な振り返り、「なぜ私は韓国・朝鮮に興味を持ったのか」
- ・戦後日本の韓国研究者の韓国認識に学ぶ(資料19～26頁)
- ・歴史学習①「キリシタン弾圧と朝鮮侵略」(資料37～39頁)

10:40～12:00（第二場）「韓国朝鮮について知っていること、知らないこと」

- ・歴史学習②「宣教師によらないキリスト教受容」(資料39～40、60～64頁)
- ・歴史学習③「日本の近代化と征韓論、脱亜論」(資料45～49頁)
- ・歴史学習④「日本の朝鮮植民地政策」

□□大日本帝国による朝鮮植民地支配の諸段階□□

●五期区分は徐京植『皇民化政策から諮問押捺まで』を参考にした。朝鮮総督の在任期間とは必ずしも対応していない。

■第一期:1875～1910年(「雲揚号事件」～日韓併合) *「準備期」

日韓併合に向けたプロジェクトの準備期間。1876年の江華島条約を皮切りに日本は朝鮮の独立を奪う不平等条約を押し付け、1904年の第一次日韓協約では日本人を「外交顧問」とさせて事実上朝鮮の外交権を奪い、1905年の第二次日韓協約では「韓国統監」による直接支配を確定、1907年の第三次日韓協約では韓国統監府が内政も行うことを決め、1910年ついに「日韓併合」が行われた。これと平行して、1902年の「日英同盟」で日本は朝鮮における権益確保を英国に承認させ、1905年の「日露講和条約」(ポーツマス条約)では朝鮮が日本の「保護下」に置かれることをロシアに認めさせ、1905年の第二回日英同盟ではポーツマス条約を追認して英国に日本の朝鮮支配権を承認させるなど周辺を固めながら朝鮮植民地化を進めた。

■第二期:1910～19年(寺内正毅、長谷川好道総督期。日韓併合～三一独立運動)

*「武断統治期」

「会社令」によって会社の設立を朝鮮総督府に許可制とし、「土地調査事業」によって朝鮮の土地を日本の公有地に繰り入れ、それらの土地は東洋拓殖会社や日本人入植者に払い下げられた。土地調査事業は一種の「詐欺」であり、これによって土地を奪われた農民は日本人入植者のもとで働く「小作農」となるか、「第一次大戦」(1914～18年)景気の労働者不足を補うため多くの朝鮮人は労働者として日本に渡航した。

1919年2月8日、日本にいた朝鮮人留学生を中心に朝鮮の自主独立と東洋平和を訴え「独立宣言文」が読み上げられた(東京神田の在日本韓国YMCA)。3月1日、33名の民族代表がこれを基に書き上げた「独立宣言文」がソウルのタプコル公園で読み上げられ「独立万歳運

動」がスタート、朝鮮全土で非暴力デモ「独立万歳運動」が起こった。これに対して日本の警察は暴力で弾圧を行い多くの死者が出た。陸軍大将だった寺内が総督だったのは1916年までで、三一運動弾圧にあたった長谷川総督は東学農民戦争(東学の乱)鎮圧に向かった部隊の司令官であり、第二次協約当時の韓国駐留軍司令官でもあり、武力による併合の最前線にいた人物だった。

～朝鮮独立宣言の冒頭～「われらは、ここにわが朝鮮の独立と、朝鮮人民の自由民たることを宣言する。これをもって世界万邦につげ、人類平等の大義を明らかにし、かつこれを子孫におしえ、民族独立を天賦の権利として永遠に保持させるものである。われわれの背後にある五千年の歴史の権威によってこれを宣言し、二千万民衆の忠誠を合してこれを宣明し、恒久にかわることなき民衆の自由な発展のためにこれを主張し、人類良心の発露にもとづく、世界改造の一大機運に順応し、これとともにすすまんがために、これをなすものである。」

■第三期:1920～30年(齊藤実総督期。産米増殖計画～) *「文化統治期」

1918年の米騒動以降、戦争遂行のために米の安定供給が必要となった日本は1920年から産米増殖計画を推進し朝鮮で米の生産量を増やして日本に送る計画を立てた。これによって朝鮮での米の生産は20%増加したが、朝鮮人一人当たりの米の消費量は40%近く減少した。1920年代に在日朝鮮人は27万人、1930年代には30万人に達した。

日本のアジア侵略の兵站基地として朝鮮を利用する体制を整える一方、「三一独立運動」を経験した総督府は、1919年8月、朝鮮総督に海軍軍人の齊藤実が就任。植民地経営の手法を武力から文化的支配に転換した。齊藤は宣教師たちを特別に遇し取り込もうとした。しかし、1924年、カトリック信徒児童による神社参拝拒否が起こる。1925年にソウルの南山中腹に「朝鮮神宮」が建てられ学校を中心に神社参拝の強制が盛んに行われる。神社参拝を強制する総督府側と特に宗教的理由からこれを拒否するキリスト教、ミッションスクールとの間で緊張が生じた。

総督府は「神社は宗教にあらず」との理由で参拝を求めた。日本基督教団も朝鮮のキリスト教会に対して同じ理由で神社を参拝するよう説得した。

ジャイアンツのイ・スンヨブは、今年1日9日に行われた巨人軍キャンプ恒例の神社参拝に参加しなかった。韓国の聯合ニュースは「参拝拒否は当然、日本の軍国主義の象徴である神社に訪問することはありえないことだ」とイ・スンヨブを賞賛。YTNは「チーム内で孤立しないか」との憂慮の声も伝えた。

1923年、関東大震災で多くの朝鮮人が虐殺された。これは:「朝鮮人が井戸に毒を入れた」というデマにおどらされた人々が自警団を組織し犯行に及んだといわれているが、デマの発信源は警察といわれ、警官や憲兵が直接虐殺に参加したともいわれている。この事件の背後には1919年の三一独立運動の経験があると言っているだろう。

■第四期:1931～38年(宇垣一成総督期。) *「戦時体制期」

ドイツ留学も果たしたエリート陸軍軍人であった宇垣は、「朝鮮国民ほど懦弱、無気力な

るの人種は宇内少なかるべし…斯の如き人民は、世界の発達を妨ぐることすくなからず、今日に至るまで優勝劣敗の世に処して斯の如き国の存在ありしは実に不可思議」と語るほど徹底した朝鮮蔑視観のかたまりであったという(朝鮮新報2005.9.7の琴秉洞の記事から引用)

いわゆる「軍隊慰安婦」は1937年ごろから制度化されたといわれている。1938年の在日朝鮮人数は80万人。

■**第五期:1939～45年(南次郎、小磯国昭、阿部信行総督期。)** *「ファッシ。統治期」

南次郎こそは「朝鮮皇民化政策」の中心人物であった。1937年「皇国臣民の誓詞」三条制定、38年「陸軍特別志願兵令」と「国家総動員法」を施行、39年「国民徴用令」を施行、40年「創氏改名」実施、41年「国民学校令」施行、これにより低学年の学校教育から民族語は禁止、日本語を「国語」とした。42年ついに「徴兵令」が施行される。(朝鮮新報2005.10.12の琴秉洞の記事を参考にした)。朝鮮からは「官斡旋」方式で大量の朝鮮人が日本に送られ、45年の在日朝鮮人数は230万人以上。

日本の植民地支配によって朝鮮人が受けた被害とは

- ・物質的被害と精神的被害
- ・分断
- ・植民地支配の産物としての軍事独裁政権

12 : 00～13 : 30 (昼食)

13 : 30～15 : 00 (第三場)「**韓国の教会と日本の教会**」

- ・「分かち合いの家」について(資料155～170頁)
- ・identity = 自分の正体について考える

「しかしそのような苦しみと流浪の日々にも、初めから終わりまで朝鮮民族はひとつの朝鮮民族でした。朝鮮民族は中でも在日朝鮮人は、自己がどの『国家』に属しているかではなく、どういう人々に属しているかということによって自己の正体性を認識してきました。植民地支配と民族分断という苦難の歴史を共有することで、ますます自己をひとつの民族に形成してきたのです。」(徐京植『皇民化政策から指紋押捺まで』—在日朝鮮人の昭和史—、岩波ブックレット、1989年、4頁)

15 : 00～15 : 30 (ディスカッション)

- ・日韓の近代史
- ・日韓の教会史
- ・韓国『分かち合いの家』と日本の教会の在り方

ワークシート

1、自分の中のイメージについて

- 1) 以下のデータは1964年成人を対象とした「好きな国、嫌いな国」のアンケート調査結果です。あなたの想像で空欄に国名を入れてみてください。

	好きな国		嫌いな国
1	(a)	1	ソ連
2	イギリス	2	中国
3	スイス	3	(b)
4	フランス	4	(a)
5	西ドイツ	5	西ドイツ
6	インド	6	イギリス
7	ソ連、中国	7	インド
8	(b)	8	フランス、スイス

- 2) 以下のデータは1990年大学生を対象とした「好きな国、嫌いな国」のアンケート調査結果です。あなたの想像で空欄に国名を入れてみてください。

	好きな国		嫌いな国
1	(c)	1	南アフリカ
2	(a)	2	(a)
3	スイス、オーストラリア	3	中国
4	イギリス	4	北朝鮮
5	中国	5	日本
6	スイス	s	ソ連
7	ドイツ	7	(b)
8	フランス	8	フィリピン

(西川長夫『増補国境の越え方』平凡社ライブラリー、より)

- 2、韓国人と接する際にこれだけは学んでおくべき(知っておくべき)と思われることがらがあれば書いてください。*キーワード、箇条書きなど何でも。

.....

.....

.....

4)共同声明

日韓聖公会青年セミナー共同声明

2006年8月11日～16日、山梨県河口湖畔に集まった私たち「日韓聖公会青年セミナー」の参加者は、「日韓聖公会の宣教課題と東アジアの平和」のテーマのもと、「聖公会の神学・宣教と公共性」という主題講演、青年による6つの発題、靖国神社などへのフィールドトリップ、また数々のレクチャーなどの学びと交流の時をもった。

これらを通して互いの現状を認識し、両国間における友好と平和に関して、イエス・キリストの愛を実践するクリスチャンとして行動しなければならないという共通の理解を得た。私たちは、すべての抑圧、差別、暴力と、疎外として現れる非倫理的、非人間的な現象に反対する。特に、私たち聖公会青年は、青年イエスの足跡に従う弟子として私たちの究極的な目的である平和を守る神様と共に、一つの心で生きることを決意する。

そして私たちは両国間だけでなく、世界の平和について考え、行動していくために、今後も日韓青年の交流の「場」が維持されることを希望する。その上で、以下について決議した。

- 1、私たちは教会内の青年活動の活性化と財政支援の必要性を認識し、これを増進させるための多様な青年活動の可能性を模索する。
- 2、私たちは、両国を取り巻く諸課題についての認識不足を認め、互いを理解して東アジアの平和に向けて努力し、持続的な交流を行っていくために多様なネットワークを活用する。
- 3、私たちは、少数者の人権が無視されてきた過去を反省して、これからは、人種と国籍を問わず、個人の人権が尊重される社会の形成に尽力する。
- 4、私たちは、差別と暴力によって引き起こされた社会的課題にこれ以上沈黙しない。よって、日韓青年たちは社会的課題に深い関心をもって問題解決のために努める。
- 5、平和を実現するためには武器や武力の放棄が唯一の方法であり、戦力の不保持を宣言する日本国憲法第9条はその具体的な方策である。よって平和を求める私たちは、平和の実現の妨げとなり得る、憲法第9条改定に断固反対する。
- 6、私たちは、8月15日に日本の小泉純一郎首相が靖国神社に公式参拝したことに厳重に抗議する。

2006年8月16日
「日韓聖公会青年セミナー」参加者一同

5)主旨説明(レジュメ)

2006年日韓聖公会青年セミナー主旨説明

日本聖公会青年委員会
委員長 司祭 野村潔

- 1、第1回日韓宣教セミナー(1984年)の問題性と青年による批判
*資料:日韓聖公会宣教協働20周年記念大会「野村レポート」
- 2、日本聖公会宣教協議会の開催(1995年)と日韓青年交流の開始
*資料①:日本聖公会 '95 宣教協議会「宣言」
- 3、日本聖公会における「戦争責任告白」
*資料②:日本聖公会第49総会(1996年)決議第34号
- 4、日本聖公会の宣教方針と宣教課題
*資料③:日本聖公会第53総会(2002年)提出「日本聖公会宣教方針と宣教課題」
- 5、日本聖公会における「機構改革」問題(2002年)
- 6、日韓聖公会宣教協働20周年記念大会(2004年)での確認
*資料④:日韓聖公会宣教協働20周年記念大会共同声明
- 7、新たな日韓聖公会青年交流の方向性に関して
*資料⑤:日韓聖公会青年交流に関する日本聖公会青年委員会見解
- 8、2006年日韓聖公会青年セミナーへの期待



6) 主題講演1 (レジュメ)

以下のレジュメは、事前にいただいた西原司祭の講演原稿を元にスタッフが作成したものです。

聖公会の神学・宣教と公共性

西原廉太

1 はじめに

戦前～現在の日本 「滅私奉公」(侵略戦争への負担、過労死)
最近 「滅公奉私」(社会との断絶)

公共哲学:「公私二元論」を克服し、「公共性」という概念に意義を見出す。

公共性:・個人の尊厳を大切にすることによって、他者とのつながりを切り開く。
・国家の枠組みに組み込まれない。
・社会・共同体に対して責任応答的に関わる。

キリスト教会:古代から「公共的」な共同体

2 「公共性」とは何か

「公共性」の概念

- ×「私」が「公」に従属
- ×関係性を重視しない「個人主義」
- ×悪しき「共同体主義」・「全体主義」
(日本の文脈で用いられがちな「公共」)
- ×「国家、行政に関わる公的な事柄一般」
→「公共」ではなく「公」
- 他者とのコミュニケーションを通して、
個人の存在や尊厳が確立
- *「公」でもなく「私」でもない



3 聖公会の神学・宣教史に見る「公共性」理解

■リチャード・フッカー

(アングリカニズムの基礎を築いた16世紀英国の神学者)

「参与」を強調

▼個々を尊重しながら共に分かち合う。

*「父と子のコミュニティー」への参与

*「隣人」への参与(他者との交わりが、「キリストのからだ」としての結びつきを保証)

「公禱」▼「参与」を日常の中で現実化させる

×静的なもの、私的なもの

○公共的でダイナミックな運動(「神の言」、応答する「民衆の祈り」)

* 「公禱」=「公共の祈り」、『祈禱書』(The Book of Common Prayer) = 『公共の祈りのための書』

「サクラメント」

社会の中での民衆の間関係性の上に成立。

サクラメントで表明されたものは、常に私たちの日常生活や現実と切り結ばれる必要。
(教会の預言者的・公共的働きの基礎)

このようなリアリティを伴わない礼拝は、単なる「外面的儀式」。

■ジョン・ヘンリー・ニューマン

(19世紀英国における「オックスフォード運動」の中心人物。)

英国教会

ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の "Via Media" を歩む唯一の真正な教会

* ローマ・カトリック教会:様々な迷信・腐敗、過度な教皇絶対主義(中世以降)

* プロテスタント諸派:古代教会からの使徒的継承性を放棄

当時の英国の沈滞状況

「教会」が「公」である「国家」の支配下に従属→「公共性」を放棄

本来の "Via Media" 性の実践

▼教皇絶対主義という「公」的なローマ・カトリシズム

▼パリッシュ制度などの「公共性」を廃棄し、信仰を「私」に閉鎖しようとするプロテスタンティズム

→「公」でもなく「私」でもない、「公共」的な教会論

* 「国家教会」(State Church)、「国民教会」(National Church) → 「公共教会」

→各地域レベルでの日常的な信仰態度までも問う

キリスト者としての「公共性」を意識化

→貧困対策などで教会は自らの社会的責任を自覚

■「キリスト教社会主義運動」

(英国教会の神学者、フレデリック・デニソン・モーリスが中心。「労働者協会」を組織し、立法、教育、公衆衛生等の広範な領域に及ぶ運動を展開。)

英国教会の役割

・国家が本来担うべき正義の領域における仕事を遂行させるための「見張り」

・国家が担わないか、もしくは担えない社会的働きを積極的に実践

→教会の「公共」的使命

■ウィリアム・テンブルカンタベリー大主教

* 19世紀末～20世紀初頭 教会に個人主義の波が押し寄せていた。

(政治・社会といった事柄は政府、国家の専有事項)

教会が積極的に社会の中へ踏み込んで行く必要

教会の社会的働きと教会の sacramental な性質とは不可分

教会の関心は、全ての被造世界→教会の働きは、教会の枠内に留まることは許されない

* キリストの犠牲を記念=社会的隣人を覚える

あらゆる差別、抑圧は乗り越えられるという確信が表現される。

* 陪餐=キリストのミニストリー『に与かり、教会から世界、社会へと派遣

* パンとぶどう酒=神と人間の協働性と社会性の象徴

→聖餐を未来社会のヴィジョンとして象徴的に理解

4 アングリカニズムにおける「公共性」理解の可能性

* 「アングリカン・コミュニオン」

世界約160ヶ国、34管区、アングリカンの伝統も合流した4合同教会、フル・コミュニオン関係にある4教会、約7800万の信徒を擁する大きな有機体

* 英国教会

教会は常に国民全体に対して責任を持つ、というのが基本的スタンス
(時に国家政策と教会政策の間には大きな緊張関係をはらむ)

教会と社会の関係についてのアングリカニズムにおける基本原則

"critical solidarity" (批判的連帯)

"solidarity" : 社会が必要とする事柄に対して教会は共感し、責任を持つ

"critical" : 教会は常に国家や権力とは距離を保ち、必要に応じて批判

→実際に展開される基盤: 「パリッシュ」制度

* 国教会というシステムの中で発展した形態、支配的統治機能

英国教会は数世紀前までは、英国教会の信徒=英国国民

教会の "pastoral care" (牧会的配慮) : パリッシュに住む信徒への配慮

パリッシュの全地域住民に対する配慮

→地域社会における課題に対して責任を持つ

→現代アングリカニズムの「公共性」

新たな世界・教界の秩序の中に現れつつある「コイノニア」の新たな次元

アングリカン・コミュニオンの「宣教における協働」(partnerships in mission)

* 世界聖公会ネットワーク、宗教間対話

→"Top-Down" 方式ではなく、徹底して"Bottom-Up" 式の神学的方法論

「風船」の教会論/「鳥の巣」の教会論

アングリカニズム : 人間の生のあらゆる領域をその神学的探求の対象とする。

コミュニオン : 神学、法憲法規、歴史と文化、コミュニケーションによる自発的な関わり
多くの分かれた要素の中にこそ存在

「薄い教会論」: 教会についての抽象的で非現実的な陳述

「厚い教会論」: 神の和解と癒しの働きの具体的な経験に基づく

5 おわりに

現代アングリカン・コミュニオンの宣教論

「宣教の場」(1988年ランベス会議)

宣教の場は全世界である。すなわち、飢えた世界、不正な世界、恐れる世界、恐怖の世界である。汚染され、回復不能な損害の危険の中にある世界である。しかし、それはまた、善意と愛が溢れている美と希望の世界でもある。正義と完全と平和を求めて苦闘している世界である。神に属する世界である。

「聖公会の宣教理解」(1988年ランベス会議)

- ①神の国の福音を宣言すること。
 - ②新たに信徒となった人を教え、洗礼を授け、養育すること。
 - ③愛の奉仕によって人間の必要に応えること。
 - ④社会の不正な構造を変革するよう務めること。
 - ⑤被造物の本来の姿を保護するように務め、地球の命を支え新たにすること
- *⑤は、1990年ACC-8にて追加。同年のソウルにおける世界協会協議会(WCC)のJPIC(「正義と平和、被造物の保全」世界会議)と連動するもの。

「宣教についての嘆願」(ACC-8)

教会の宣教は、「社会の不正な構造の変革を求める」というキリストの仕事です。私たちがこの時代の権力や為政者に向かって、真理の言葉を預言者的に語ることを恐れてきたことを臆悔します。私たちがこの新しい時代を、悔い改めと、懺悔と変革に導くことができる知恵と勇気をお与え下さるよう祈ります。主よ、お聴き下さい。

* 重債務貧困国(Heavily Indebted Poor Countries)の債務(1998年ランベス会議の最重要課題)

アングリカニズムにおける「公共性」理解がアジア、ことに日本、韓国、東北アジアというコンテキストの中で、どのように具体化されるのか?

* アイヌ民族、被差別部落民衆との連帯的歩み→教会の公共性を具体的に示してきた歴史的運動→このような貴重な歩みが日本聖公会において大切にされてきたとは言い難い。再評価は1990年代に入ってから。

1995年8月「日本聖公会・宣教協議会」(日本聖公会第46定期総会の決議に基づく。)

テーマ:「日本聖公会の宣教一歴史への責任と21世紀への展望」

- ・「歴史、世界、社会、民衆の中で働いておられるキリストに生きる教会」を目指す。
- ・日本聖公会が、アジア太平洋諸国への侵略戦争に荷担したことを、痛みをもって告白し、懺悔。

* 翌年の総会で、正式に「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議。

→この歴史認識を前提として、日本聖公会の「宣教」を宣言

「『福音伝道の十年』の中間年であって、わたしたちは、教会が『神の宣教』のために存在することを改めて確認します。この場合の『宣教』とは、歴史の中で働く神の召しと導

きのもとに、今ある状況を固定化させず、絶えず変革のプロセスを大胆に歩むことを意味します。人権・正義・環境は宣教課題の中心です。わたしたちは『小さき者』とおとしめられ、苦しんでいる人々の社会的立場、諸権利の回復をめざす教会となることを決意します。わたしたち日本聖公会は、この宣教の召命への応答を常に新たにしなければなりません。

わたしたちは、社会から排除された人々、抑圧された人々と共に被差別状況とたたかいます。そして、支配者の物語にではなく、民の物語に聞きつづけます。そこから、わたしたちは、わたしたち自身の『物語』を語ります。自らの言葉で日本聖公会の歴史と現在、そして未来を語ります。こうした努力をして初めて、わたしたちは主イエス・キリストの福音を受肉化できると信じます。また、わたしたちはこの世界、この社会の中でより預言者的使命を果たすことが求められています。とりわけ、日本聖公会は、差別、抑圧を生み出し支えている社会構造自体を変革するための地の塩、世の光とならなければなりません。

わたしたちの参与する『神の宣教』とは、これらすべてを包括するものであると理解します。」

→教会が「公共する」教会になるための規範

→どれだけの具体的、日常的な実践、働き、課題への取り組みを担えるかが、問われている。

* 日韓聖公会の青年：預言者エレミヤのように、その方向性、ヴィジョンを提示する可能性、責任が与えられている。



7)主題講演2(レジュメ)

以下のレジュメは、事前にいただいた西原司祭の講演原稿を元にスタッフが作成したものです。

世界教会協議会《WCC》第9回総会を通して見えるもの

西原廉太

1 はじめに

2月14日～23日、ポルトアレグレ(ブラジル) (6年から8年の間隔で総会)
プロテスタント、正教会、聖公会、合同教会その他の348教会、691人の代議員
スタッフやスチュワードも入れると四千人以上

日本: 5名 韓国: 青年スチュワードも含めて多数の参加者
テーマ: 『神よ、あなたの恵みのうちに、世界を変革してください』

21世紀最初のWCC総会としての自覚を十分に認識

2 戦争を止めることができなかつた世界教会

第8回総会: ハラレ(ジンバブエ)「あらゆる暴力の克服」(1998年)→イラク戦争
第9回総会のキーワード

「ラテン・アメリカの総会」「傾聴の総会」「青年の総会」「祈りの総会」

- * 民衆たちの「いのちの祝宴」(a festa da vida)こそ、エキュメニカル運動の原動力
- * ルラ・ブラジル大統領来訪(パウロ・フレイレの名前に何度も言及)

3 「コンセンサス方式」とその意味

1998年のハラレ総会での最大の懸案: WCCと正教会との関係

* 東方正教会、オリエンタル正教会サイドの意思が総会に反映されない、という不満
新たな決議方式「コンセンサス方式」←「多数決方式」(西欧型議決方式)

4 青年たちの存在感

「青年たちは未来のエキュメニズムの担い手ではなく、現在の牽引力」

正式代議員100人以上、スチュワードとして150人以上、「ユース・キャンプ」のスタッフが約200人。これ以外にも、「ムティラオ」(展示)、ワークショップのブースなど。

* 韓国の青年たち: 朝鮮半島平和統一をテーマに出展、非常に注目を浴びた。

* 日本からの青年にはひとりも出会えず。

→次回は、ぜひ日本からも。また、日韓の青年が何か共同してプログラムを提供できないか。

次期総会期の中央委員のノミネート案に、青年たちが抗議。

アングリカンの青年たちのミーティングも開催。

* アングリカン・コミュニオンキーロン総主事や、キャメロン主事も参加。

* 2008年のランバス会議に合わせて世界青年大会を開催したい、という声があがり、キーロン総主事が検討を約束。→大会が実現すれば、ぜひ参加を。

5 エキュメニカル対話の意味

『ひとつの教会となるための召し』の採択

ベネディクト16世が新教皇となって最初の総会

- * 総会に祝福のメッセージ(WCCとの堅い協働関係の継続、発展を表明)
- * ウォルター・カスパー枢機卿「エキュメニカル対話とは、文書を取り交わすだけの作業ではない。直接に顔と顔を合わしながら、共に正義と平和のために闘うこと。特に、宗教間対話に共に取り組むことである」と指摘。

ペンテコステ諸教会の発言

- * 西欧のメインライン教会がペンテコステ諸教会に対する「二流教会」的見方を払拭しない限り、深いところでの対話は成立しない。

6 カンタベリー大主教来訪と「聖公会の多様性」

- * 「聖公会は多文化、多様というのは結構だが、それを具体的に表現する感性が必要だ」(スリランカの子ケラ主教)
- * 多様な、一本、一本の小枝がつながれて出来上がっている「鳥の巣」。その巣の中で新たな生命が生まれ、育まれる共同体こそが、アングリカン・コミュニオン。

7 デズモンド・ツツ大主教の登場

「アパルトヘイトがなぜこれほど長く続いたのか。それは、教会が分裂していたからだ」「この世界に住むすべての者がインサイダー(内なる者)であり、アウトサイダー(外なる者)はただの一人もいない。ブッシュも、ビン・ラディンもみんな神に招かれた家族なのです。ゲイもレズビアンも、みんな愛されているのです。皆、神に愛されている者たちだ。」

21世紀最初のWCC総会での確認

- WCCが1970年代に果たした人権・正義・平和という課題をめぐるグローバルな働きを、今一度、世界教会は果たしていくのだという重大な決意
- 世界の平和と正義の実現のためには、キリスト者がひとつとなることが必要条件

世界のエキュメニカル運動の目標

- すべての死、死を強制するものに「否」を告げる。
- すべての「いのち」、「いのち」育むものに「然り」を宣言する。
- すべての人間の尊厳が守られる世界、神の国を実現する。

ツツ大主教を先頭に平和行進

8 朝鮮半島平和統一祈願・南北合同聖餐式

サミュエル・コビアWCC総幹事「この場こそが、国家の平和統一の先取り」

- * 韓国の青年たち： 朝鮮半島の平和統一のシンボルマークをデザインしたバッジを参加者に配布。

総会終盤には、参加者の大多数はこのバッジを胸にする。

9 世界教会協議会におけるアングリカンの存在

- * 8人のWCCのプレジデントの一人： メアリー・ターナーさん(英国教会)
- * 中央委員： 日本から西原、韓国からは基督教長老教会の若い女性の幹事が選出

10 おわりに～『神よ、恵みの内に、世界を変革してください。』～

→日韓聖公会の青年たちも、このメッセージとは決して無縁ではない

『神よ、恵みの内に、世界を変革してください。』

世界教会協議会(WCC)第9回総会からのメッセージ 祈りへの招き

キリストにあって、私たちは、姉妹、兄弟のみなさんに挨拶を送ります。世界各地から、諸教会代表がブラジル・ポルトアレグレに集まり、新千年期、最初の十年にあって、ラテン・アメリカにおいては初めての、世界教会協議会・総会を開催しました。私たちは、この地で、a festa da vida (いのちの祝宴) に招かれました。私たちは、祈り、聖書に聴き、一致と多様性の内に、共に闘い、共に喜び、コンセンサスの精神で、互いにていねいに耳を傾け合うことを願い、求めます。

2006年2月、私たちは、総会に参加した人々の母国や地域で、日々発せられている叫びがあることを知りました。それは、災害や暴力を伴う衝突、抑圧や苦難の状況などによってもたらされる叫びです。しかし、私たちはまた、人々が生きる生活の場、教会、社会、世界の中に、変革への証しをもたらされる神に、力を与えられるのです。

私たちは、総会の諸報告と諸決議にしるされた、明確な挑戦と行動への招きを、すべての諸教会と世界に届けます。それは、すなわち、キリスト者の一致の探求、「暴力の克服の十年」中間年にあたり私たちの二の運動への取り組みの再確認、グローバルな経済的正義の実現、宗教間対話、すべての女性と男性の世代を越えた参与、公共的諸課題についての教会と世界への共同声明、です。

今回の第9回総会のテーマは、『神よ、恵みの内に、世界を変革してください』という祈りです。祈りの内に、私たちの心は変革されます。それゆえに、私たちは、私たちのメッセージを祈りとして届けます。

恵みの神よ、祈りの内に、私たちは共に、あなたのもとに立ち帰ります。

あなたは、私たちを結び合わせるお方だからです。

あなたは、父と、子と、聖霊なる唯一の神であると、私たちは信じます。

あなたは、私たちを良きことのために、力を与えてくださいます。

あなたは、私たちを、キリストの名による宣教と奉仕のために、世界中へと派遣されます。

私たちは、あなたと、すべての人々の前で、告白します。

私たちは、仕える者には相応しくありませんでした。

私たちは、あなたが造られたものを、貶め、虐待してきました。

私たちは、いたるところで分裂することによって、互いを傷つけてきました。

私たちは、環境破壊、貧困、人種差別、身分差別、戦争、大量虐殺に対して、断固たる行動を取ることができてきませんでした。

私たちは、犠牲者であるだけでなく、時に暴力をふるう者でもあります。

これらすべてのことを思う時、私たちは、受肉の内に、私たちを救われ、

また、愛するとは、いかなることかを教えられるイエス・キリストの弟子として、失格でした。

神よ、どうか私たちをお赦してください。そして、私たちに、互いに許しあうことを教えてください。

神よ、恵みの内に、世界を変革してください。

神よ、すべての被造物の叫びを聴いてください。

水、空気、大地、そしてあらゆる生けるものの叫びを聴いてください。

搾取され、周縁化され、虐げられ、不当に差別された者たちの叫びを聴いてください。

立ち退かされ、沈黙させられ、人間の尊厳を顧みられなかった、

すべての者たちの叫びを聴いてください。

さまざまな病い、戦争に苦しむすべての人々の叫びを聴いてください。
真理に目を背け、記憶を歪め、和解の可能性を拒絶する傲慢な者たちの罪に
苦しむすべての人々の叫びを聴いてください。
神よ、権力の座にあるすべての者たちが、正しい決断ができるように、導いてください。

神よ、恵みの内に、世界を変革してください。

私たちは、この世界にすでに在る、あなたの祝福と希望のしるしに感謝します。
そのしるしは、あらゆる世代の人々の内に、
また、信仰の内にすでに世を去った人々の内にあります。
そのしるしは、暴力を克服するための、さまざまな取り組みの内にあります。
それは十年の間だけのものではなく、永遠なる課題です。
そのしるしは、私たちの諸教会の間で、また他の信仰を持つ人々との間に始まっている対話の内に、
互いを理解し、尊重しあうための、深く、開かれた対話の内にあります。
そのしるしは、特別な状況の中で、また、日常の中で、
正義と平和のために、共に働くすべての人々の内にあります。
神よ、イエス・キリストの福音と、復活の約束に感謝します。

神よ、恵みの内に、世界を変革してください。

神よ、聖霊の力と導きによって、
私たちの祈りを、決して空しい言葉にはしないでください。
私たちの祈りを、あなたの生ける言葉に対する、
抜き差しならない応答としてください。
それは、変化へと向けた非暴力直接行動の内にある応答です。
それは、大胆で、明快で、特別な、連帯、解放、癒し、共感の働きの内にある応答です。
それは、また、ただちにイエス・キリストの福音に通じるものです。
あなたの似姿に造られたすべての人々を愛し、接するために、
被造物を配慮し、すばらしい多様性の内にある、すべてのいのちに然りと言うために、
どうか、私たちの心を開いてください、

私たちが、変革されるあなたの協働者となるために、
私たちは、私たち自身を献げます。
そして、私たちを変革してください。
それは、唯一のイエス・キリストの教会の、
完全で、見える一致を目指して取り組むために。
それは、私たちがすべての人々の隣人となるために。
新たな天と、新たな地が来る中で、
あなたの御国が完全に示されることを、熱望しつつ、そして、待ちながら。

神よ、恵みの内に、世界を変革してください。父と子と聖霊の名によって。アーメン。

(訳:西原廉太)

(第二部以上)

8) 『改憲問題』グループ発題

(日本聖公会)
発表グループ
浮田・影山・広谷

- 1) 日本国憲法をめぐる昨今の動向
- 2) 日本国憲法の成り立ちと性質
(歴史的経緯と特徴)
- 3) 改憲論争(憲法をめぐる諸説・主張の紹介)
- 4) 東アジア地域において日本国憲法が果たす役割
- 5) 私見(平和憲法という視点から、未来への展望を含めて)



1)日本国憲法をめぐる昨今の動向

日本国憲法をめぐることは、制定から今日に至るまで、公的・私的を問わず、常に見直しや改正などの提言がなされており、いわゆる「改憲論」というものは、最近になって突然降って湧いた議論ではない。ただ、近時は、日本国憲法が身を置く環境の側の著しい変化によって、憲法と現実との乖離が甚だしくなり、それによる憲法の規範性の低下が懸念されるに至ったため、改憲というものがより現実味を帯びて語られるようになってきたようである。

国レベルでは、かつて、内閣に憲法調査会が設けられたことがあるが、同調査会は、1957年以來、7年にわたって調査審議を行い、1964年に内閣及び国会に報告書を提出した。しかし、この憲法調査会は1965年6月に廃止された、という経緯がある。

他方、国会において、憲法は本会議、常任委員会、特別委員会、参議院の調査会等の場で個別的、具体的に議論されてきたが、憲法制定後50年余を経、憲法について広範かつ総合的に調査する機関を国会に置く必要性が議論されるようになった。そして時代の流れと共に現実社会の変化があり、第145回国会において国会法が改正され、2001年1月20日、両院に憲法調査会が設置された。2005年4月には、両院の各憲法調査会が憲法改正問題に関する意見書を公表した。

また、「改憲論」と一言では済ますことのできないほど、議論の方向性は多岐にわたっている。この発表では、「東アジアの平和」というメルクマールの下、改憲問題の最大の焦点でもある、恒久平和主義、戦力不保持を定めた憲法前文と憲法9条の改定の是非に焦点を絞る。

2)日本国憲法の成り立ちと性質

【成り立ち】

日本国憲法の制定には、国の外からと内からの双方の力が働いている。

外からの力: 日本の敗戦により、「ポツダム宣言」を実施するために必要な措置をとる連合軍最高司令官のもとで、大日本帝国憲法(明治憲法)の変革が求められるようになったこと。

内からの力: 戦時中、軍部の行った政治支配によって、敗戦当時、もはや戦前の議会制度をたんに修復させるだけでは、国民の期待する「民主主義」を実現することができないまでに、明治憲法体制は深く傷ついていたこと。

b) **現状は維持**する→現状と憲法の文面との乖離を埋めるために憲法の文面を現状に合わせる、というものである。

c) 現状よりも**平和性を緩和**するもの→例えば、侵略戦争以外ならば武力行使ができることを明文化するなどである。

↓

我々が最も問題意識を持つべきは、c)のような見解であると考える。

・ c)の見解の主張理由、根拠

→冷戦が開始したことに伴いアメリカの援助を行う必要が生じ、冷戦終結後もさらなる軍事的支援が世界において求められるようになった。そうした求めに対応し、軍力を動員し国際貢献するために、現行9条は廃止すべきであり、目下、軍力での挨拶がもっとも有効な国際貢献である。

→日本の実質的な軍事大国化、既成事実である自衛隊の海外での武力行使行為を正当化すること。

→世界の経済大国アメリカへの軍事支援を十分に行うことによって、アメリカからの要求に応え、日本経済をより強固にする。

→自前の軍事大国になることによって、アメリカ追従の現状を脱し、世界の市場における日本企業の活動の自由と独立を得るため。

→自衛隊を軍隊にしない限り安全保障理事会常任理事国にはなれないというブッシュ政権の圧力。

→日米同盟の『抑止力』を減退させる危険性をはらんでいるのみならず、アジアにおける集団的な安全保障協力を効果的に推進する上での障害となる。

→国際テロリズムや北朝鮮の脅威。

→有事・非常事態への対応。

iii) 変えない派の理由・主張

→国際平和のために戦争を放棄した日本国憲法の正義を純粹に保持する。

→戦争を行える国にするということは、国際紛争を巻き起こすということにつながるからである。

→平和憲法の理念は21世紀の国際社会の規範たり得るものであり、現実を平和憲法の理念に接近させる着実な努力こそが求められている。

→アジアにおいて大国の地位を占める日本が非武装・平和主義を掲げ続けることで、アジア地域全体で軍事依存を低めていける。

→戦争は違法であり、紛争解決の手段として武力に訴えることは主権国家の正当な権利

ではない。

→軍事に対して政治が優越するという文民統制の原則は民主主義国家の基本原則である。

4)東アジア地域において日本国憲法が果たす

- ①日本国の過去に対する反省と、東アジア地域諸国民との和解のための約束
- ②東アジア地域諸国に対する平和の提示
- ③東アジア地域の安定
- ④日本と東アジア諸国間との信頼関係を維持する基盤
- ⑤東アジア平和共同体の基盤

5)私見

発表グループの中でも、憲法9条や前文に、絶対に手を触れてはならない、という意見と、目的とその達成手段の如何によっては、手を入れることを認めても良いのではないかという意見とがあるが、それでも、共通している根本的な思想は「絶対平和主義」「戦争反対」であり、そこに到達する過程においての方法論の相違があるに過ぎないことが判明した。

確かに明るいニュースばかりではない日常ではあるものの、やはり、戦争という国家的殺戮による理不尽な生命喪失者が、現在の日本で暮らす者にはいない、という事実は幸いであるし、憲法9条および憲法前文が、その事実の大きな支えの一つであることは否定できないことが主な理由である。

日本国憲法、殊に前文と9条のありかたについては、それを考える人それぞれの立場や、おかれている状況、また思想や価値観によって、意見が千差万別となることは当然である。そして、絶対に正しいというある種の「答え」が用意されている問題でもない。しかしだからといって、平和のための思考を止めてしまい、話し合うのをやめてしまえば、永遠に平和は訪れない。たとえ無力であっても、平和を求める者はその思いを訴え続けなければならず、少なくとも日本国民はその義務を負っていると考える。

～日本国憲法制定経過～

- ①戦争終結と憲法改正の始動
- ↓
- ②近衛、政府の調査と民間案
- ↓
- ③GHQ草案と日本政府の対応←ターニング・ポイント
- ↓
- ④帝国議会における審議
- ↓
- ⑤憲法の施行

～論点～

- 1 国民主権と天皇制
- 2 戦争放棄…→今回の発表で扱う論点

- 3 基本的人権の保障
- 4 新しい二院制議会
- 5 違憲審査制
- 6 地方自治

【性質、特徴】

- ・形式 : 成文→成文の法典が存在する。
- ・性質 : 硬性→憲法改正に、単純多数決ではなく、特別多数決(2/3とか3/5)または、それに加えて国民投票が必要。
- ・制定主体 : 国民→君主によったり、君主と国民との合意国民によって制定されているのではない、「民定憲法」である。

3)改憲論争

i. 憲法を変える派と変えない派との対立

改憲論争には様々な対立局面があるのだが、最も大きな枠組みでは、現行の日本国憲法を何かしらの手法または何かについて、「**変える**」という意見と、何も「**変えない**」で、現行憲法を維持する、という意見との対立がみられる。

ii. 変える派の中での分類

「変える」という場合でも、その**内容**において意見が分かれ、内容によっては、その方法も異なることになる。なぜなら、憲法の「改正」を正確にいうと、現行の日本国憲法では96条に記載されている、その手続きに則った変更のことであり、憲法96条の手続きを履践しない変更は、憲法「改正」とはいわず、「革命」「クーデター」ということになる。

そして、通説的見解によれば、現行憲法の下では、改正できる項目に制限があり、日本国憲法の根本的要素であって最重要部分については、改正手続きによっても変更が許されないと考えられているため、その部分を変えるということは、改正手続きによるものではないことになるからである。従って、内容如何によって、あくまでも「**憲法改正**」なのか、もはや革命である「**新憲法の制定**」なのか、ということになるのである。

- ・変える派における内容の対立は、内容の方向性の違いが大きく、3方向に分かれる。
 - a) 現状よりも**厳しい平和性を追求**するもの→例えば、自衛隊を違憲とし、その明記をするなどである。

9) 『基地問題』グループ発題

(日本聖公会)
基地問題グループ発表
岩佐直人・森田治美・中村真理

構成

序文 戦後60年の米軍基地の動き

1、基地があることのデメリット

①経済

②環境

③平和

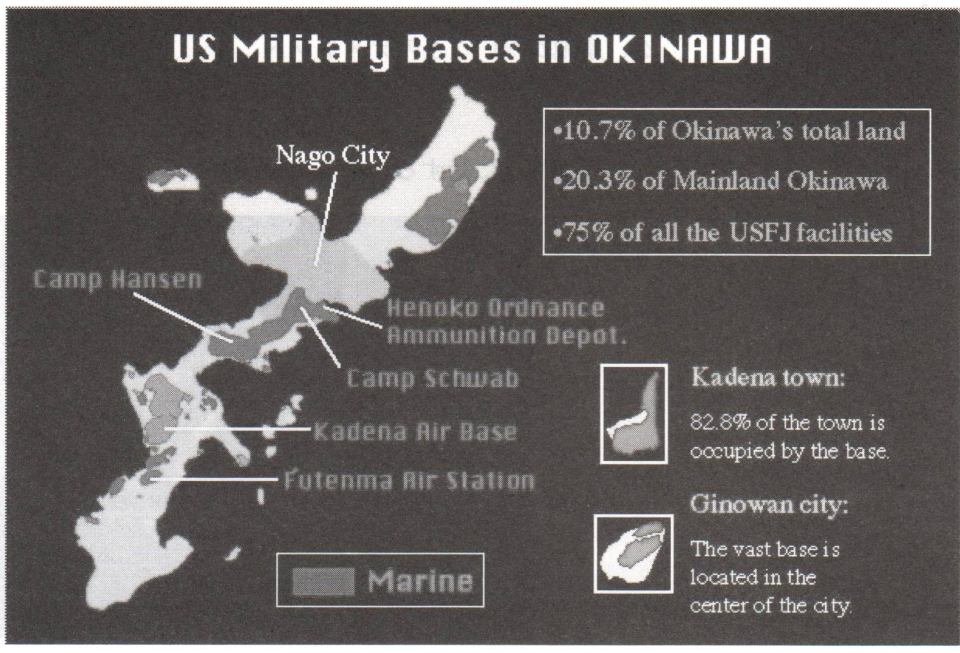
2、基地がないことのデメリット

経済

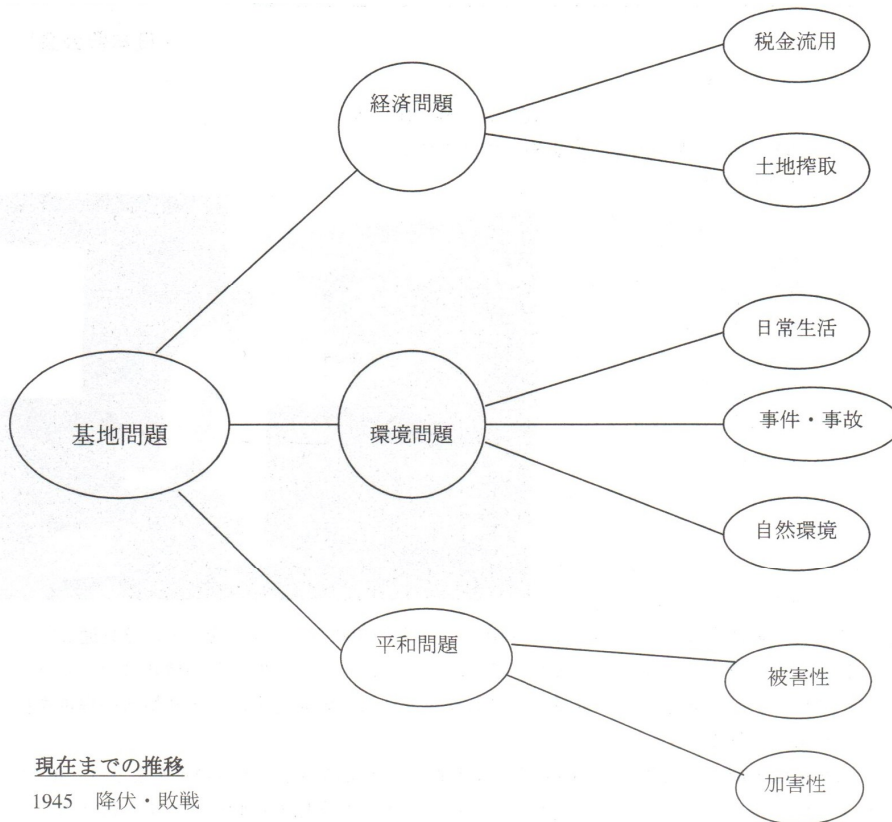
3、基地問題に対する日本聖公会の働き

まとめ





在日米軍における問題



現在までの推移

1945 降伏・敗戦

46 GHQ 日本と南西諸島の行政分離

現在までの推移

1945降伏・敗戦

46GHQ日本と南西諸島の行政分離

49アメリカ沖縄の長期保有を決定

53「土地収用令」公布。強制収用

57高等弁務官制度発足(軍政機構)

70コザ騒動

72沖縄返還

96日米政府普天間基地全面返還に合意(5年)

2006普天間基地返還7年計画辺野古へ移転

現在までに返還された基地・土地

那覇市 金城・天久 宜野湾市 キャンプマーシー

北谷町 ハンビー飛行場 沖縄市 キャンプヘーグ

具志川市 みどり町 など 沖縄の占める在日米軍基地面積75%→70%に

10) 『在日外国人』グループ発題

(日本聖公会)
橋本、平岡、金

在日外国人

#1. 2006年の「改正入管法」を知っていますか。

テロ対策を強化するため、日本に入国する16歳以上の外国人に指紋採取や顔写真撮影を原即として義務付ける改正入管法が2006年5月17日参院本会議で可決、成立した。在日韓国・朝鮮人らなどの約47万人の「特別永住者」、外交官、国の招待者については対象外とした。



この法案は、2004年末に定めた「テロの未然防止に関する行動計画」の一環で、こうした制度が導入され

るのは、米国に次いで2番目。来日外国人の半分以上は近隣国で、年間約700万人が指紋を採られる見通しだ。指紋などの情報はスキャナーなど「電磁的方式」によって採取。その情報はコンピューターでデータベース化され、犯罪調査にも利用される。強制退去は、生体情報の提供を拒否した場合も命令できる。

改正法は事前の指紋登録で外国人の上陸審査手続きを簡素化できる規定をもうけ、ICカードを使った「自動化ゲート」が導入される。日本人も同様の自動化ゲートを使えるようにする。「自動化ゲート」は駅の自動改札のような装置である。

政府は改正で、別人に成り済ましたテロリストの入国を阻止できるとしている。

ただ、犯に無関係な一投市民・観光客らも指紋採取が義務付けられるため、日本弁護士連合会は「外国人全体が危険であるかのような偏見を生む恐れがある」と批判している。外国人登録時の指紋押捺は2000年に全廃されたが法案でなし崩しになる恐れが強い。

#2.外国人の賃貸実務について

～「保証人」と「在留資格」の大きな2つの壁～

☆必要なもの

- ・家賃の6ヶ月分=敷金(貸し主に預けるお金)2ヶ月、礼金(貸し主側にいくお金、家賃の一部)2ヶ月、仲介手数料1ヶ月、家賃(前払い)
- ・連帯保証人承諾書(保証人の印鑑証明含む)
- ・外国人登録記載事項証明書

※礼金は日本独自の商慣習の一つ

※保障サービス会社(賃貸住宅を借りるとき、申込人に連帯保証人がいないとき、保証人に代わって家賃を弁償してくれる。一年間の保証に月額家賃の3割から5割必要。)

☆一般に、外国人は、日本の商慣習を知らないなので、家を借りるときに苦労することが

多い。特に言葉の問題は大きく、日本人でも契約書の中身についてはよくわからないまま印鑑を押してしまうことがある。

また、日本人でも、フリーターなど定職についてない人は家を借りにくい、外国人であっても、定職についていたり、留学生など身分のしっかりした人は、比較的サービスが整っている。(独立行政法人日本学生支援機構による指定宿舎や財団法人日本国際教育支援協会による留学生住宅総合補償制度など…)

参考文献 三谷雅行『外国人との賃貸仲介マニュアル』住宅新報社

#3. 介護分野での外国人受け入れ

外国人の入国及び在留管理に関する国の制度上、介護分野の外国人受け入れの仕組みは現時点では存在しない。政府は、1989年出入国管理及び難民認定法(以下、入管法)の改正以降、外国人の受け入れに関して、専門的・技術的分野の「高度人材」については積極的に受け入れる反面、いわゆる「単純労働者」については実質的に受け入れない基本方針を堅持してきた。1999年閣議決定された「第9次雇用対策基本計画」においても、この基本方針はそのまま確認され今日に至っている。介護分野は、就労が認められる「高度人材」にも含まれておらず、またほぼ唯一の「単純労働者」の受け入れ制度として機能している外国人研修・技能実習制度の対象職種でもない。

こうした中、2004年日本政府はフィリピンとのEPA(経済連携協定)の交渉において、将来的にフィリピン人看護師・介護福祉士を受け入れることに合意したことを発表した。その主な内容は①フィリピン看護師・介護福祉士の有資格者及び大卒者を対象にし、②日本語の研修終了後、日本の国家資格の取得のための一定期間の就労を認め(滞在上限、3~4年)、③国家資格取得後は引き続き就労が認められる、というものである。最近の動きとして、法務省は、2005年、今後の外国人の入国と在留管理の指針となる中で、「介護労働者については、EPAに基づく受入れの状況を見極め、また、この分野が日本人の雇用創出分野と位置付けられていることも踏まえつつ、その受入れの可否、受け入れる場合の方策について検討していく」としており、現在専門的・技術的分野に限っている外国人労働者について、介護分野への拡大を検討することが明らかになった。このような動きは、1989年入管法の改正以来、外国人受け入れについて堅持してきた基本方針の転換として注目される。

参照介護サービス提供分野における外国人労働者活用の可能性に関する試論

www.ier.hit-u.ac.jp/pie/Japanese/discussionpaper/dp2004/dp270/text.pdf

#4. 在日外国人に対する差別発言

公共の場で発言する機会の多い人間が気をつけなければならない事は、影響力を想像しなくてはならないという点である。彼らは一言一句に細心の注意を払って言葉を発信しなければならないのである。

★石原慎太郎(東京都知事):

一)2001年5月8日(産経新聞で)中国人犯罪について「民族的DNAを表示する様な犯罪が蔓延する事で、やがて日本社会全体の資質が変えられていく恐れがなしとはしまい」と主張。中国人が凶悪犯罪を起こす民族性を持つとした上、これを遺伝的であるかの様に発言した。
二)2003年10月8日都内の集会で「(日本の韓国併合は)武力で侵犯したんじゃない」「どちらかと言えば彼ら(朝鮮人)の先祖の責任」。2000年4月9日におこなわれた陸上自衛隊第1

師団の「創隊記念式典」に出席し、「東京では、不法入国した三国人、外国人が凶悪な犯罪を繰り返している。大きな騒じょう事件すら想定される。警察の力には限りがあるので、自衛隊も、治安の維持も目的として遂行してもらいたい」とあいさつ。

★小野田隆(新宿区長(当時))：「新宿が怖い街だと評判が立って困っている。その要因を作っているのは、新宿での犯罪の7割を占める『三国人』犯罪だ」

★江藤隆美(衆議院議員)

(Date: 2003年8月7日) (不法滞在の外国人について)「どろぼうやら、人殺しやらばかりしているやつらで、100万人日本にはいる」「新宿の歌舞伎町は第三国人が支配する無法地帯。最近は、中国や韓国やその他の国々の不法滞在者が群れをなして強盗をしている。そんな国がありますか」。

(日中、日韓の過去の歴史問題について)「南京大虐殺(の犠牲者)が30万人などというのは、あれはでっちあげのうそっぱち」。

第一の問題点は、本来日本の朝鮮半島の植民地支配に対して日本が責任を自覚し、謝罪・補償すべきところを逆に正当化し、そのもとで行なわれた虐殺やレイプ、強制連行などの事実を無視するものであり、決して許されるものではない。

第二の問題点は、今回の発言が日々深刻化する在日コリアンへの差別を助長することにもつながる点である。

第三の問題点は、これらの発言が人種差別撤廃条約の第4条C項(「国または地方の公の当局又は機関が人種差別を助長し又は先導することを認めない」)に違反するものであるということ。人種差別撤廃委員会より、日本政府報告書審査で石原都知事の「三国人発言」(2000年4月)にも強い懸念が表明され、最終所見で再発を防止することが勧告されている(2001年、最終所見第13パラグラフ)にもかかわらず、同じ過ちを繰り返し、日本政府もそれを看過しているところに問題がある。今回の発言は、事実にもとつた歴史認識が正確になされていないという問題だけでなく、植民地支配された人びと、収奪された人びとの耐え難い苦しみや痛み、屈辱を、支配した側として感じることなく、恩恵をもたらしたと思込む「植民地支配の仕組み」や「支配者のおごり」が露呈したものである。

11) 『イラク派兵問題』グループ発題

(大韓聖公会)

〈イラク派兵問題〉

1. 人類社会と戦争

今の時代、世界は戦争の脅威と恐れに捕らわれている。あちこちで戦争が起こっているし、また多くの国家間の緊張感もますます高くなっている現状だ。戦争の辞書的意味は国家、または交戦団体の間にお互いに武力でするけんかだ。しかし戦争はこのように言葉で表現できるような簡単なことではない。戦争はそのもの自体が暴力で、悪であり、災いである。私たちクリスチャンはこのような戦争をはっきりと批判すべきであり、またそれを防ぐために力を尽くすべきだ。平和こそ神様が本当に願っておられることだからである。



2. イラク戦争

①発生原因

アメリカに対しての脅威:第2の9.11 テロの可能性もある。ジョージ.W.ブッシュはイラク・フセイン大統領の対米テロ援助の可能性を提示した。

イラク政権交代:サダム・フセインの長い独裁と90年代初から国連の決議を逆らいつつ、全世界に対しての挑戦し続けたことに対するのやり返しであり、イラク民衆抑圧によってなくなったイラク民主主義の再建のためだ。

イラクの大量殺傷武器・核兵器開発:これは全世界にあちしての脅威であり、米英がイラク戦争を強く推進できたきっかけだった。

*ジョージ.W.ブッシュ大統領の言葉—

「サダム・フセインは大量殺傷武器を保有する。そしてサダムは世界を騙しつつ、テロ組織とも深く関連している」

②実質的原因(戦争の正当性についての疑い)

—イラクの石油 : アメリカエネルギーの安定的需給と石油覇権を確保するため

—武器販売と性能実験 : 米国武器生産企業の不況を回復するため

—ブッシュの政治的意図: ブッシュの支持率下落で、アメリカ人たちに英雄主義アピール。

(強い米国の印象を刻ませるため(民衆の支持を得るため))

③イラク現地状況

—人命被害(死亡:30万人, 負傷:60万人, 難民:数百万人, 捕虜:7万名)

—民間人虐殺(例:北西部ハディタ村)

—捕虜収容所(人権侵害, 身体的精神的虐待, 性的暴力, 性的暴行)

—イラク政権についてのアメリカの程度を超えた干渉・関与

3. 派兵

—目的:平和再建のためだという(工兵支援と医療支援のため)

しかしザイトウン部隊は自国民(イラク国民)の要請によって派兵されたわけではなく、韓国は直接的な理解関係がなかったにもかかわらず対米関係の維持と、派兵をしなかった場合の経済的損失から避けるためだった。

4. 派兵過程

国連安保理が満場一致で対イラク決議案を採択したことによって、政府はすぐノムヒョン大統領主宰の緊急国家安全保障会議(NSC)を開きイラク追加派兵を決定した。その規模と時期などは後で論議することとしたが政府は派兵原則と共に今後4年にわたって2億ドル(韓貨約2,300億ウォン)を支援することとした。派兵と関連して慎重な反応を見せていた政府が国連の決議以降、待っていたように派兵方針を決定したことによって政治圏をはじめ社会全体が再び賛反両論に分かれて五分五分に対立している。市民団体も真二つに分かれ保守傾向の団体は積極的に歓迎する反面、「参与連帯」と「経実連」等は派兵決定を強く非難した。

* 派兵を反対する立場からは次のように主張している。

- 戦争は人間の生命がかかわる重大な問題だ。
- 国連規約を逆らった不道徳的な戦争だ
- 本当にイラクを助けようとするなら、イラクから軍隊を撤収し他の方法を考えるべきだ
- 戦争遂行方式が不法的で不倫理的だ
- 国家の一番大切な国益は国民の生命だ
- 全世界的なイラク戦争反対世論を無視してはいけない。

5. 派兵反対のための韓国社会の動き(戦争反対デモ・集会)

—大通り行進,デモ,集会

03.11.15 派兵反対 汎国民大会

04.02.02 国会前 派兵反対 籠城

04.10.17 国際共同反戦行動

05.03.20 国際反戦行動

05.06.21 キムソンイル1周期追慕およびザイトウン部隊撤収を求める反戦行動

05.09.24 イラク占領終息のための三つの派兵国(韓_米_英)共同行動

05,12.17 イラク派兵延長反対平和大行進

06.03.19 イラク侵略糾弾国際共同反戦行動

06.06.24 反戦行動—ハディタ虐殺糾弾

その他にも韓国社会では署名運動やキャンドル集会,記者会見や討論会などの多様な活動として派兵に反対する動きを表している。

6. 韓国教会の立場

まず、戦争とは神様の御心に逆らう人類の典型的な罪悪だと言える。ということで、派

兵賛成はアメリカのイラク侵略に賛成するというので、つまり戦争に賛成することだと見られる。これについて韓国教会はアメリカの戦争に対して問題意識を提起し反対意志を確かに表明した。韓国教会はアメリカが戦争ではない他の方法を探す努力をしなかっただけでなく、イエス様が強調した愛の意味を無視したと思う。また聖書の中の「自分の利益より隣人を尊重しなければならない」という神様の御言葉を破る重大な罪悪の行為だと言える。

7. 派兵反対のための韓国教会の動き

—主要反対声明書発表、祈祷会

03.03.15 315反戦平和の日

03.03.20 イラク戦反対声明書発表および記者会見—反戦平和キリスト教連帯

「イラク戦争反対祈祷会」および「徹夜祈祷会」—反戦平和キリスト教連帯

03.03.21 反戦平和キリスト教連帯徹夜祈祷会

03.03.22 反戦平和キリスト教連帯反戦集会

03.03.26～ 28 反戦平和キリスト教連帯夕のキャンドル祈祷会

04.04.29 イラク派兵撤回と救護のためのキリスト教系1000人 宣言出帆記者会見

04.05.20 イラク平和のための平和コンサート

04.05.31 イラク平和のための祈祷会

その他にも韓国教会はイラクの真の平和のため、絶えず声を出している。私たち聖公会でも2003年3月24日「アメリカのイラク侵略戦争を反対する」という聖公会全聖職者の声明書を発表した。

8. 聖公会青年たちの立場

現在の韓国教会、特に聖公会中での青年は個別的な活動のほうが多くなり教会の中でさえ集いが成り立っていない。このような状況のため全体的な教区青年の集まりと言うのはほとんどない。このように教会の中で交流が足りないから社会に向けて青年が声を出すというのはほとんど不可能な事になってしまった。これについて青年は深く反省しなければならない。今からは聖公会の中で青年同士の交流を活発にし、それを通して社会に対しての動きを見せなければいけない。特に前の部分で言ったように、神様が願われる平和を実現するための行動をしなければならない。私たちは社会と教会の中で行われるすべての集会と祈りに自由に参加することができる。多くの方面から私たち青年が反戦運動に積極的に参加したら真の平和が訪ねるに大きな力になると思う。過去についての反省も重要だ。しかし、これからの行動により大きな意味を置くということがもっと大事だと思う。これを覚えて、これから聖公会青年が信仰的・社会的に正しく活発に成長するように祈っていききたい。

12) 『移住労働者問題』 グループ発題

(大韓聖公会)

韓国の移住労働者問題



1. 序論

1980年後半に入って韓国は急速な経済成長を成すようになり産業界では働き口の需要が供給より多くなった。国民の経済力が向上し、3K職種を嫌うようになり、中小企業の生産現場では労働力不足がひどくなった。それを解消するため、1993年から産業研修生制度を導入・運営して来た。しかしながら、超過滞在、人権侵害の頻発、労働力市場の混乱という問題点を生みだした。

労働力不足が長期化する中、外国労働者の雇用管理体系の基礎を確立して、韓国産業の労働力不足を緩和するための方策として雇用許可制の導入が必要とされ、2003年8月16日、『外国人勤労者の雇用等に関する法律』が制定され、2004年8月17日から雇用許可制が施行された。

しかし政府の外国人労働者政策は、一言で二重政策だと言える。90年初頭から移住労働者の不法滞在を黙認し、彼らを労働市場に引き込み、4回に渡り滞留延長を認め、その労働力を活用してきた。商工部(通産省)は産業研修生制度を施行し、法務省訓令によって、研修生を5万人ほど流入させ、実際には技術研修ではなく3K職種に、低賃金労働力として活用してきた。

現在韓国の外国人勤労者数は2004年8月17日から実施されて、以後2005年7月31日まで、雇用許可制を通じて勤労契約を締結した外国労働者は32,172人であり、入国者数は2004年3,167人で、2005年には11,668人程度と推算される。

2. 外国人労働者の現実

① 超過滞在者の労働力搾取及び人権侵害

超過滞在者は摘発されると強制退去処分になるため、仮に雇用主から賃金滞払や性的暴行があっても、訴えることすらできない。大部分の労働者は、最低賃金、長期間労働に苦しんでいる。合法・非合法を問わず、昼夜12時間2交代勤務をした上に随時残業させられている者も少なくない。最低賃金さえもらえない場合が多い。合法の在留者である産業研修生にしても、韓国へ着いてすぐに旅券や通帳を雇用主に押収される。雇用主が、勤務先からの逃亡を阻もうと、このような措置を取っているのである。月平均50-60万ウォンで、殺人的な労働に苦しまなければならない。そうした状況の中でかなり多くの研修生が超過滞在者になっていく。そして、結局月給の相当な部分を搾取されることになる。

多くの雇用主が、外国人労働者の賃金の未払いを行っている。これは外国人労働者たちが政府によって摘発されることをおそれることを利用し、会社の経営の調整に外国人の賃金を利用しているからである。外国人労働者の大部分が「畜生」(ゲセキ:犬の子)のような

悪口を言われたり、殴る蹴るの暴行にあったり、女性の場合はセクハラや性的暴行まで頻繁に起きている。

②医療問題及び労災問題

産業研修生制度のもとでは医療保険が利用できない。大部分が3K業種に携わるため、騒音、におい、ほこりなど、労働環境が劣悪で、危険な仕事も多く労働災害もたびたび起こる。

しかし、診療費が高過ぎて病院へ行くことができず、病気を悪化させてしまうこともたびたび見られる。

③児童福祉問題

外国人の子どもで、韓国の学校に通っている児童は50%、学校に通わない児童が18.2%である。

入国後に学校に行けるようになるまでには、3ヶ月以上がかかる。その間子どもは、働く親と夕方だけ会い、一日中TVを見ながら過ごすと言う。学校生活でも差別があり、学校の勉強にも多くの困難を感じている。

したがって、学校において外国人の子どものための特別な教育が切実に求められている。外国人移住労働者のサポート団体からも児童の学校生活適応のためのプログラムが用意されなければならない。

④言語と文化の違いに関する摩擦と葛藤

外国人労働者たちが韓国語研修を受けることはほとんどない。産業技術研修生の場合も同様である。モンゴル語で〈イリワ:こっちに来い〉は「変だ」という意味である。仕事を熱心に行っているのにどうして、そんな悪口を言われるのかなど、理解できない出来事が起きる。中国語で"シパルマ" (食事しましたか?) という挨拶をしたら、朝から悪口(韓国語としては、侮辱の言葉)を言うなど暴行を受ける事件もあった。多様な文化と言語の違いを乗り越えるためには、最小限度の韓国語教育は韓国生活への適応を助けることだけでなく労働災害を予防する道でもある。

⑤韓国国民の差別と二重基準(規定)

外国人労働者の中でもイランやパキスタン人は暴行にあうことがほとんどない。一方インドやバングラデシュ人の場合は毎日のように暴行にあう。小さくて色が黒い人に対して韓国人が差別と偏見を持っているからである。アフリカから来た黒人たちは皆が「アメリカから来た」と言う。アフリカから来たと言えば黒人だからかうけれど、アメリカから来たと言えば「お茶どうぞ。英語を教えてくださいませんか?」と、もてなしが違うというのだ。

⑥出入国問題

中間ブローカーの詐欺と高額な紹介手数料により、労働者たちは大きな借金をさせられて入国してきている。また、出国時には、超過滞在であれば、妊婦や、さらには死亡者にまで罰金を課す。航空券を買うお金もなくなり、パスポートを差し押えられ、外国人保護所に収監させるなど、ここにも多くの問題がある。

3. 外国人労働者問題の解決案

a. 政府レベルで必要な取り組み

—労働許可制と雇用許可制併行

- 超過滞在者の合法化
- 職場移動の自由化
- 送り出し機関の外国人選抜権制限で送り出し非理抑制
- 労働者と雇用者、政府、公益の十分な合意創出努力

b.民間サポート団体レベルでの取り組み

- 外国人労働者たちのための人権救済団体や集まりが不足している。サポート団体を活性化しなければならない。
- 韓国語、韓国文化に対する講習の拡大
- 医療サービス活動の拡大
- 人権侵害時に待避して居住できるシェルターの用意

c.私たちの姿勢

- 韓国が必要として入ってきた人々であるということと、私たちと変わらない、働いて生きていく一つの人格体であるということを確認する必要がある。

4. 聖公会の中での移住労働者のための支援活動現況

—韓国聖公会は移住労働者のための支援活動だけではなく貧困家庭、野宿生活者、欠食児童を助けるため、多くの地域に「分かち合いの家」を設置して活発に活動している。また障がい者福祉館等も、活発に社会宣教活動に力を尽くしている。この約10年の間に、一山(イルサン)、抱川(ポチョン)、竜山(ヨンサン)、南揚州(ナムヤンジュ)に四つの移住労働者センターを設置して移住労働者の福祉に努力している。2005年には政府の援助と教会の寄付で、ソンセンウォン内に南揚州市外国人福祉館が国内最初のケースとして設立され、その福祉と厚生のためのより積極的な支援活動をすることができるという希望が見出されている。

最後に南揚州のソンセンウォンは、実は40年前、ハンセン病患者たちが小鹿島から移住して定着したところである。今その地には、もう一つの疎外された階層である外国人労働者たちが生き、暮らしている。私たちの必要によって入って来た移住労働者たちは、外国での生活に疲れ果てているが、私たちの無関心によってもっと苦しくなるおそれがある。

しかし聖公会と、この地の多くの人々が努力するなら、ソンセンウォンでハンセン病患者たちがみんなと共に生きていくことができたように、いつかは移住労働者と韓国人が共に生きる美しい世の中を作っていけるのではないかと思う。

13) 『青年文化』 グループ発題

(大韓聖公会)

韓国青年文化の問題点

(1)文化とは何か？ 現在、韓国の青年文化は？

私たちのグループは韓国社会で、青年文化に存在するさまざまな問題点を探って、青年文化が進んでいくべき方向について考えてみた。

私たちは、文化という概念をもっと広げて、私たちの生きること、即ち生活のすべての側面を指し示す言葉に成らなければなら

ないと思う。各々の人が生きる一日一日の生活のすべての行為、考え、感じたこと、それが文化である。私たちはアルチャン(訳注:中身がぎっしり詰まっている、充実している)文化とは、生をもっと享受し、真剣に生きる事が出来ることであると思う。そして、私たちは、この社会でアルチャン文化を持った人々こそ、精神的に豊かに生きられると思う。

しかし、最近の韓国の青年文化を見ると、実にむなしいとしか思えない。資本主義は大衆媒体(マスメディア)を通して、幼い時から韓国青年の人生の中に浸透した。青年たちはお金が最高で、金をもうけるために、そして良い会社に就職して給料をたくさんもらう事だけがすべてのように考えるのである。商業的な文化の中で青年たちは楽しんで笑っているが、それは本当の青年文化からのものではなく、投げられた網に引っ掛かった餌になっただけとも言える。既存の大衆文化は人々の心をもっと豊かにするどころか、もっと貧困にする。「商業性」を追求する大衆文化は人々を惹きつけるために、暴力や煽り立てることを抑制するどころか、むしろ利用している。韓国社会には青年文化が存在しない。大衆文化が青年文化の仮面をつけて存在しているだけである。



(2)韓国社会に存在する青年文化の姿

1.青年文化はお酒の文化？

青年文化には大人の世界に入るために強要される文化がある。それはお酒文化である。大学新入生から接するお酒文化は、先輩からの強要によって飲むようになることが大部分で、お酒の場を避けた時には良くない印象を残すようになり人間関係も悪くなる。青年たちがお互いに交わって話せる場所は飲み屋しかないのか。お酒が緊張を和らげて、普段出来なかった話が出る事もあるが、お酒を通してしか対話ができないはずはない。

2.青年たちは大韓民国の消費の主体？

韓国は解放以後資本主義を選び、その結果、驚くほどの経済成長を遂げてきた。世界10位に入るほど豊かな国になったが、上流層と下流層の極端な二重階層を生み出した。お金があれば楽しめる事は数え切れないほど多いけれども、お金が無ければ何も出来ない世の中になってしまった。お金が無い青年たちは本当に楽しめる事が無い。外を見ると、すべてが消費の文化で、その中で、青年たちは立っている場を失ってしまう。

3.バックパック旅行は必ず海外旅行でなければならない?

大学生活の花と呼ばれるバックパック旅行も実はバブルの一つかも知れない。バックパック旅行は必ず海外でなければならないという認識が強いからだ。韓国も、見回せば良い所も多いのに、必ず海外でなければならないようになってしまった。これもお金のない青年たちに肩身の狭い思いをさせる過剰な消費文化の現象の一つだと言えるだろう。

4. 青年文化は大学文化?

最後に、青年文化は大学文化であるという認識は、大学に通わない青年たちをひるませる。韓国は激しい入試競争があり、一流大学に入るために苦労し、3年間の高校時代を過ごす。その一流大学に入れるのは少数である。大学進学率は90%を越えるが、就職率は50%に満たない。大学は本当に青年たちにとって必要な所なのか。「大学が決まれば人生が決まる」という言葉がある。良い大学を出ることによって良い会社に就職することができて、お金を儲けることができるという考えは、多くの青年たちの考えるところかも知れない。しかし、長引く不況によって大学を卒業しても就職するために青年たちはまた競争しなければならない。針の穴より入りにくい会社の門の前で、青年たちはお互いを競争相手として認識するようになる。良い大学と良い会社に入るために青年たちは絶えず努力するが、本当にそれが幸せを決めるものなのかはわからない。

(3)韓国の青年文化が進むべき方向

1.聖公会青年としてのクリスチャン青年の文化

1)青年会の活性化は教会のその他の小グループの活性化

集まりが持続できるよう、中心になってリードする人が各教会の青年の集いごとに必要である。地域の教会の青年会を活性化させ、さらに、ソ青連(ソウル教区青年連合会)のように教区レベルの青年の集まりを活性化できるように努力しなければならない。さまざまな困難に追われて疲れた青年たちが、教会で心の平安を取り戻して霊性を得られるよう、青年集いで多様なグループ活動を企画しなければならない。共に集まって聖書勉強や、賛美・祈りの会を持つのも良い。また、親交を深めるスポーツ活動や趣味の活動も良いであろう。青年集いを活性化させるためには、霊性の強化と同時に、親交を深めることができる環境を調整する必要がある。

2)ナヌメジプ(分かち合いの家)、シャロメジプ(外国人センター)、フードバンク(Food bank)、

おにぎりコンサート

ボランティア活動の意義を生かして、聖公会の青年だけではなくて、他の青年たちとも一緒に想いを共にすることも、新しい共同体を生み出す良い方法であろう。そして、青年宣教の新しい方法にもなるだろう。

韓国社会の新しい主役は青年たちである。青年たちが得ることができ、さらに全国民が得ることのできる新しい文化を探さなければならない。現在私たちに「与えられる」文化は、私たちをさらに疲弊させるだけである。今日も、世間の物差しの前で、消費の文化の前で、崩壊していく青年たち。この中で青年文化とは何か、今青年たちはどこに向かうのか。人生で一度しかない若い時期、青年。真の汗と努力の代価よりは、安易に楽しむ消費へと簡単に向かう青年たち。青年たちには本当に文化と呼べるようなものが無い。

14)靖国問題レクチャー

靖国神社とは？

野村 潔

1、靖国神社の創建

江戸時代末期から明治初期にかけて、天皇に忠誠を誓い、幕府や外国軍との戦いによって戦没した人々を国事殉難者として、その慰霊と顕彰のため、彼らの魂を招き、子孫が祭祀できるよう祀る招魂祭が各地で行なわれるようになり、同時に招魂社或いは招魂場が各地に設立されるようになった。

1869年(明治2年)、函館五稜郭における戦いを最後に旧幕府軍による抵抗が終わり、内戦は終結した。明治政府は、鳥羽伏見の戦い以来の内戦における天皇軍全戦没者の招魂祭を、自ら実施することにした。そのため東京九段の地に東京招魂社を建立した。これが、靖国神社の前身である。

1974年(明治7年)当時、東京招魂社は主に戦没者のための神社に近い施設であり、京都東山招魂社は主に国事殉難者のための施設と、一応、両招魂社の性格が区別されていたが、1875年(明治8年)、明治天皇の勅旨によって、京都東山の神霊を東京招魂社に合祀することになった。これにより、天皇に忠誠を尽くして亡くなった戦没者及び国事殉難者の霊魂を集中管理することになった。

1879年(明治12年)、東京招魂社の改革と神社化が実現し、靖国神社と改称し、別格官弊社に列格した。以後、各地で天皇に忠誠を尽くして亡くなった人々の合祀が始まった。

2、靖国神社に祀られている人々

靖国神社は「国事に殉じた人々」を祀る神社であり、したがって「国事に殉じなかった人」つまり国事に逆らった人は祀らない。「国事」とは天皇のため、天皇の国を守るために生命を捧げたかどうかを基準に考える。

明治維新前後では、坂本竜馬や吉田松陰は祀るが、西郷隆盛は、1878年に西南戦争を起こし、天皇に反逆した賊軍として自害したので、靖国神社には祀られない。

最初は戦死者だけが合祀されていたが、西南戦争後に倒れた地方官員、巡査を合祀するために基準を拡大し、更に戦病死者、戦傷死者、戦闘中の事故死者など、合祀基準が拡大している。

尚、旧植民地時代の出身者約50、000人が勝手に祀られ、今日に至っていることは重大な民族的人格権の侵害である。

3、靖国神社に祀られているのは日本人だけか？

外国人も祀られている。台湾、朝鮮半島出身軍人・軍属の死亡者中、靖国神社に合祀されている人数は、台湾出身者27、656人、朝鮮出身者20、636人と報告されている。合祀者全体の数は、2003年現在で、2、466、495人となっている。

靖国神社の合祀者数は、毎年、増え続けている。その中には、旧植民地支配の時代に強制

連行され、戦死或いは戦病死した人が、いつのまにか遺族のしらないうちに合祀をされている事例がある。

4、靖国神社の役割

明治政府は、国威発揚、国論統一のため天皇を神とする国家神道及び天皇制絶対主義思想を徹底しようとした。政府は、教育勅語や皇民化教育によって、国民はひたすら天皇のために存在し、天皇に忠誠を尽くすべき存在として位置づけようとした。

また、軍隊も天皇の軍隊として位置づけられ、その行なう戦争は常に聖戦であり、天皇のために犠牲となった人々の霊魂は、すべて靖国神社に祀られるということで、靖国神社は軍国主義の精神的な支柱になっていった。

靖国神社の所管は陸・海軍にあり、したがって陸軍大将が靖国神社の宮司を務めたこともあり、こうしたことも軍国主義の精神的な支柱としての役割を加速したと言える。

5、A級戦犯の合祀

A級戦犯は、侵略戦争を指導したAクラスの戦争犯罪者であり、靖国神社は戦後長らくA級戦犯の合祀をためらっていた。1978年、松平永芳宮司の就任した直後、靖国神社は東条英機元首相らA級戦犯14名を、遺族にも連絡せずに合祀をした。

以来、首相や閣僚の参拝に対しては、中国はじめアジア各国から厳しい批判の声があがるようになった。にもかかわらず小泉首相は、就任以来、毎年、参拝を繰り返し、外交問題を生じさせている。しかし、最近、元宮内庁長官のメモによって、天皇がA級戦犯の合祀に反対していた事実が報道され、公式参拝の推進派には衝撃を与えている。

6、靖国神社の公式参拝をめぐって

戦後、靖国神社は宗教法人法の手続きを経て、宗教法人「靖国神社」となった。その理由は、当時、日本を占領していた連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサーが、靖国神社が軍国主義の精神的支柱の役割を果たしたことから廃絶すべきである世論が占める中で、占領政策を進める上で日本人の感情に配慮する必要もあり、1945年12月に「神道指令」を発布し、国家と宗教の分離・政教分離の原則に基づく存続を許した。

「神道指令」の内容は、後に発布される日本国憲法第20条の「信教の自由及び政教分離」の成立に結びついていった。靖国神社としては廃絶の運命から解放される安全な道として、否応なく宗教法人を取得し、神道の教義をひろめる一民間宗教と生きることを選択した。

特定の宗教法人に対して国家が関与したり、資金を提供することは上記憲法によって禁じられている。したがって、靖国神社についても、首相はじめ国会議員などが、公式に参拝することは、明らかな憲法違反と言わざるを得ない(2004年福岡地裁判決)。

しかし、仮に私的な参拝であったとしても、靖国神社が歴史的に果たしてきた役割を考えたとき、公職にある人々が軽々に参拝できる宗教施設であるかどうか、慎重に判断する必要がある。

以上

15)感想文

日韓青年プロジェクトに寄せて

日本聖公会北海道教区
広谷基子

交流するってどういうことだろう、そんなことを考え続けた1週間でした。言葉も習慣も違う人々と出会って、仲良くなって、話し合っ、お互いの未来について考えて。言葉の響きだけきけばとても素晴らしいことのように思えるけど、実際のところは思うように進まなくて疲れたり、いらいらすることもあったりで汚い部分もたくさんあった。それでもあの最後の瞬間、まだひとつになったとは言えないけれど、ひとつになろうとすることはできたと思えます。今回の日韓セミナーは10年計画の1年目ということで、手探りという言葉が本当にぴったりなセミナーでした。

手探りという言葉はなにも悪い意味だけで言っているのではなくて、前に踏み出す一歩という観点からは素晴らしいものだったと思えます。ただやはり最初ということもあって、これから直して欲しいところもたくさん目に付いたのも事実です。

まず、一番強く思ったのはセミナーの情報をもっと事前に流して欲しかったということです。とくに韓国側の動きがまったくわからず、参加者がどれだけいるのか、このセミナーに向けていったい韓国側としては何を準備してきたのか、そういった基本的なことすらセミナー直前までわからず、対応に困りました。海を挟んだ向こうということもあり、連絡を取ることには容易ではないかもしれませんが、インターネットがこれだけ普及した現代においては不可能なことではないでしょう。

今後はホームページにこまめに情報を載せるなど、セミナーの不透明な部分をなくして欲しいです。

もうひとつ、気になった点は参加者のモチベーションの差がとても激しかったことです。日本の参加者の話しかきいてないのですが、このセミナーに参加したくて参加したわけではない人がとても多かった、むしろほとんどの人が教区から頼まれて参加したという現実を耳にしました。そしてセミナー後、楽しなかったという人がとても多かったことが私は非常にショックでした。いやいや参加した、結局楽しくもない。そんな思いの人ばかりなら、この先子のセミナーが良い方向に発展するとはとても思えません。私はすべての教区から参加者を募る考えは決して悪いものではないと思います。しかしそれ以前に、日韓のこれからについて自ら進んで考えてみたい人、進んでこのセミナーに参加したい人を募るべきだと思います。そしてそのような人、とくに若い人を増やすためにももっと多くの情報を流し、人々の関心を集める工夫をしてゆかなければいけないと思いました。まず日本の中での意識の改革、そこから始めてみてはどうでしょう。

セミナー後、共同声明文に対して、日本の参加者から多くの不満の声を聞きました。あれはスタッフに無理やり作らされたとか、採決も時間がなかったから適当だったとか、参加者の本当の意見が入ってないとか様々でしたが、みな納得していないのは同じでした。しかし私はそのようなえらそうなことを言うほど、真剣に皆がこのセミナーに参加していたとは思えませんでした。中には本当に真面目に頑張ろうとしていた人もいましたが、ほとんどの人は韓国側と話をしようともせず、内にこもっているように見えました。確かに人に頼まれて参加したのかもしれないませんが、最終的な判断を下したのが自分である以上は「交流する」という最低限の意識はもってほしかった。

私はこの声明文に不満はありません。荒削りで、まだまだ理想の姿には程遠い形をしているかもしれませんが、今の私たちにできる

最大限の自己表現だったと思います。自分たちのものではないと思うなら、自分たちのものにしてゆけばよい、私はそう考えます。まだまだ最初の一回、可能性は無限に広がっています。上手くいかないのなら方法を変えればよい、失敗したならやり直せばよい。真剣に日本と韓国の未来を考える若者がいる限り、このセミナーは続けて欲しいと私は思います。



日韓聖公会青年セミナー2006に参加して

日本聖公会東北教区
影山愛

はじめに、日韓聖公会青年セミナーが開されたこと、そしてそこに私が参加することができたということ、神様に感謝したいと思います。それから、第1回目のセミナーということで、開催のため、産みの苦しみを味わいながら尽力された多くの方々にも、感謝したいと思います。

今回のセミナーへの参加に際し、最初にのところへやってきたのは、謎と困惑でした。それはすなわち、「日韓聖公会青年セミナー」とは一体何なのか、ということです。というのも、日韓での催し物であるということに加え、修養会やキャンプではなくセミナーというからには、参加要請を承諾した以上、それにただ参加してきてただけではいけない、ましてや、東北教区代表のような立場なのだから、

それなりの得るものを持ち帰らなくてはいいけない、という思いがありました。しかし、セミナーそのものについての正確な理解なくして何かを得るということはできません。とくに私は、全体の中の位置づけという視点から物事を捉えようとしています。ですから、セミナーをとりまく全体像が分からなければなりません。ところが、セミナーを主催する管区の青年委員会が何なのかを知らない、そもそも管区が何か分からない。日本聖公会の組織について何も知らず、全体としてどのような方向性を示しながらどんな働きをしているのか、等ということも勿論知りませんでした。ですから当然のことになりますが、20年以上も前から日本聖公会が大韓聖公会と交流をもっていたことなど、知る由もありません。つまり、日本聖公会における日韓聖公会青年セミナーの位置づけを知ろうとしても、その前提である日本聖公会について、私は何も知らなかったのです。そんな状態の私でしたが、色々な人の親切と神様に助けられ、なんとか「？」だらけの頭でセミナーに参加する、という最悪の事態は免れました。

しかしながら、私の今回のセミナーへの参加は、自ら進んで情報を得て応募をした、という積極的・能動的なものではありませんでした。良く言えば「神様のお導き」ということになるのですが、現実には、教区の青年担当の司祭様に依頼を受けて断り切れず、生け齧として捧げられた羊の気持ち…とまでは申しませんが、東北教区からの派遣者という消極的・受動的なものでした。しかしそうであっても、参加を決めたのは自分なのだし、夏休みの貴重な時間を6日間も割くのだから無駄にはしたくない、という思いを抱いていたのも事実です。そしてセミナーは、その思いを十分に満足させた部分と、物足りない部分の両方を含むものであったと思われます。

まず、8月のセミナーに先立ち、5月に日本側参加者の準備会として事前研修会が行われましたが、私にとっては名実共に準備の時

ありました。上記の通り、恥ずかしいほどに何も知らない状態でしたから、日本聖公会の宣教課題についてのレクチャーを受けながら、日本聖公会そのものについて知り、その上で、日韓関係を含めた韓国についての香山洋人司祭の講演では、大韓聖公会と日本聖公会の関係について初めて知ることとなったのでした。香山司祭がお話しされた内容は、「分かち合いの家」など、大韓聖公会の教会の働きが主だったと記憶しているのですが、豊富で身近な話題を平易かつ具体的に説明して下さったため、理解力に乏しく昨今の韓流とは縁遠い私でも、最後まで飽きることなくお話を伺うことができました。

また、事前研修会においては、日本側参加者同士でお互いを知る、ということも目的の一つであったと思われるのですが、最初に行った、ice breakingという手法が功を奏したと思います。また、宿泊部屋が大部屋であったことや、朝食の準備を参加者で行ったことなども、参加者同士の関係を構築するために非常に効果的であったと思います。そして、日本側参加者間に良い関係性を築けたことで、8月のセミナーでの議論がより円滑になったと思われるので、事前研修会は重要な役割を果たしたと言えるでしょう。ただ、8月のセミナーの趣旨説明や目指す方向性、それからグループごとの課題発表に関しては事前研修会が活かされなかったように感じます。

8月のセミナーは内容が盛り沢山だったので、途中で飽きてダレてしまうということはありませんでしたが、毎日朝9時頃から夜の10時頃までというなかなかのハードスケジュールな上、明るく楽しく賑やかに、とはまるで逆のものだったので、情けないとも思うのですが、体力的に辛かったというのが正直な感想です。そのため、プログラムが終了した後に、毎晩交流会が予定されていましたが、それには無理があったと思います。しかし、その点韓国の参加者は20歳前後の方が多く、若かったということもあるかも知れませんが、

夜まで、というかむしろ夜の方が元気一杯で、"韓国人はtough"という印象が私の中に強く残っています。

具体的なプログラムについては、私の中で非常に好印象だったのは西原廉太司祭の主題講演でした。なぜなら、私がこのセミナーに参加することになってから、ずっと抱いていた疑問に対する回答を得られたような気がしたからです。上記の通り、私は自分の信じる宗教について、幼い頃から慣れ親しんではいたものの、身近で当たり前すぎて、あまりに知らないことが有りすぎる状態でした。そこで、西原司祭が「公共性」というキーワードのもと、聖公会の神学と宣教理解という本質論に触れて下さったおかげで、私は自分の依って立つものへの確信を得たように感じられたのです。だからといって、その具現化として自分で何か行動を起こす、ということは残念ながら今のところありません。

他には、参加青年による6テーマの発題と、日韓の歴史問題に関する映画鑑賞や終戦記念日のフィールドトリップがありましたが、課題発表については、問題点ないし改善点が山積していると感じました。というのも、2テーマが終了する毎にした分かち合いにより、個人の率直な生の声を聞くことができ、そして考え方や価値観の違いを目の当たりにすることができた、という点では確かに意味がありました。しかしながら、おそらくメインプログラムという位置づけであったのにもかかわらず、時間的制約により意見交換を十分に深めることができなかったのは勿体ないと思いました。

それには2つの意味があり、時間があればもっと色々な意見をきくことができたかもしれないということと、発表のための準備に費やした時間と労力に見合う内容ではなかったということです。なにしろ第1回目ですべてが手探りであったのだから仕方がないことだとは思いますが、今後も発表という形式のプログラムを採用するとした場合、それに向け

て検討すべき課題を3つほど提案したいと思
います。それは①テーマ数を絞るということ、
②日韓で同じテーマをそれぞれが発表する
ということ、③目的意識のある分かち合いに
し、時間に余裕を持たせること、です。自由闊
達な意見交換の場を持つということは、頭で理
解したり、想像することでは得られない、"感
じ取る"しかないものを得るには欠かせない
と考えます。そして、国が異なる日韓の青
年が集う場合、感じ取るしかないこと、とい
うのは決して少なくないと思うので、発表と
それを踏まえての分かち合いをするという形
式は非常に有意義であると思います。

映画鑑賞やフィールドトリップは、個人と
しては、このセミナーに参加しなければ考
えることはなかったであろうことに思いを馳
せ、行くことはなかったであろう場所に足を
運ぶ機会を与えて頂けたので、ありがたかつ
たのですが、惜しむらくはその後に分かち合
いの時間が無かったことでした。

総括的な感想を述べますとプログラムの構
成自体は惜しいところが一部あるくらいで、
ほぼ良かったと思います。ただ、スタッフの
方々には本当に申し訳ないのですが、運営が
今ひとつ、というのが率直な感想です。一番
改善を求めるのは、セミナーの趣旨、位置づ
け、方向性を確立し、それを参加者とスタッ
フ全員の共通理解とすることです。とくに今
回は、日本側でスタッフと参加者との間で見
解の相違がありましたし、日本の参加者の意
識と韓国の参加者の意識との間にも、かなり
の温度差を感じました。また、スタッフがど
こまで進行中のプログラムの内容に踏み込む
のか、という点も明確にしておいた方がよい
と思います。私は声明文作成委員になったこ
ともあり、その時にやりにくさを感じたため、
特に、その点をはっきりしておいた方がよい
と感じたのかもしれませんが。ですが、気に留
めていただけると幸いです。

それから、実際に参加して、しみじみ感じ
たことは、予想以上に気力・体力共にエネル

ギーが必要であったということです。今回の
セミナーは、河口湖畔というロケーションは
最高だったはずなのに、6日間で心も体も疲
弊し切った、という感覚が色濃く残っていま
す。勿論、楽しいことも嬉しいこともありま
したし、充実していて有意義な6日間であっ
たのは確かです。ですが、どうしても"しんど
かった"という感は拭えません。時間の余裕と
心の余裕がある人が参加するに越したことは
ない、とは思いますが、自分次第で得るもの
はいくらでもあると思うので、たとえ日韓に
興味・関心が薄くても、今後多くの人に、参
加(=果敢に挑戦)して欲しいと思います。

以上



祈ることの力 ～2006年日韓聖公会青年セミナーに 参加して～

日本聖公会北関東教区
平岡康弘

僕は、お祈りがあまり好きではありません
でした。祈りには2種類あると思っていま
した。自分の現世利益をもとめる祈りと世界
の平和を望む祈りです。前者はなんだかあま
りにも自己中心的すぎですし、後者はあま
りにも自分の生活と乖離した抽象的な祈りに感じ

てました。効率主義的な考えかもしれませんが、お祈りしてもかなえられないけど、何かに役に立つのかなと思っていました。

しかし、日韓聖公会青年セミナーに参加して、祈ることの力みたいなものを感じました。今回、このセミナーに日本側からは、北は北海道、南は沖縄の10教区から1人ずつの青年が参加しました。一方、韓国側からは、ソウル教区とテジョン教区から15人の青年が参加しました。双方事前に研修を行い、それぞれ3つのテーマを発表しあいました。日本側のテーマは、改憲問題、在日外国人、米軍基地問題。韓国側からは、イラク派兵問題、外国人労働者、韓国青年文化の問題。また特に、8月15日の終戦記念日に靖国神社へのフィールドトリップが予定となっていました。このことには、特別の意味があります。小泉首相の靖国神社参拝が、アジアの外交問題となっているからです。韓国の人にとって小泉首相が靖国神社に行くことは許せないことなのです。

僕も含めて多くの日本人には、このことをとても難しく感じ、理解しにくいことでした。その理由の1つには、歴史的無知です。このセミナーで感じたことは、感情的な問題を別にしても、韓国の青年はよく日本のことを知っているが、日本の青年はよく韓国のことを知らないということです。名古屋における研修で香山洋人司祭から、歴史を知らないと出会えない関係というのは寂しいというようなことを聞いていました。しかし、一方で、歴史を学ばずに韓国の青年と平和の道を共に歩むことはできないとも感じました。

特に、今回のセミナーの共同声明文を作る作業は、問題が複雑なためか、それぞれの様々な意見が特別な思いを持って語られ混乱しました。1つ1つの意見に対して、僕の中でいろんな思いや意見があふれ出すのですが、頭の中が混乱しました。そして僕自身は、だんだん、意見を言うことも聞くことも苦しくなりました。そこで、ただ祈ることにしました。

というのは、今回のセミナーの主題講演で西原廉太司祭から、世界教会協議会(WCC)のことを学びました。WCCの会議が停滞したときは、中断し参加者全員がともに祈る時を持つのだそうです。1つの議題に対して、賛成をしかねるかもしれないが、決議に神様のみこころがあらわれることを同じクリスチャンであるなら心を1つに祈ることが出来る。それは、キリストの共同体だからできるとも素晴らしいことだと感激していたからです。

僕は、皆の中にキリストがあり、そのみこころがあらわれることを祈っていました。前の僕でしたら、意見を言わず無言であるということは、参加をしていないということとほぼ同義でした。意見を言わない人は何も考えていないという偏見がありました。そして、違う意見の相手は、いかにして論破しようかということを考えていたでしょう。どうしても、妥協しない相手に対しては非難するか、無視しがちでした。

しかし、神様を信頼し、皆を信頼し続ける祈りという形で会議に参加しました。それは僕にとって、とても気持ちが楽な方法でした。そして会議の最後、さまざまな意見の衝突があったキリストの弟子達が、祈りをもって終わる瞬間。今までにない充実感を感じました。自分の力ではどうしようもなくなり、かつ自分がどうしようもなく苦しくなった時、神様を信頼し、祈ります。

日韓聖公会青年セミナー共同声明を出せたことを誇りに思い、僕が参加するのを支えてくださった北関東教区に感謝しております。



日韓聖公会青年セミナーの感想

日本聖公会東京教区

中村真理

私は日韓青年の交流プログラムに参加するのは今回が初めてでしたが、このセミナーで多くのことを考え、また学ぶことが出来ました。特に感じたのは、日本と韓国の間にある様々な壁、それは例えば言葉、考え方、物事の捉え方の違いなどだったのですが、それらが私の想像以上に大きなものであったということです。

話し合いの際やちょっとしたときに感じるその違いはある程度予想していたものではあったのですが、改めてその深さを痛感したように思います。それらの違いや壁に気づいて考え始めることができたことは今回の大きな成果のひとつだと思います。またそのような違いがあると共に、日本にも韓国にも存在する共通の思いや課題にも触れることが出来ました。その違いや共通点について互いに話し合い、分け合うことが出来たのはとても意味深いことでした。今回の日韓聖公開青年セミナーは、韓国と日本の間にある様々な課題・問題を共に考えていく、そして実際に行動を起こしていくための第一歩を、本当に小さなものではあったのかもしれませんが、共に進むことが出来たのではないかと思います。

韓日青年交流セミナーの感想

日本聖公会横浜教区

橋本恵一

今回のセミナーで自分が大きく変化した部分があった。それは歴史的な問題を正視、または正視できる用意ができた事であった。

『アンニョンさよなら』を見終える頃、今までの日本がしてきた事の重大さ、それが今日的に本当の意味で和解していないという深刻な事に気がついた。正直に話すと、恥ずかし

ながら今まで私は自分の事として受け止められていたかと言うと、そうではなかった。政府や民間のレベルで謝罪の要求、反目デモなどを見たり聞いたりしてはいたけれども、体感できずにいた。私はそれを少し、無知を盾として敬遠さえもしていた。

映画を見て私が感じた事は、住んでいる国、人々がしてきた事について、それを被った人々に対して謝罪したいという思いだった。セミナーの後半の方の共同声明の確立には、委員会の方々が多大な苦勞を背負い、一つになるまでは幾らか時間を要したけれど、そこに行き着くまでに、参加者全員の強固な意志を見た。きっと話し合いの過程で対立が、和解が、共感が個々人の胸の内にあったけれど、最終的に納得して行き着いた結果は、誰にも妨げられない力の可能性があった様に思う。ただ、それらを維持して行く事にも、私たちクリスチャン青年は尽力、犠牲、共働をして行かなければならないのを認識しなくてはならない様に思う。



2006年日韓聖公会青年セミナーを終えて

日本聖公会中部教区
金善姫

2004年の日韓聖公会宣教協働20周年記念大会の参加を通して、青年たちの交わりを続けたいという思いも知っていたので、日韓の交流にぜひ参加したいという思いがあって、参加させていただきました。

準備会の時、香山先生と野村先生の講義を通して韓国人でありながらも日本側に参加する事も意味があると思えたので、グループの中でコミュニケーションを取りながら、特に在日外国人の問題において、在日韓国・朝鮮人の歴史と経済的格差で増えている労働者の問題を中心に勉強させていただきました。個人的にも有意義でしたし、また違う背景を持っている人たちの話も聞けてとても良かったと思います。

日本側の基地問題も憲法問題も自分にとって何一つ欠ける事が出来ない問題であったし、特に最近のニュースは戦争と平和を脅かすようなものばかりで日韓の青年がお互いの声を直接聞ける機会が与えられた事に期待を持っていました。

プログラムの中では野村先生の趣旨説明と西原先生の「公共性」とWCC第9回総会を通して青年たちが自分たちのメッセージを持ち、伝えていく事の可能性を知る機会になりました。日韓の青年たちはそれぞれの課題があるように考えられました。もっと参与と分かち合いがある青年の活動を夢見ながらはじめた集まりでした。

日韓の青年たちのそれぞれの発表と話し合いを通して、色々残念だと思う事があります。韓国の参加者と関係を作るのは難しいと感じました。韓国の参加者には日本の参加者として見えたのかと…。世代の差も感じて、個人的な出会いが難しかったと思います。日本側の参加者と話をしながら、日本に来て6年間

神学を学んでいる者として、両国間の懸け橋として生きる事の意味と困難をもう一回確認する機会になりました。

「あんにょんサヨナラ」という映画の内容である靖国神社の問題は知ってはいたつもりでしたが、映像を通して見るその本人の証言や活動には心を打たれました。その翌日のフィールドトリップで訪問した高麗博物館と靖国神社での短い時間、日韓の間にある歴史の清算なしには前に進む事が出来ない事実へと責任を感じます。特に戦争を経験していない世代の人たちが共に歴史を学び、理解していく中でそれぞれの角度から見て理解する機会を得る事の大事さを感じます。自分が歴史を学ぶ時の韓国の軍事政権とナショナリズムを越えて、過去を通して現在と未来を生きる事を学べる事を望みます。

共同声明文を作成する中で、問題にもっと深く話し合えなかった事はとても残念に思っています。韓半島の分断の現実と9.11以後アメリカとイラクの戦争を経験し、自衛隊派遣・韓国軍の派兵を直接経験している両国が協力して、平和を守るための努力をしたいという日本側の提案が軽率であるという事で参加者たちがもっと意識を深める事が出来なかった事は今も残念です。基地問題と派遣・派兵と平和憲法第9条、靖国神社の学びを通して平和と戦争を考える中で提案された事であるから次の機会があれば、ぜひその問題に対する理解を深めたいと思っています。

共同声明文を作成し確認する中で、韓国語が分る一人としてとても残念だったのは、日本側は一つ一つ自分たちの言葉に表現したいと思いい見を出しているのに、韓国側はスタッフの発言によって、日本側は青年たちの声を直接聞けなかったという事でした。最後に靖国の問題で、時間をオーバーしながら少しでも直接言葉に出せた事が何より嬉しいです。重いテーマだったので、一人ひとりが自分の言葉で表現出来なかったかも知れませんが、日本側の何人かと夜遅くまで話が出来た事は

とても大切な事でした。

今回は自分が韓国人でありながら韓国の若者と世代差なのか…あまり話せなかった事はとてもショックでした。韓国では大学生の時から、スタッフに近い立場で参加していたからかも知れません。とても良い機会でした。色々難しかったのですが(韓国側からは自分が日本の参加者ではなかったようです)、今からもどんな形でも参加したいと思いました。

日韓のスタッフの姿からも色々学ばせていただきました。そして、準備も進行もありがとうございました。

最後に一つ、日本語を母国語とする通訳者がいなかったのがとても残念でした。



日韓青年セミナーを終えて

日本聖公会京都教区
浮田倫太郎

今回の日韓セミナーにおいて私は様々な経験をすることができました。一番の収穫は韓国の青年との交友ができたことです。韓国の人たちと接する機会はこれまでにはなく、文化の違いなど新鮮なことばかりでした。さらに韓国聖公会の活動の広範なこと、青年活動の活発なことなど、日本と異なる状況を知り驚きました。韓国の聖公会の青年たちは、生活の中に常に教会が溶け込んでいるように思

えました。

セミナーを通じて得た他の収穫として、日韓が互いに抱える問題についての共有・理解についてです。まず、両国における諸問題について、青年がほとんど無知であったことを知りました。相手国の事柄に関しては、本当に初めて耳にすることばかりで、ニュースなどではなかなか大きく報じられることのないものが多かったです。しかし韓国における差別問題など、日本において重視されないけれども大きな問題となっていることが多く存在することを知りました。また、無知に始まり相手国の問題について無関心なことが多いことがわかりました。問題をどう解決するか、という以前に、「何がどのような状況であるのか」ということを能動的に捉え理解することが両国の青年にとって必要なことであると思います。

韓国の青年は日本の青年よりはるかに勤勉で崇高な意識を持つものと、彼らに会う前は思っていました。しかし、韓国もやはり学力社会ゆえ、国民の中に学力格差ができるのは当然の事で、しかも高度な経済発展を遂げつつある昨今、韓国の若者も日本の若者と同じく、国際情勢や社会的問題に関して無関心な態度をとる人々が増えているようです。実際に聖公会の青年も、興味がある社会問題などに関しては非常に深い考察を行うのですが、他の重要と思われる問題、たとえば米軍のイラク派兵などの問題になると、一定の範囲での思考に留まったり、安直な結論や保身論を求めたがる傾向があったように思えます。

この部分は日韓両国の青年を通じて見られる点だと思います。日本の多くの青年も思考の深度が浅くなっているように、韓国の青年もそうであり、まずは考え理解することを始めないと、いきなり何か自分の意見を述べるといったことは無理であると感じました。

平和に関する議論をした際のことでありますが日本と韓国の青年の間においてはかなりの考え方の差があることがわかりました。韓国には

現在明確に軍が存在し、さらに北朝鮮とは停戦状態にあるせいもあり、非常に平和、戦争に対して敏感であると感じました。日本の青年は平和というものを非常に漠然としたものと捉える傾向があります。平和とはどこからともなく湧き出てくる恒久性のもの、とすら考えるのは、一般的ではなく私だけの歪んだ見方でしょうか。しかしやはり一般的にそのような捉え方がなされている気がします。一方で韓国の青年たちの中には、平和は自らがつくり上げていくものだといった考えが見られました。軍隊を持ち戦争も行い、戦と隣り合わせになっているような状況で、やはり平和は湧き出てくるものではないのでしょうか。いつどの瞬間かに、先の核実験のように関係の悪化を招く事態が起こるともわかりません。ですから日本と韓国の青年が、たとえば平和に関して互いに考えようとした際に、お互いのイメージが異なりすぎてなかなか素直な統一の見解は出せないのでしょうか。韓国聖公会の青年も、軍があることに違和感を感じない人が多かったし、当然とも思っていました。平和に対する考え方、これは国や状況が変わればどのようにも変化する、何が一番かとそれで論じ合うことは少し無理があるのだな、と感じました。

このようにセミナーを通じて互いの価値観、考え方の違いなどを感じ取りました。

最終日に共同宣言を採択する際、小泉首相の靖国参拝について、それに対する抗議文を載せるか載せないかで議論になりました。このことに関して、私はその場では事を荒げはしませんでした。日本の青年の言動に非常なるやるせなさを感じました。「セミナーを通してしっかりと話し合っていない」「今ここでどうこういうことではない」などという意見が聞かれました。なぜそのようなことが問題となるのでしょうか。問題は即ち急を要します。今ここでなんらかの抗議を形として示さないとすることは、問題意識を人並み以上にもっているようにみせかけて、実は私たち青年

がほとんど何も問題視していないという程度を露見するようなものだ、と感じました。何のために見た「アンニョン・さよなら」だったのでしょうか。おそらく一人ひとりの心の中に、靖国神社に対する嫌悪感などの気持ちはあったと思います。しかし、問題を本当にわかろうとしていただろうか、といわれればそうではないだろうと思います。あらゆる報道に慣れっこになった私たち日本の青年は、物事を素直に受け入れることに慣れきっています。今回の靖国参拝に関して、テレビ局は熱心に報道しました。きれいごとやもっともらしい批判を形として示すコメンテータの言葉が耳にすんなりと入ってきます。それを処理しきることなく曖昧な受け止め方をし、不完全な自己の意見を立ててしまいます。しばしば日韓セミナーの最終日にも見られた日本側の意見の二転・三転した部分は、おそらくその意見の不確定性にあったと思います。日韓両国が友好関係を維持し、新たな関係を築き上げていくことには、過去を見ることは避けられません。どうも最近はおかしな歴史観を持つ人々が多すぎる気がします。日本だけでなく世界中に見られることで、ですからもちろん韓国での歴史教育すべてが正しいというわけではありません。ただ、少なくとも近代におけるアジア侵略に関して、正面から歴史的事実を捉えていないのは日本であることは確かです。靖国神社というものは、簡単には、そのような過去を直視できず心の置き場に困った人々が、自らの正当化の慰みとして残している場とも考えられます。一部の人にとってそれは対内的な自慰的行為であるから問題ない、などの考えがあります。しかし世界的に見たときに靖国問題は言うを俟たずおかしな話であり、今回首相が参拝した事実に関しては直感的に反感と抵抗を示すべきであったと私は考えます。結果的に日韓両国がしっかりと話し合いを行い、歩み寄れたことはよかったです。しかしそこに行き着く過程の中で、あれほどにまで躊躇を示した

行動は、今の日本を表すかのような（少し誇張かもしれませんが）恥ずかしい動きではなかったか、と思います。やはり一つ一つの問題に関して、より深く考えなければならないことが非常に多くあることを改めて知りました。

セミナーを通して新たな意識が芽生えました。それは国境の問題です。各人はみなアイデンティティがあります。日本人としてのアイデンティティも少なからずあるでしょう。けれどもそのアイデンティティの内容はばらばらです。「日本側」「韓国側」。この響きが非常に耳障りとなった6日間でした。国などなくてよいのではないか、という考えからこのような気持ちが生れました。統一の見解を出す、国の青年としての意見を出すことまでは至らない意見の相違があったはずですが、しかしそれを日本側の、韓国側の、とそれぞれまとめた意見とするのは無理があります。私たちは日本聖公会の代表であったはずで、日本の代表ではないはずですが、国を代表するナショナリズムなど到底持ちえません。というよりも持ちたくもありません。しかしセミナーを通じてしばしば「日本側」の語が「日本聖公会側」ではなく「日本国側」ととられる場面が多かったような気がします。せっかく、という言い方をするとおかしいですが、教会に通う青年の集まりです。一般的見解を述べても仕方がないことです。6日間を通して日本の青年側にはみんな教会の意識が少なかったと感じます。現在の日本の青年や日本の持つ問題を冷静に分析し紹介し議論することはよかったです。そこでバリアを作らずに、「日本」ととらわれずに、交流を通じてもっと外側からこの国を見る視線が養えたらよかったですと思います。今後この課題を持ってよいのではないかと思います。そして日韓以上に、一人ひとりの交流、人間としての1対1から広がる大きな交流が今後必要ではないかと感じました。日韓交流が新たな活動に入った今、今回このように大きな論議ができる大

会が行われた意義は非常に大きいと思います。そしてその中に加わることができたことを非常にうれしく思います。今後はもう少し狭い単位から諸問題について互いに見て、意見を交換し、問題の解決にまで向かうことができるといい、と思いました。



2006年日韓青年セミナーに参加して

日本聖公会大阪教区
森田治美

大阪教区から参加させて頂きました。このセミナーに参加するに当たって、まず5月に名古屋での事前研修がありました。セミナーの趣旨・日韓両聖公会の歩みなどを学び、日本側の参加者たちとの交流を前もって図れたことは大変に有意義であったと思います。この事前研修で、テーマである「東アジアの平和・日韓聖公会の宣教課題」に関連する発表課題を決定し、8月のセミナーに向けて準備してきました。

私は「在日米軍基地問題」の担当だったのですが、準備している中で今まで知らなかった多くのことに触れることができました。セミナーでの課題発表は、日本側・韓国側のすべての課題とも、それぞれに初めて知ることが多くありました。どの発表も大変興味深く、日本と韓国で同じような社会問題もあり、セミナー後も続けてこれらの問題に関心を寄せて学んでいきたいと思っています。各発表後のグ

グループ別の分かち合いでは、参加者それぞれの意見が述べられ、与えられていた時間では足りないこともしばしばありました。

フィールドトリップと河口湖散策の時間もこのグループ別に分かれて行ったので、同じグループのメンバーとは親しく交わることができました。フィールドトリップでは、後に声明文にどのような形で載せるかで議論になった靖国神社へ行きましたが、帰ってからこのフィールドトリップについての分かち合いの時間をもち、参加者たちでどう感じたかなどを話し合いたかったと思います。

今回のセミナーは、過去の日韓聖公会交流の20年を踏まえたうえで、今後両聖公会が協働していくための新しい歩みの第一歩であるとの認識をもって参加していました。ですから日本側の神戸教区、韓国側の釜山教区からの参加者がいなかったことは大変残念に思います。また、参加者が日本側10名、韓国側15名と同等人数でなかったこと、通訳者が全員韓国人だったことなどから、両国間のバランスがとられていなかったように感じました。今後はセミナーに参加した者だけの個人的な交わりだけでなく、セミナーで受けた恵みを各教区に持ち帰り分かち合い、また次の参加者が集められる、ということが「協働」していくためには必要なのではないかと思います。



日韓青年セミナーに参加して

日本聖公会九州教区

沖本恭子

全体として

今回のセミナーは日本各地そして韓国から集められ、交流の場を持てるすばらしい機会であった。めったにないこのチャンスで様々なことを提案・議論しこれからの生活においても大切な役割を果たすことになるだろう。それは日本側の参加者の意見交換でもちがいを認識しお互いの考えをぶつけることができたからだ。自分の意見をぶつけ、他の意見を受け入れさらにしっかりと自分の意見をつくりあげたいと思う。

グループ発表

それぞれの議題における日本での現状韓国側の認識の違いを改めて知った。このような場をもち、韓国側とは根本的な問題の所在は違うところにあるが、平和を願う気持ちは同じであることには変わらない。

フィールドトリップ

私自身が靖国問題や韓国青年の心情をよく理解していない状態で行った靖国神社であったことが後に判明し、とても反省した。最終日には、書物やマスコミだけでは知ることのできない、心の声を生で聞いたことがこのセミナーに参加した一番大きな収穫である。最後にこのセミナーに集められたメンバーにめぐり合うことができたことに深く感謝します。



日韓セミナーに参加して

日本聖公会沖縄教区
岩佐直人

今回のセミナーで日韓合わせて6つの課題について発表がなされ、それぞれから新しい情報、課題、そして視点が与えられた。

「課題」というものは、大多数の民衆が「当然」としてしまっているものに、気づき・関心からごく一部の人が声をあげたものを指すのかもしれない。もしそうであるならば、「課題」に対する克服とは、気づき・関心を持った一部の人間が大多数になれるのかということになるのかもしれない。日本聖公会は、そしてわたしは関心を持てるのか。そして知り得てから大多数となるために働けるのか。日韓関係もつまるところそうなのではないか。

「韓国とは」、「韓国人とは…」と言えるわたしではないし、一概に言えるものでもない。少しでも増えればと思う。

しかしわたしが出会った「韓国」を伝えていくことで、「韓国」に理解をもつ人が戦後60年を過ぎた現在においても、日韓の青年が戦争に関わる議論がほとんどできなかったことをとても残念に思い、また深刻な問題であると考えている。日本人が口にすることも許されなかった事柄の裏には、「日本」の真摯な態度の欠如がその理由の一つにあるのかもしれない。わたしは韓国の独立記念館にあった「許したい」というボードと、多くの落書きの中にあつた西大門刑務所の「日本政府は嫌い、でも日本人は好きだ」という言葉に希望をかけている。韓国が待っているうちに日本がそこにたどり着き、現代の青年が「今後」の日韓を語れるように望みます。今回の機会を与えてくださった主に感謝します。



2007 年
日韓聖公会青年セミナー

日時：2007 年 8 月 9 日～14 日

場所：韓国 ソウル

1)プログラム概略



写真1 参加者全員で記念撮影



写真2 韓国青年振付によるダンス



写真3 ミーティング中の日本側青年

▼1日目(8月9日)▼

北海道・東京・北関東・中部・京都・大阪・神戸の各教区から1人ずつ集まった日本側参加者は、各地より仁川国際空港に到着した。仁川空港からはチャーターバスに乗り、会場であるオープンしたての南山ユースホステル

へと向かった。韓国側参加者はすでにユースホステルに到着しており、日本側一行を華やかに出迎えてくれた。時間の都合上すぐに夕食会場にて夕食。韓国ならではのキムチがふんだんに盛られたバイキング。日本側参加者は「韓国に来た」と実感したくさん食べていた。夕食後は開会礼拝として聖餐式をささげた。開会オリエンテーションでは、金根祥ソウル教区主教(現)が TOPIK の練炭活動や脱北者問題と脱北者支援活動に触れ、「平和の地に平和の種になろう」と挨拶をされた。その後、まだ硬い表情を見せながら全員で記念写真に納まった(写真1)。

この微妙な硬さはいつ融けていだろうか。なかなか言葉も満足に通じ合わないなか、そのようなことを各人思いつつ次のプログラムへと進んだ。『心を開く』と題されたプログラム。その名の通り、セミナーのメンバーにとってまさに必要なプログラムである。全員でできるダンスとゲームで、韓国側の青年がすべて準備を整えてくれていた。ダンスは「私たち、一つになり」(邦訳)という曲を韓国の青年がオリジナルで振付をしたもの。リズム感があるアップテンポの曲に合わせた軽快なダンスに、みな軽く汗を流しつつ練習し、ものの30分ほどで一曲通して踊れるまでになった。この間身振り手振りなどでダンスを教えあい、青年間の緊張もずいぶんほぐれていた(写真2)。ダンスのあとはO×クイズを全員で行い盛り上がった。

就寝前のお祈りをしたあと、日本側青年だけで簡単に発表の打ち合わせを行った。事前準備で一度顔合わせをただけなので、少しの時間でも話し合いをしなければならない(写真3)。各部屋にて交流の時間。青年の夜は長い…。初日から夜中、明け方までマッコリや焼酎などを飲み楽しく語らい交流を深めた。両国の文化の話、最近流行していること、個人的に好きなことなどなど、話のネタはつきなかった(写真4)。

▼2日目(8月10日)▼

基調講演

午前中は韓国聖公会大学のゴ・ビョンホン教授による「平和のためのビジョン作り」と題した基調講演が行われた(写真5)。今回のセミナーの「平和の地に平和の種になろう」というテーマに関しては、やや抽象的であり、漠然ととらえることはできるが具体的に何かと問われれば難しいものがあった。しかし、ゴ・ビョンホン教授は講演のなかで、「平和の種をまく人」すなわち「ピースメーカー」とはどのような役割を果たす人か、ピースメーカーになるためにはどうすればよいのかなどを具体的に話された。

以下ゴ・ビョンホン教授の講演内容を要約する。

1) 平和を実現するためには、まずビジョンを持つことが大切である。ビジョンとは展望であり、展望をもった次に計画を立て、それが実現されていく。

2) ピースメーカーと呼ばれる人が誰なのか、どのようにして見分けるか。これは言動ではなく行動によってであり、行動こそが大切さである。頭で考えたことを口にはせずにださず、心で熟成させて行動に移す人のことを「ピースメーカー」と呼べる。

3) 「習う」ということの意味を大切にしよう。あるひとの人生観は隣人からわかるものという。単に「知る」という行為、知識を増やすということ自体は核心ではない。隣人から「習う」次元によって隣人とよき関係になること、よき隣人となることで平和を求めることができるのである。その際にも、やはり考え言葉で話すだけでなく、自らの貴重な時間を運動に充てるのが大切である。

ゴ・ビョンホン教授の講演を聞き「平和の種になろう」ということは、少なからず行動していくことで実現に向かっていくことなのだと感じた。



写真4 夜の交流会にて



写真5 ゴ・ビョンホン教授

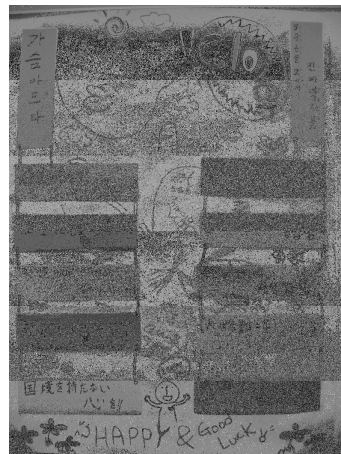


写真6 平和の思い

ただ、これだけでは受け身学習のみになってしまう。今回、講演の後半に「visionをつくろう！」と題して実際に青年が「しようと思うこと」「しなければいけないこと」など、講演を受けての思い・考えなどを発表する時間が設けられた。グループごとに分かれて短冊型に切った色紙に考えを書いていく。続いてグループ内で各人の考えをシェアリングして互いの認識を深めていった。分かち合いの過程でグループとしての思いもつくりだし、最終的にグループごとに模造紙に短冊をはり、全体の前で発表した(写真6)。この一連の作業により、一つの形ができあがることで、共に平和を考える意識と、一つになっているという感覚を得られた。

日韓青年による発題

午後からは日韓双方の青年が準備した発題の発表を行った。日韓聖公会青年セミナーは、東アジアの平和を創りだすこと、それに向けて日韓両国の青年がともに歩むことを目指している。その趣旨のもと、両青年が現在問題がある、と感じることを事前に調べ報告した。日本側の発題は、2006年8月15日に小泉純一郎首相(当時)が参拝し大きな問題となった靖国神社について、その在り方や問題などを報告した(写真7)。この発題にあたっては、事前準備として靖国神社を訪れている。日本側の発表内容は後にレジメを引用しておく。



写真7 日本青年の発題

韓国側発題

韓国側の発題ははじめに金根祥主教(現)の拶にもあった「脱北問題」についてである。「脱北問題」については日本国内において、中国瀋陽の領事館への駆け込みなどをめり一部報道がなされるなどしていたが、知らない点がほとんどであった。以下韓国側青年の発題をまとめておく。

韓国における脱北者の数は年々増加しており、2007年夏現在で10,000人を超えている。脱北者は1990年には年間で9人のみだったが、90年代後半以降急激に増え始め、99年に148人、2002年にはついに年間1000人を突破し、1141人となった。その後も増加傾向は変わっていない。韓国政府は「統一省」を中心として受け入れ施設の拡充などを行っている最中であるという。具体的に脱北者が中国などから直接あるいは第3国を経由して韓国に入る場合、ブローカーと呼ばれる仲介業者が手助けをしているが、ここで1000万ウォン近くの費用が必要となる。韓国政府はその資金の不透明性や、脱北者急増の背景にあるブローカーの存在そのものも問題視している。1990年代になるまでは「脱北者」という言葉は使用されず、韓国政府は「帰順有志」などと呼び手厚い援助のもと受け入れを行っていた。ところが、近年の急激な増加により、政府の方針は実際上は「受け入れ拒否」の方向に向いているといわれている。

韓国に無事入国した「脱北者」は1カ月ほどかけてスパイか否かの尋問を受け、それをパスすると「ハナ院」と呼ばれる韓国定住支援施設での10カ月の研修を受ける。ここで韓国での生活や言語などを身につける。ハナ院修了後は韓国政府より職業訓練支援金などの手当てをうけつつ就業訓練を行い、就業していくことになる。このプロセスが順当に進めば、「脱北者」の人権は守られ、韓国国内で豊かに生きていくことができるであろう。しかし、現在の韓国において「脱北者」を取り

巻く環境は厳しい。

社会体制の違いから来るカルチャーショックなどで、韓国社会に適応できない「脱北者」が多く存在しているが、その背景として、「脱北者」に対する差別や偏見もある。ことにスパイ事件などが起こると、「脱北者」全体に対する視線が厳しくなっていく。また、実際の生活上で最も問題視されているのは就業に関することである。

脱北者が正社員として就職するケースは全体の4分の1ほどという。(2008年度に韓国赤十字社などが行った調査によると、10人中8人が健康状態や就職難を理由に無職であることが判明している。北朝鮮人権情報センターが2007年末、入国5年以内の脱北者のうち401人を対象にした調査でも、失業率が一般の韓国人の失業率に比べて6倍以上であることが明らかになった。)

非正規雇用に従事せざるをえなかったり、職に就くことができない「脱北者」が多く存在し、失業率が高くなっている理由の1つに、3K(きつい、汚い、危険)業種と呼ばれる職の存在がある。「脱北者」の場合、就職できたとしても、主にビルの清掃員やバス・タクシー運転手、食堂の従業員、工員、建設現場や農場での労働に従事するケースが多い。公務員になった脱北者は、韓国統一省と国家情報院、国防省のごく限られた省庁で脱北者や北朝鮮関連の業務に携わる10人ほどしかみられない。

就職支援を受け職業訓練をうけても、民間で3Kという職業にしか就くことができないことは大きな問題である。それまで韓国人が担ってきたそれら職種を、「脱北者」に脱北してきた外国人というレッテルを貼り、彼ら自身の負い目に任せこれら職業に従事させる選択肢しか用意しないということは、明らかな差別であるといえる。就職にあたってのこのような環境がもとで、離職を早めたり失業してしまう「脱北者」が多数いるのが現況である。

韓国側の発題により、何気なく「脱北者」を捉えていた日本側の参加者は、その生死をかけた脱出の後の韓国国内での差別の現実を聞き胸を痛めた。その後のわかちあいでは、支援内容や現在の支援活動など具体的な質問が出、過去における分断の歴史上、日本が大きくかわる問題であり、今なおこのような問題を残し続け新たに生み出してしまっていることに怒りと悲しみを覚えた、などの声も聞かれた。

▼3日目(8月11日)▼

映画『ウリ・ハッキョ』鑑賞

午前中は札幌にある北海道朝鮮初中高級学校の生徒たちを舞台にしたドキュメンタリー映画で、日々の生活を通じた生徒たちの思い、学校教師の思い、オモ二たちの思いが描き出されている。また、絶えない学校や生徒たちへの差別と偏見による嫌がらせなど、目を背けたくくなるような現実が浮き彫りとなっている。今では不可能なことだが、万景峰号に乗って祖国へと向かう修学旅行の様子もカメラが追っている。

日本に住んでいると、地域によって異なるかもしれないが、朝鮮民族学校の名は聞く機会があるし、近くにある場合もある。身近に目にし耳にすることも多いが、韓国の青年にとっては在日問題はややなじみの薄いものらしい。祖国をともしにする同胞なのだが、現代に生まれた青年たちにとっては、日本で暮らす韓国・朝鮮人の人々を同胞と意識するほどに近い存在とは思っていないという。確かに、60年以上も離れた国にいたのだから無理はないかもしれない。映画を見た韓国の青年は、在日朝鮮・韓国人が日本で置かれている状況を目の当たりにし、言葉を失っていた。日常的に受ける差別も心痛むことだが、修学旅行のシーンに到り、彼らの心は一層傷ついたという。修学旅行で朝鮮民主主義人民共和国に

入国できるのは、朝鮮国籍の生徒だけで、韓国国籍の生徒は入国できない。韓国国籍の生徒は、ただ修学旅行を見送ることしかできなかった。映画を撮影してきた監督も、韓国国籍のため入国できない状況であった。

南北問題は韓国の青年にとっても政治的・歴史的に大変興味のある問題という。日頃統一・分断についても考え話したりすることがあるそうだが、よもや日本においてもこのような形で問題が浮上しているとは思わなかったという。映画を鑑賞し、南北問題の現状にあらためて気づき、そして差別や偏見を自分たち自身に向けられたものとして受け止め、痛み、悲しんでいた。日本の青年も在日の人々に対する差別、極度に右傾化し攻撃をする人々の姿につらく苦しい思いを抱いた。ただ、映画の根底には、困難な状況にある「ハッキョ」の生徒たちが、教師、親、同胞たちの見守りのなかでまっすぐに成長していく喜びがある。在日の人々のなかにある問題を自分たちの問題としてとらえともに行動していきたい、などの意見が日韓双方の青年から聞かれた。

ナナムの家訪問

午後は今回のセミナーのメインプログラムでもある、「ナナムの家」(分かち合いの家)を訪問した。「ナナムの家」とは、日本の植民地占領下の末期において、当時の大日本帝国により強制的に徴用され、日本本土ならびに戦地において日本軍の「性奴隷」として犠牲を強いられた、元日本軍「慰安婦」の被害女性たちが集まり生活している場である。「ナナムの家」は1992年10月にソウル市内に誕生した。その後1995年12月、現在地の京畿道広州市退村面所在の地に移り、650坪あまりの土地に建坪180坪の高齢者居住福祉施設が建てられた。さらに現在では、隣接地に『日本軍「慰安婦」歴史館』が建っている。「ナナムの家」に暮らす元日本軍「慰安婦」被害女性らは、毎週開かれるハングル教室と

絵画教室によって覚えた絵を通し、自らの体験を表し、国内外で数度にわたり展示会を開催、日本軍の「慰安婦」に対する蛮行の真相を歴史に残す活動をしてきた。

そして、毎週水曜日に「韓国挺身隊問題対策協議会」が主管する日本大使館前での「水曜集会」を通して、日程の蛮行を訴え、日本が過去の歴史に対して誠意をもって謝罪するよう抗議を続けている。

「日本軍慰安婦」の女性は現在では高齢となり、「ノレモニ(おばあさん)」と呼ばれている。健康上の不安が問題になり、裁判なども続けていけるかなど、問題が多い。2007年現在、韓国社会には234名が「日本軍慰安婦」であったと名乗り出て、うち122名が生存している。そのなかの10名の被害女性が、ナナムの家で共同生活を送っている。「日本軍慰安婦問題」については後掲する。

ソウルを出発してバスで2時間ほど。「ナナムの家」に到着した。日本の農村と見まがうほどに見慣れた光景のなかに、「ナナムの家」は佇んでいた(写真8・9)。一行はまずはじめに「ナナムの家」の日本軍「慰安婦」歴史館の研究員を務めておられる村山一兵さんにお話を伺った。この建物が建てられた意味、ノレモニたちの日々の暮らしについてなど。そのなかで、残念ながら今日はノレモニたちと面会することができないことがわかった。連日のスケジュールは、高齢となったノレモニたちの体には大変こたえとのことであった。ノレモニたちにお会いできなかったことはやはり心残りではあった。

次いで、日本軍「慰安婦」歴史館を村山研究員の解説を聞きながら見学した。地上2階、地下1階の歴史館はとても重厚のある建物で、少しの緊張さえをも覚えながら入館した。

歴史館の入り口には体の前に重ねられた手の写った写真が掛けられている。韓国で初めて「性奴隷」の証言をした金学順(キム・ハクスン)ノレモニの手である。続く第1展示場は「証言の場」と名付けられ、日帝(日本帝

国主義)の蛮行、日本軍「慰安婦」を記録したパネルが置かれ、映像が上映されている。第2展示場は「体験の場」として、実物大の「慰安所」が再現され、当時使用されていた軍票やサックなどの遺物、また亡くなった被害女性たちの遺品が展示されている。第3展示場は「記録の場」であり、日本軍「慰安婦」関連の各種重要文書、写真・映像資料が展示されている(写真10)。第4展示場は「告発の場」と題され、被害の事実を告発する、絵画をはじめとした作品が展示されている。被害を受けた当事者、韓国内の作家たちによる作品が展示されている(写真11)。

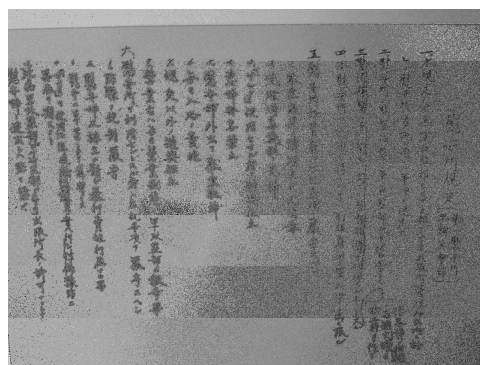


写真10 「慰安所」規則

「ナヌムの家」の日本軍「慰安婦」歴史館には日本人も多く訪れるそうで、日本の企業の労組の千羽鶴などが備えられていた。

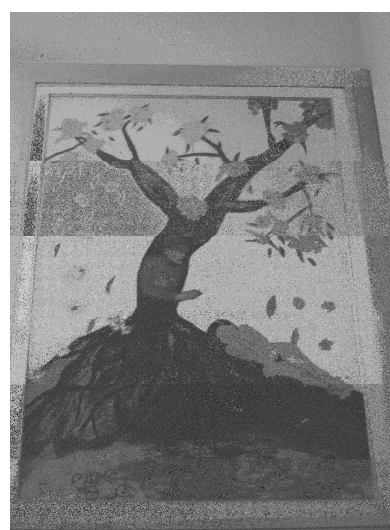


写真11 元「従軍慰安婦」の心の傷を表現した絵



写真8



写真9 ナヌムの家

▼4日目(8月12日)▼



写真 12 ソウル大聖堂で集合写真

ソウル大聖堂

中日となるこの日は日曜日で、午前中のソウル大聖堂での聖餐式に出席した。日本側の参加者はほぼ全員がソウル大聖堂に初めて訪れ、その荘厳な佇まいと大きさに感嘆し圧倒されていた(写真 12)。ソウル大聖堂の教会員のみなさまが歓迎してくださり、言葉はわからないものの、韓国語の祈祷書とともに聖餐式を捧げることができた。時間があまりなかったため、隅々まで見て回ることはできなかったが、素晴らしい経験をさせていただいた。



写真 13 参鶏湯

ソウルツアー

午後はグループに分かれてソウル市内を散策した。韓国側の青年がホストとなってくれ、日本側の青年をいろいろな場所に案内していただいた。「何か韓国料理を」ということで、お昼は大聖堂近くの食堂で参鶏湯を食べた(写真 13)。初めて食べる本場の参鶏湯。大きな高麗人参が入り、まさに滋養食といった感じがする。味は濃すぎず、体に優しい味で、それまでのユースホステルの食事でキムチ漬けになっていた体が一息つけたようである。

タブコル公園

その後、三・一独立運動の始まりの場となったタブコル公園を訪れた。もともとは、円覚寺址十層石塔という塔があったため、タブコル(塔)と名付けられたという。日本政府占領下にあった 1919 年、天道教教主の孫秉熙(ソンビョンヒ)により「独立宣言」が読み上げられ、現在では日本からの独立運動が始まった記念すべき地とされている。公園のなかには三・一独立運動の過程を示した 8 枚のレリーフが壁に沿って並んで立っている(写真 14)。ちなみに、「独立宣言」は 33 名の独立運動家を中心となってつくられたものだが、うち実に 31 名がクリスチャンであったというから、すごいものである。このタブコル公



写真 14 タブコル公園の三・一運動記念プレート

園は、現在整備された近代的な公園となっているが、老年の方の姿をよくみかける。韓国の老年の方々が、昔のことを語ったり、将棋を指したり、政治の話をしたりして集う場所だそうである。

南大門

韓国に来たからには市場に行きたい！とのわがまま(?)で、南大門市場に行くことになった。日曜だからだろうか、ずいぶんと活気があった。一目で日本人とわかるらしく、市場のあちこちで日本語で話しかけられた。品物の多さにも価格にも圧倒され、熱気といふ雰囲気といふ、まさにアジアのバザールだった。

南大門市場の名前の由来は、宮殿の南大門が建つことによる。南大門は正式名称を崇礼門という。韓国の国宝第1号に指定されているこの門は、1398年に李成桂によって建てられた。1448年と1479年に大きく改築され現在の形となり、その後の豊臣秀吉による朝鮮出兵や韓国併合、朝鮮戦争などの災禍をきりぬけ、今日にその姿をたたえている(写真15)。(非常に残念なことに、この半年後、2008年2月10日に放火により焼失してしまった。)

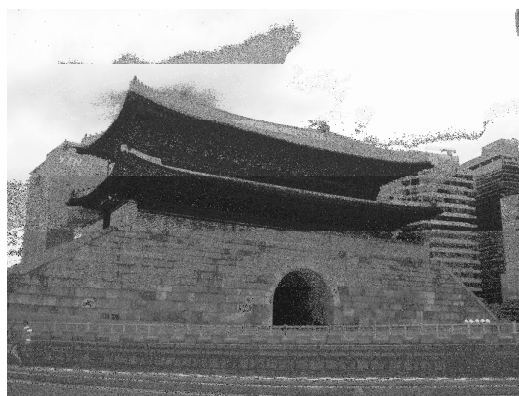


写真15 今はなき「南大門」の雄姿

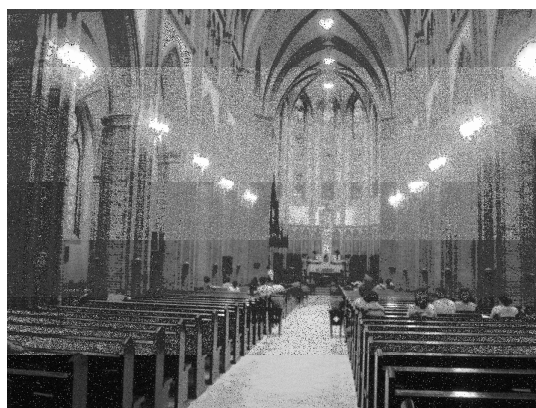


写真16 ゴシック建築の明洞大聖堂

明洞大聖堂

カトリックの明洞大聖堂にも足を運んだ(写真16)。残念ながら修築中で、特徴的な高層の鐘楼は見ることはできなかったが、ゴシック建築で整えられた広い礼拝堂内部などを見学でき、聖公会大聖堂とは異なった美的建築にまた一同感嘆していた。大聖堂に隣接してショップがあり、ロザリオなどを買うことができた。

サムギョブサル!

ソウル観光の一日を締めくくるのは今日本でも話題のサムギョブサル(写真17)。サムとは「3」のことで、豚肉の三枚肉の焼肉のこ

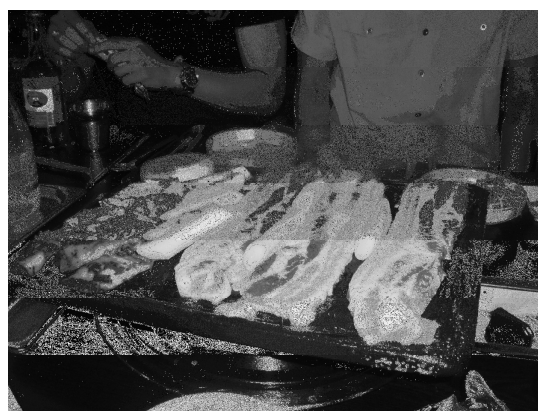


写真17 韓国料理 サムギョブサル

とである。焼肉と聞くと、「プルコギ」すなわち牛肉の焼肉を想起しがちだが、韓国ではこのサムギョプサルが主流だという。分厚い豚バラ肉を豪快に鉄板に乗せ焼いていく。トッポギやキムチなどどれもおいしく、ソジュ(焼酎)を片手に満腹になるまで食べてしまった。サムギョプサル専門のお店に入ったのだが、なんとも緩やかなムード。何がというと、店員さんの動きが。日本ではあまり見かけない!?、店員さんが酒類を入れる透明なガラス戸の冷蔵庫にすっぽり収まって体を冷やしているではないか(写真 18)！暇なときには携帯をいじったりなかなか自由なようで、文化慣習の違いを感じた。



写真 18 冷蔵庫で涼む店員

▼5 日目(8月13日)▼

平和の歌

当日はセミナーのこれまでの学びと体験を振り返り分かち合う作業を行った。とはいうものの、寝起きの頭でいきなりワークを行うことは難しいので、日韓両青年が準備をした、

「平和の歌」を披露しともに歌うことになった。日本側が披露した歌は「世界に一つだけの花」と「イムジン河」。「世界に一つだけの花」は槇原敬之が作曲したスマップの大ヒット曲で、愛を歌う一方で一人ひとりの人間を尊重し大切にすることをメッセーに込められた曲といえる。この歌を簡単な手話をつけて歌った。「イムジン河」は近年、映画「パッチギ」でも話題ともなったが、もともとフォーク・クルセダーズが朝鮮半島の分断を嘆いて歌ったもので、発売当時は発売禁止処分となってしまう歌である。この「イムジン河」を韓国語の歌詞も交えて歌った。

韓国側が用意した曲は、「人は花より美しい」。韓国の国民的ロックスター、アン・チファンが歌うこの曲は、韓国の軍政から民主化への運動の盛期に人々を勇気づけた曲として知られている。力強い歌唱は聞いているだけで元気がでてくるが、歌詞を知りさらに心が温まり力が湧きでてくる。この場に少し邦訳詩を紹介させていただく。

「人は花より美しい」(アン・チファン)
 川の水の流れのような歌を抱いて生きている
 人は、わかるだろう／
 鬱蒼としている山々が なぜ夕闇とともに川
 へと流れ込み宵の夢を見るのかを／
 どうして夜が深いほど、言葉なく撫であいなが
 ら、ぐっと抱いたまま、ゆっくり馴染んで
 いくのかを／
 たえきれないさみしさに、途方にくれた人は
 わかるだろう／
 苦しみに屈せず あきらめず いつの間にか
 輝く種を植えて／大きな葉を育てる愛こそが
 ／深緑の森となり、山になり、山びこになっ
 て響きわたるということを／
 誰が何と言っても、人は花より美しい／この
 すべてのつらさに打ち勝った、まさにその人
 のことだ／
 誰が何と言っても、人は花より美しい／
 歌にぬくもりを抱いて生きている、まさにあ
 なたと私、真の人間なんだよ／

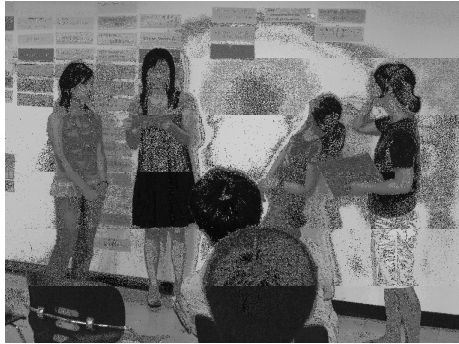


写真 19 平和のビジョン発表



写真 20 フェアウェルパーティー

平和のビジョンづくり

歌を歌い、お互いに心が高ぶっているなか、続いて「平和のビジョンづくり」を行った。今回のプログラムの総括として位置づけられる。「平和の地に平和の種になろう」というテーマのもと5日間をすごし、どのような思いを抱き気づき、どんなビジョンを描けただろうか。一人ひとりが短冊に思いを込めた。

短冊はメイン会場の壁に貼り出し、一つ一つ読み分かち合っていた(写真 19)。

「韓国、日本ではなく、私たちはアジア人だ!」「アジアを歩く」「もっとたくさん国を越えて話し合える機会をつくる」「いつでも弱い立場の人の味方」「この出会いを大切に、情報を分かち合おう!」「優しい気持ちを忘れないこと」「人と出会い、人と人をつないでいく」…

様々なビジョンが出された。やはり多くの青年が感じたことは「出会う」ということだったようである。「出会う」ことによって、話し、聞き、考え、涙し、笑い、動き…これらの活動をともにした両国の青年は、深い絆で結ばれ、日本や韓国という通常の意識の垣根を越えたのではないだろうか。そこに、真に相手と向き合い同じ方向に向かってともに歩いていく一歩を築けたことだろう。「平和の地に平和の種となろう」。おそらく、永遠に持続するテーマであるし、持続させなければならない。今回のセミナーで出会った青年の活発な活動が、ビジョンを経て形となり進んでいくことを願う。

ビジョン形成のほかに、今回のセミナーの自己評価を行った。2極に分類した3つの評価項目に、それぞれ5段階の評価をし、ちぎり紙を貼っていった。1番目の項目は「痛み」と「リレーションシップ」。過去や現在の問題に向き合い分かち合うなかで、痛みを覚えただろうか、反対にともに向き合う協力関係は築けていただろうか。2つめはセミナーに「参与」できたか、もしくはいろいろな場面で「配慮」をいただろうか。3つ目は「主」と「平和」。それぞれの分野で1と2が多数を占め、高評価の5は少ないピラミッド型となっていた。ことに注目したのは「主」について1の評価をつけた人が多かったことである。

「主」と「平和」、両者は一体のうちにあり、「主の平和」により真の平和が実現されるものと考えられるが、日韓双方の青年とも、現実の平和に思いを巡らせ、なかなかその途上で主の声に耳を傾けることが難しかった、と自分たち自身で評していたようであった。

フェアエルパーティー

毎年のセミナーのもっとも盛り上がる場面、フェアエルパーティー。名残を惜しみつつ、日韓青年混合のグループごとに準備した出し物を披露し、夜が更けるまで大いに盛り上がった。最初のグループは「大きな栗の木下で」に振付をしたダンスを演じ、それを会場全体で行い徐々に速度を速める遊びを行った。簡単なようで意外と難しく、会場は盛り上がっていた(写真 20)。続いてのグループは「ルク



写真 21 フェアウェルパーティーでのダンス



写真 22 盆踊りの披露

「シンプル体操」という軽快なダンスを披露し会場を沸かせた。次のグループは韓国のバラエティー番組をパロディー化し、ショートコントやネタを披露し会場は大盛り上がり。最後のグループは日本のポップスに合わせて男性が女装しダンスを披露し、これも大いに喝采を浴びていた(写真 21)。

そのあとは日本側の参加者で浴衣に着替え盆踊りを披露した(写真 22)。日本的な浴衣は隣国韓国でも珍しいらしく、盆踊りのあとは韓国青年が浴衣の着付けをし楽しんだ。この夜は多くの青年が朝まで眠らずに語り盛り上がった。

▼6 日目(8月 14 日)▼

聖餐式

最終日には閉会礼拝を兼ねて聖餐式を行った。この聖餐式は通常の聖餐式ではなく、グループごとで式の各部分を担当し全員で一つの聖餐式を創り上げた。本物のパンを使用した陪餐や、平和の挨拶、代祷など様々に考えられた聖餐式がつけられた。聖歌は通常のものでなく、平和のうたでわかちあった歌を歌うことにした。実に青年らしい印象的な聖餐式となったが、もっとも印象的なことを挙げるならば平和の挨拶だろう。平和の挨拶は握手ではなく、一人ひとりが感謝の言葉を相手に述べて抱き合っていた。そのとき、青年一

人ひとりの目は涙で濡れていた。参加者のありのままの気持ちがあふれ出した瞬間だった。一人ひとりの人間が、互いのことをこれほどにまで強く優しく思い愛しているのに、そこに国家という人を分かってしまう強大な権力が立ちはだかっている、すくなくともそのように見えてしまう。そのような現実が悲しくなり、さらには一人ひとりがこうして愛することができたことに対する感謝の涙を流したのかもしれない。各人思っている胸中はさまざまだろうが、多くのプログラムをともにし、「平和の種になるろう」とのテーマをともに歩んできた。最終日に自然に流れ落ちた涙。まさに隣にいる隣人を愛していることに気付いたこと。そこに、平和の種になった私たちがいたのではないだろうか。

2) 日韓聖公会青年セミナー事前準備会資料

07/07/06
名古屋学生青年センター

日韓聖公会青年セミナー開催の意義

野村 潔

I、宣教論の転換と『福音伝道の10年』

1、『福音伝道の10年』提唱の背景

- (1)'88ランベス会議の認識
- (2)聖公会の歩み
- (3)『福音伝道の10年』提唱の理由
 - ①多元化社会の到来
 - ②第二次大戦後の社会変化

2、宣教論の転換

- (1)教会中心主義的な宣教理解への反省
- (2)神の宣教
 - ①神→教会→世界から神→世界→教会へ

3、聖公会における宣教理解

- (1)全聖公会の宣教内容(1990ACC・8)
 - ①神の国の良き音信を告げ知らせること
 - ②新しく信仰の群れに加わった人を教え、洗礼を授け、養育すること
 - ③愛の奉仕で人類の必要に応えること
 - ④社会の不正な構造の変革を求めていくこと
 - ⑤被造物の本来の姿を保護するよう務め、地球の生命を支え新たにすること

II、同本聖公会の歩み

1、日本聖公会'95宣教協議会

- (1)『宣言』
- (2)『戦争責任告白』(日本聖公会第49総会決議11996)

2、日本聖公会の宣教方針と宣教課題(日本聖公会第53総会提出/2002)

III、日韓聖公会宣教協働の歩みと意義

1、日韓聖公会公式交流20年の歩み

- ①宣教セミナーの問題性と青年による批判
- ②日本聖公会の「機構改革」をめぐる問題

2、日韓聖公会青年セミナーの開催に向けて

- ①東アジアの平和の実現への参与
- ②同韓聖公会青年セミナー2006から感じたこと

以上

日本聖公会宣教方針と宣教課題

- (a)小さくされている人々と共に、キリストの福音を分かち合うこと
 - ①日本の歴史と現状の中で、差別され、抑圧されてきた人々(小さき者)を見出だすこと
 - ②日本聖公会が、これらの人々に福音を宣言できる教会となるため、自己変革に取り組むこと
- (b)福音を受け入れる人々に洗礼を授け、神の宣教を担う者として共に成長すること
 - ①教会が、神の国の福音に生かされている人々の共同体であるとの自覚を深めること
 - ②入信の式の意義を見直すこと
 - ③教会の教育を見直すこと
- (c)差別され、抑圧されている人々の具体的な必要に応えること
 - ①差別され、抑圧されている人々の生きている現場と出会うこと
 - ②日本聖公会のこれらの人々に対する働きに連帯し、支援すること
- (d)不正な社会構造を変革し、正義と平和を実現すること
 - ①同本の社会構造が、差別と抑圧を生み出していることに理解を深めること
 - ②日本聖公会の戦争責任に関する宣言を実質化すること
 - ③正義と平和を推進する働きに取り組むこと
 - ④経済のグローバル化によってもたらされる問題に取り組むこと
- (e)被造物の保全に関心を向け、地球のあらゆる生命を支えるために活動すること
 - ①国内外の具体的な環境問題に関わる様々な課題に取り組むこと
 - ②死刑制度の廃止に取り組むこと
 - ③核兵器の廃絶に取り組むこと
 - ④原子力利用の廃絶に取り組むこと
 - ⑤生命倫理の問題に取り組むこと
 - ⑥食物の問題について取り組むこと

宣 言

1)はじめに

「それゆえ、主は恵みを与えようとして
あなたたちを待ち
それゆえ、主は憐れみを与えようとして
立ち上げられる。
まことに、主は正義の神。
なんと幸いなことか、
すべて主を待ち望む人は。」
(イザヤ書30:18)

1994年5月日本聖公会第46(定期)総会は、95年宣教協議会の開催を決議しました。この決議に基づき、1995年8月28日から31日、わたしたちは、〈戦後50年〉の節目にあたり、「歴史、世界、社会、民衆の中で働いておられるキリストに生きる教会」をめざして「日本聖公会の宣教一歴史への責任と21世紀への展望」という主題のもと、この協議会に集いました。主題講演(「日本の歴史と宣教理解」)や聖書研究(「正義を行なうこと」への召し)、また祈りの集いの中での韓国、フィリピンからの証言を聞き、いままでわたしたちが、自らの信仰において歴史の総括と反省を怠ってきたことを確認しました。さらに特別講演(「あらゆる場を変革するために」)、現在も痛みを負わされている女性や障害者からの証言および環境問題からの問いかけを受け、21世紀へ向けて働きはじめるために課題を明確化し、提言を行ないました。

わたしたちは過去において日本聖公会が犯した過ちを神の前に告白し、日本が侵略してきたアジア太平洋諸国の人々と神に赦しを請います。わたしたちが神の民として〈正義を行なうこと〉へと召されていることを自覚し、世界の分裂と痛み、叫びの声を聞くことで

きる教会へと変えられることを祈り求めます。

生きておられる神、
生きて働いておられる神の霊が
わたしたちをここに集められました。
証しのために、祝いのために、たたかうために。
あなたのいのちの中で、
悔い改める力を与えわたしたちを新たにしてください。
(礼拝のなかでもちいられた祈りより)

2)日本聖公会の歴史への責任と応答

わたしたちは、人類の愛と一致をめざして十字架につけられたイエスと共に死に、イエスと共に復活の新しい命に生かされる信仰の決断において、初めて真に隣人と出会い隣人を愛することができる新しい神の共同体(=教会)へと招かれています。しかし、しばしば制度としての教会が、その教勢の拡張、体制の維持のみをめざす自己目的のために、この福音を歪曲してしまいます。イエスが共に苦しみ共に歩む道を示された隣人に会うことなく、愛と連帯の関係を見失う過ちに陥ってこなかったか、わたしたちは問い続ける責任を負っています。

五十年前の1945年、わたしたち日本聖公会は、天皇制国家日本の敗戦と植民地支配の終焉という大きな歴史的転機に立ちました。その年の総会で、佐々木鎮次主教は告示において、戦時下の教会の反省を述べる中で「国策への迎合」「教会の使命の忘却」を指摘しました。総会も主教会も教区も各個教会もこのとき、戦時下に預言者的働きをなしえなかったことを徹底的に反省し、日本が侵略支配した隣人へ心から謝罪し、それを通した真の和解の関係を模索する機会を、神から与えられていたのです。

しかし、日本聖公会は、「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈祷」などをもって

祈り、他民族支配や戦争への協力をキリスト教の名において肯定したという過ちを顧みることなく、1947年二十二総会において、1938年版の祈祷書を正本として復活採用しました。その祈祷書には、天皇の支配を神の御旨とみなす「天皇のため」「紀元節祈祷」などの祈祷文がありました。さらに1959年改正まで、祈祷書の公会問答において「隣に対してなすべきことは如何」の答えとして「…天皇陛下とその有司(つかさ)に従い…」と教え、聖餐の前の全公会の祈りにおいて「すべて主権を持つもの殊にわが今上天皇を祝し」と司祭が祈り、早晚祷では天皇への祝福を唱和することを義務づけていました。このように日本聖公会は戦後処理を自覚的にできなかったことは明らかです。

その後日本聖公会は、祈祷書改正において、「紀元節祈祷」・「天皇のため」の祈り等を削除してきましたが、国家の意志を神の意志とする信仰の決断をしてしまったことについて、根本的な反省をいまだ表明していません。今回、協議会に集ったわたしたちは、教会として、歴史への責任を自覚する原点がここにあることを確認いたしました。

日本聖公会は、その設立以来、福音に反する国の政策や時局にたいして妥協を続け、それを徹底的に拒んだ経験をほとんど持っていません。明治憲法下では「安寧秩序を乱さず臣民たるの義務に反しない限り」の「信教の自由」をもってよしとし、皇国臣民化教育、神社参拝政策、「八紘一宇」の名による侵略戦争正当化などの国策にとりこまれ、気づいたときには抵抗の余地のないところにまで来ていたのです。

日本聖公会が主に英国・米国・カナダ聖公会とのつながりゆえに「官憲の圧迫」を受けた時期がありますが、その経験にもかかわらず、わたしたちの教会は、抑圧されたものと共に立つ姿勢をうみだすことができませんでした。

皇国臣民化政策の結果として引き起こされた沖縄戦の住民虐殺や強制集団自決、戦後は米軍基地の脅威などの沖縄の経験は、沖縄教区を通して語られ、1972年の日本聖公会への移管に向けて「歴史と現状を理解してほしい」との沖縄からの問いかけがありました。しかし、その後も本土側が応答することを怠ってきたことを、日本聖公会は反省しなければなりません。

この協議会において、韓国やフィリピンの聖公会に属する隣人たちから、民族的な苦難のなかでのいのちがけの信仰について証言を聞きました。そしてわたしたちは、日本聖公会が歴史的事実を知らず、知ろうとせず、知らせずにいたことを改めて認識しました。わたしたちは、加害者となり、福音から離れていた自らの教会のあり方を検証しなおす必要を痛感します。日本政府・国会は、植民地支配・侵略戦争をした日本国の加害性および天皇制の責任を明白に言い表すことができませんが、かつてこれに加担をした教会は、そうした国のありかたについても責任を負っています。

こうして天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。

(ルカ11:50)

協議会に参加したわたしたちは、日本聖公会が戦争に加担した責任を痛みをもって自らのものとし、敗戦後、すみやかにこの責任を明らかに表明できなかった戦後責任を確認します。それゆえわたしたちは、日本聖公会が植民地支配と侵略戦争を支持・黙認し、戦後は被害者への国家としての謝罪と補償を実現する努力を怠ってきた事実を明らかにし、その罪責を神の前に告白し、被害を与えた隣人の前に謝罪し、共に儀悔します。また、わたしたちは、日本聖公会が全体として告白・謝

罪・懺悔を行なう必要性を痛感します。とりわけ日本のうちにあつて、歴史的に支配や戦争の被害を受け、今日も差別を受けている在日韓国朝鮮人をはじめとする他のアジアの人々、沖縄の人々、アイヌをはじめとする先住民族、被差別部落民、障害者、女性たちと共に歩む努力を通して、日本の歴史と現状についての認識をただすというわたしたちの責任を受けとめるものです。

戦後日本聖公会は、隣人のいのちを脅かす差別、経済収奪、核政策、環境破壊などに対して、同調こそすれ、預言者的な声をあげてきませんでした。わたしたちが歴史を問うのは、そうした現状を変革し、未来へ向かう決断をするためです。教会の交わりのうちに、「小さくされた者」の叫び声を聞かずして、わたしたちはイエスに従う教会ではあり得ません。この世の権力によって歴史の中で周辺に追いやられた人びとと共に生きる観点を、今わたしたちの信仰の中心に据えなおさなければなりません。アジアからの問いかけに耳を傾け、日本のうちにある社会的少数者と共に歩むことを通して、わたしたちは不正に気づく感性を回復し、神の宣教のわざに応答する信仰者としての決断をするように、今、神の招きを受けています。

3)21世紀への展望

「福音伝道の十年」の中間年にあつて、わたしたちは、教会が〈神の宣教〉のために存在することを改めて確認します。この場合の〈宣教〉とは、歴史の中で働く神の召しと導きのもとに、今ある状況を固定化させず、絶えず変革のプロセスを大胆に歩むことを意味します。人権・正義・環境は宣教課題の中心です。わたしたちは「小さき者」とおとしめられ、苦しんでいる人々の社会的立場、諸権利の回復をめざす教会となることを決意します。日本聖公会の中にも、様々な場で貴重な働きがなされています。わたしたち日本聖公

会は、この宣教の召命への応答を常に新たにし続けなければなりません。

わたしたちは、社会から排除された人々、抑圧された人々と共に被差別状況とたたかいます。

そして、支配者の物語にではなく、民の物語に聞きつづけます。そこから、わたしたちは、わたしたち自身の〈物語〉を語ります。自らの言葉で日本聖公会の歴史と現在、そして未来を語ります。こうした努力をして初めて、わたしたちは主イエス・キリストの福音を受肉化できると信じます。また、わたしたちはこの世界、この社会の中でより預言者的使命を果たすことが求められています。とりわけ、日本聖公会は、差別、抑圧を生み出し支えている社会構造自体を変革するための地の塩、世の光とならなければなりません。わたしたちの参与する〈神の宣教〉とは、これら全てを包括するものであると理解します。

個々具体的には、わたしたちはとりわけ以下の諸課題について取り組む必要を認めます。

第一に、礼拝、説教、聖書研究等が再検証され、より豊かにされなければなりません。毎主日の礼拝での説教が、宣教を励ます力となることを願います。また信徒使徒職の働きが、より認められるべきと考えます。信徒と牧師の関係をより開かれたものとするのが、信仰共同体をよりダイナミックなものとしします。

第二に、教育の問題があります。変革のプロセスを継続させるためには、様々な場、様々な方法での教育が不可欠なものであると考えます。

教会教育、神学教育の場における歴史教育、人間教育、生命の尊厳を保障する教育、すなわち〈宣教を担う者を育てる教育〉の実践が必要です。

第三に、差別されてきたあらゆる人々とわたしたちが真に一つの食卓を囲むために、教会は自己変革を求められています。わたしたちの教会は、在日韓国朝鮮人、被差別部落民、アイヌをはじめとする先住民続、沖縄の人々、滞日在日外国人、障害者の声を聞き、共に生きることのできる場でありたいと願います。

第四に、わたしたちは、キリスト教の伝統が、長い歴史の中で女性差別の源となってきたことを反省し、女性の人間としての尊厳が回復されるために働くことを明らかにします。現状では、わたしたちの教会は（会議性）を持ちながら、女性の教区教会の意志決定への参与は極めて不十分なものです。聖書の読み直しと構造的改革が必要です。さらに、女性の司祭按手の実現は、21世紀に向かう教会の変革において日本聖公会が直面する重要問題であることを認めます。

第五に、環境をめぐる問題があります。第8回全聖公会中央協議会(ACC-8)は、「被造物の保全」を明確な宣教課題として定義しました。「核」をはじめとする環境問題へ関わり実践することは、とりもなおさずわたしたちの生活全体を変えることを意味します。

第六に、わたしたちは、自らの罪を悔い改めと赦しにより救われた者として、また生命の尊厳の立場から、死刑囚に心を向けます。また、第45(定期)総会で決議された「死刑の執行停止を求める要請」を実現するために、さらに、この問題について学び、死刑の速やかな廃止を願います。

上記の課題に具体的かつ誠実に取り組むためには、様々な〈ネットワーク〉を生み出す必要があることを確認します。宣教課題、方策に関する情報を教区、教会間で分かち合い、各個教会・個人を励まし、支えるためのネットワーク、課題別のネットワーク等が考えら

れます。これらのネットワークが、エキュメニカルな広がりも視座に入れつつ、地域宣教のための教会間協力へと発展するものとなることを願います。また、聖公会をはじめとする海外の諸教会との関係が、より一層実質的なものとなることを願います。

4)提案事項

上記の諸点を確認しつつ、日本聖公会宣教協議会参加者一同は以下のことを提案いたします。

主教会、各教区、各個教会で、戦争責任告白の必要性について協議を持つこと。戦争責任に関する宣言を日本聖公会が表明するプロセスを進めること。

- ・ 歴史的事実に関する学びを各教区、教会で進め、歴史認識を共有する。
- ・ 組織としての日本聖公会の戦争責任を具体的に明らかにし、共同で用いる告白文案を協議、起草する。
- ・ 「特別共同懺悔」の式文を検討する。
- ・ 日本が植民地支配、侵略によって被害と苦痛を与えた国の人々に対して謝罪表明をする。
- ・ 戦後もなお引き続く責任を明確にし、表明する。

これらを含めた日本聖公会としての戦争責任に関する宣言を教区、管区委員会などが、積極参加することにより起草し、次期総会議案として提出する。

以上を促進するために、宣教協議会実行委員会が選出するプロジェクトチームが支援する。

一各11教区が、日本が侵略した国の教会と姉妹関係を結び、積極的に出会いの場を作ること。

- 一 宣教協議会に出席しなかった主教も含めて、協議会の内容を共有し、主教会としてのフォローアップを検討することを求めること。
- 一 今回の宣教協議会のために準備された「歴史を生きる教会」ワークブックをさらに各教会、個人、日曜学校などで用いやすいように改訂し、普及すること。
- 一 日本聖公会関係では「元号」、「日の丸」、「君が代」の使用、町内会費の神社への寄与分の支払いなどの天皇制を支えることを拒否すること。
- 一 日常に根ざした戦後補償運動に取り組むこと。
- 一 アジア・太平洋の植民地支配と侵略戦争の被害者への国家による謝罪・補償の実現にむけ努力すること。
- 一 エキュメニカルな宣教に関わる人々をはじめとする、アジアの人々と出会える場をさらに拡大すること。
- 一 宣教協議会后、教区間、課題別ネットワークを作ること。
- 一 総会等の会議では点字、手話、要約筆記等を必ず用意すること。
- 一 日本聖公会関係学校で、平和と人権の視点から教育の指針を作ること。
- 一 立教大学原子力研究所原子炉の稼働停止を求めていくこと。
- 一 子どもたちの人格形成に大きく影響する公教育(私立も含む)の内容に、国家が介入することを許さない運動をしていくこと。

わたしたちは、以上の宣言を、各個教会、教区、管区や教会内外のさまざまな場において、受け止め、実現して行くことを決意し、`95日本聖公会宣教協議会の名において採択します。

1995年8月31日

日本聖公会'95宣教協議会共同ざんげ

1995 日本聖公会宣教協議会

- 1)司式者 私たち(日本聖公会宣教協議会参加者)は、日本聖公会が祈祷書の中に「天皇のための祈り」を記載し、公の礼拝の中で長年にわたりこれを用いてきたことの誤りを心に刻みます。
- 会衆 「わたしはあなたの神、主であって、あなたはわたしのほかに何ものをも神としてはならない」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦してください。
- 2)司式者 私たちは、日本聖公会が「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈祷」「紀元節祈祷」などを用いて公に礼拝し、アジア太平洋地域の人々の命を奪う戦争に加担したことを心に刻みます。
- 会衆 「あなたは殺してはならない」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦してください。
- 3)司式者 私たちは、日本聖公会が戦後 50 年の長きにわたり、日本の侵略戦争によって血を流したすべての人々、ことにアジア太平洋地域の人々に対して、国家と教会の責任を明らかにせず、自らの経済的利益と繁栄にとらわれて隣人である人々をむさぼり続けてきた罪を心に刻みます。
- 会衆 「あなたはむさぼってはならない」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦してください。
- 4)司式者 私たちは、日本聖公会が日本社会の中において差別を受けている人々、女性、障害者、在日韓国朝鮮人をはじめとする外国人、被差別部落の人々、アイヌの人々、沖縄の人々の痛みや叫びを聴かず、共に歩んで来なかったこと、また教会の中においても気づくべき多くの差別があるにもかかわらず、それに気づかず、知ることなく無視し、人々に今でも苦しみを与え続けていることを心に刻みます。
- 会衆 「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」という戒めにそむいたこの罪を、主よお赦してください。
- 一同 正義を行うために召されていることを、理解せずわたしたちは歩んできました。どうかこの現実から立ち上がり、つくりかえられ二度と誤った、祈りをすることなく新たにあなたの道を歩むことができますように。主イエスキリストのみ名によってお願いいたします。アーメン
- 司式者 もし、あなたが真実と公平と正義をもって、「主は生きておられる」と誓うなら、諸国の民は、あなたを通して祝福を受ける。(エレミヤ書4:2)

日本聖公会の戦争責任に関する宣言を決議する件

提出者	中部教区信徒代議員	清 公一
	北関東教区信徒代議員	菊池 邦杏
	中部教区信徒代議員	大和田康司
	中部教区聖職代議員	司祭 渋澤 一郎
	中部教区聖職代議員	司祭 大西 修
賛成者	天皇制・靖国問題委員会	
	日韓協働委員会	
	正義と平和委員会	
	部落差別問題委員会	
	学生・青年運動協力委員会	

日本聖公会の戦争責任に関する下記の宣言を決議する。

提案理由

日本聖公会は1995年8月、清里清泉寮において、「日本聖公会の宣教一歴史への責任と21世紀への展望」を主題に宣教協議会を開催した。ここで採択された「95宣教協議会宣言」をうけて、本総会は日本聖公会の戦争責任、ことに総会が負うべき責任を痛感し、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」を決議する。

日本聖公会の戦争責任に関する宣言

- 1) 日本聖公会は、戦後50年を経た今、戦前、戦中に日本国家による植民地支配と侵略戦争を支持・黙認した責任を認め、その罪を告白します。

1945年、日本聖公会は日本によるアジア太平洋諸地域に対する侵略と植民地支配の終焉という歴史的転機に立ちました。その年の臨時総会告辞で、佐々木鎮次主教は戦時下の教会の反省を述べ、「国策への迎合」「教会の使命の忘却」を指摘しました。このとき、総会も主教会も教区も各個教会も預言者的働きをなしえなかったことを深く反省し、日本が侵略・支配した隣人へ心から謝罪し、真実に和解の関係を公会として求めるべきでありました。

日本聖公会は、設立以来、福音に反する天皇制国家の国体思想や軍国主義に対し、妥協をつづけ、強く抵抗し拒むことができませんでした。日本聖公会が英国、米国、カナダなどの聖公会と繋がりを持つゆえに、官憲の圧迫を受け、信仰の戦いを経験し

た牧師、信徒もいましたが、その苦汁の経験にもかかわらず、わたしたちの教会は、抑圧され苦しむ人々と共に立つ姿勢を持ちませんでした。また、国際的な交わりを持つ教会であるにもかかわらず、侵略戦争による加害者としての国家の姿に目を開くことができませんでした。むしろ「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈祷」などを用い、他民族支配や戦争協力をキリスト教の名において肯定し、教勢の拡張や体制の維持のみをめざす閉ざされた教会にとどまり、主の福音が示す「地の塩」としての役割を果たすことができませんでした。

- 2) 日本聖公会は、敗戦後、すみやかにこの過ちを認めなかったこと、また戦後の50年も自らの責任を自覚せず、和解と補償のため積極的に働くことなく今日にいたったことを、神の前に告白し、アジア・太平洋の人々に謝罪します。

戦後、日本聖公会は1947年第22総会において、1938年版の祈祷書をそのまま正本として採用しました。その祈祷書には、天皇の支配を神の御旨とみなす「天皇のため」「紀元節祈祷」などの祈祷文がありました。さらに1959年の祈祷書改正まで、公会問答において「隣に対してなすべきこと如何」の答えとして「…天皇陛下とその有司(つかさ)に従い…」と教え、聖餐式の中では「すべて主権を持つもの殊にわが今上天皇を祝し」と司祭が祈りました。このように戦後もなお、戦争責任においてもっとも問われるべき天皇やその国家体制を肯定する祈祷書を用い続け、自らの姿勢を自覚的に直すことを怠ってきました。

皇国臣民化政策の結果、引き起こされた沖縄戦の住民虐殺や強制集団自決、さらに戦後における米軍基地の脅威などの沖縄の経験は、沖縄教区を通して語られつづけ、1972年の日本聖公会への移管に向けて「歴史と現状を理解してほしい」との沖縄教区からの問いかけがありました。しかし、その後も日本聖公会として応答することを怠ってきたことを、反省しなければなりません。

- 3) 日本聖公会は、差別体質を戦後も克服できないでいることを告白します。神の民として正義を行うことへと召されていることを自覚し、平和の器として、世界の分裂と痛み、叫びと苦しみの声を聴きとることのできる教会へと変えられることを祈り求めます。

以上私たちの悔い改めの徴として次のことをすすめていきます。

- (1)日本聖公会の戦争責任の告白を全教会が共有すること。
- (2)日本が侵略した諸国の教会に対し、日本聖公会としての謝罪の意志を伝えること。
- (3)歴史的事実の認識と福音理解を問い直し深めるための取組みを、各教区・教会の中で継続してすすめること。

日韓聖公会公式協働20年を顧みて

フランシス 菊池邦香

朝鮮半島と日本列島の歴史は深く長い。けれども、近代の1910年から1945年までの36年間は、一方的な日本の強要により、朝鮮半島を植民地化した状態であった。日本によって引き起こされた太平洋戦争は第二次世界大戦に拡がり、膨大な犠牲の上で、ようやく日本の敗戦によって終結した。その後朝鮮半島は日本から解放され独立したが、日本による植民地政策の影響を強く受け、南北朝鮮戦争を経て、南北に分断されたまま戦後を長く引きずってきた。第二次世界大戦後も20年以上経過して、ようやく日本政府と韓国政府の国交が公式に始まり、聖公会も同様に地域単位の交流が始まった。地道な下支えの中で日韓両国の聖公会の協働が芽生え、さまざまな経過を辿りつつ、1984年に公式な日韓聖公会の交流が始まった。

戦後、30年以上も聖公会において公式交流がなされなかったのはなぜだろうか。

日本政府が朝鮮半島の南の部分である大韓民国とのみ日韓条約を締結した歪みが、そのまま日本国民の間に浸透し、日本聖公会の内部にもその矛盾を理解することができなかつたと言えないだろうか。不平等で、正当ではないとの批判をよそに1965年に日韓条約が締結された。その後、聖公会は個人的にも、また東京教区を始めいくつかの教区で日韓交流のプロジェクトが開始されていった。しかし、日本国内では1923年(大正12年)の関東大震災において6000人以上ともいわれる在日韓国朝鮮人が虐殺された事件に代表されるように、韓国朝鮮人への偏見、差別、虐待、人権無視は甚だしいものがあつた。1980年代でも在日韓国朝鮮人は約80万人の多くは本名を名乗れず、国籍を隠し、入学、就職、結婚にも不利な立場で思うに任せず、拒否されたり、アパートなどの住居を求めても「外人不可」、融資も朝鮮人には不可、国民年金は支給されず、税金だけは確実に徴収され、選挙権も無い、こうした状態が続いていた。特に、韓国朝鮮人であることを明確に判別するために外国人登録法で指紋押捺を義務付け、差別と偏見を助長させる法律を執行して、日本政府は諸外国の中でも著しい人権無視の政策を取り続けた。

そうした世相の中で、日本聖公会は公式な日韓聖公会の交流を目指し、1983年日韓聖公会宣教セミナー準備委員会を発足させ、翌84年に韓国での公式な宣教セミナーを実現するに至った。そして、日本国民が韓国朝鮮と日本の歴史認識が不十分なように、同じく日本聖公会も歴史認識が不十分なまま、日韓聖公会の公式交流へと進めるのは相手国に失礼ではないか、日本側の日韓の歴史的総括無しでは、交流はありえない、という批判を受けることとなった。急遽、準備委員会は「在肩韓国朝鮮沃問題研修会」を大阪において実施することにして、84年6月に生野区の在日韓国朝鮮人多住地区を見て廻り、在日韓国朝鮮人の方々の講演や証言を聞いて、少ないながらも日韓の歴史に触れる時を持ち、日韓聖公会宣教セミナーへの学びの備えとした。付け焼刃的な学びで、日韓の長い歴史を理解するには程遠いものがあつたが、とりあえず日韓両国の公式な交流である「日韓聖公会宣教セミナー」が10月にソウルで開かれた。

その開会挨拶の中で、日本聖公会側のセミナー準備委員長であつた木川田一郎主教は「私たちは、これまでの韓国と日本の歴史を深く反省し、このセミナーは日本人が韓国の人々に対して犯した罪の赦しを願う戯悔の巡礼である」と位置づけられた。大韓聖公会側

の代表者である金成洗主教は開会説教の中で「私たちが皆、キリスト・イエスにある信仰によって神の御民になると、我ら皆、一つの兄弟姉妹であり、もっと進んで一つのからだの肢体である」と感謝しながらも、「お互いに隣りあっている我らの教会が今まで公式的な協力関係を結ばないでいたのは、主の前では容赦できないこと」と悲しみを表明した。

ある在日韓国朝鮮人の方から日韓聖公会宣教セミナーが始まったことについての感想が印象的に残っている。「車のハンドルは、止まっているときにはうまく切れないものだが、車が動き出せば右にも左にもハンドルは切りやすくなる。日韓の問題も動き出さなければにっちもさっちも行かないでしょう。」こうして、日韓聖公会宣教セミナーは始まり、10年間で5回(ソウル2回、釜山1回、大阪1回、東京1回)のセミナーが実施された。

日本聖公会の各教区から代表者を送り、日韓聖公会宣教セミナーが重ねられた。植民地支配を知らない若者から、戦争に従事した高齢者まで多くの信徒聖職が参加し研鑽を続けた。初めて出会う日韓の歴史に学ぶことが多く、懺悔の気持ちで一杯になるという感想がもたされる中で、在日韓国朝鮮人問題は各教会には存在しない、実感が無いという声が出始めた。自分は差別はしていない、日韓の歴史や在日問題は社会問題であり、教会は社会問題に関与するべきではない、などの声が教会や個人の間でささやかれ始めた。だが実際には、聖公会関係学校での在日韓国朝鮮人学生の入学拒否があり、各教会に本名で韓国朝鮮人が在籍することは無かったが、通名(日本人名)でおられる方は沢山いた。しかも聖会神学院のカリキュラムの中で臨床牧会訓練中に起きた在日韓国朝鮮人学生への差別発は大きな問題となり、関係機関の猛省と新たな取り組みが課題となった。

これらの諸問題の象徴的なものとして、戦前から大阪生野地区に存在した、韓国朝鮮人会衆の聖ガブリエル教会の復興が日本聖公会の活動的な課題となった。第2回のセミナーでは早々と大韓聖公会から多額の献金が寄せられた。大阪教区から忘れ去られたように復興から疎外されていた聖ガブリエル教会と地域宣教の拠点としての生野センター、乳児保育園の建設は、日本聖公会の全教会の注目を集めた。管区をあげて祈り、献金が捧げられ、ついに1992年、聖ガブリエル教会、聖公会生野センター、こひつじ乳児保育園は竣工の運びとなった。

大阪という在日韓国朝鮮人の多住地区での宣教活動が聖公会生野センターを中心に12年を迎え、隔ての壁が取り除かれると思われた昨今、衝撃的な悲しい事件がおきた。朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の拉致事件をきっかけに起きた、在日韓国朝鮮人への迫害があちこちで散発しているが、特に地元民と思われる方から、聖公会生野センターへ匿名投書である。「韓国へでも北朝鮮へでも、さっさと帰って」という排外的な言葉と、在日韓国朝鮮人宣教に繋がる「後援会費なんて払いたくありません」という心無い投書が舞い込んだのである。

教区別に日韓の交流が盛んになり、1994年から日韓聖公会青年の交流は10年を迎え、相互に留学生も増加し、あるいは姉妹教区としての日韓の協働は盛んになってきた。日韓聖公会の公式な協働が始まって20年が経ち、着実な相互理解と粕解の上に交流が広がってきたが、しかし、日本社会は、日韓の歴史をまだ十分に理解しているわけではない。日本聖公会に属する人といえども、日本社会の一員であり、歴史認識の不十分さは否めない。まだまだ、日韓両聖公会は協働しながら、相互理解に努め、学びの時は継続していかねなければならない。

(2) 共同声明

共 同 声 明

1. 日韓両聖公会は、1984年10月6日から10月10日まで、大韓民国ソウルにて「相互理解」の主題に依る第一次日韓聖公会宣教セミナーを開催し、主題及び発題講演、並びに現場研修(安重根記念館、パコダ公園、提岩里教会等)を通じて、相互の歴史的誌識と協働が両国聖公会の宣教を実行し、確実にしていくために必要であるとの意見の一致を見た。
2. 日韓両国聖公会は、公式に開催された最初のこのセミナーで開会聖餐式を共同執行し、その中で日本聖公会は36年間の植民地支配及び今日に至る迄、なすべき事をなさず、なすべからざる事をなしてきた罪を懺悔し、深く陳謝した。
又、両国聖公会は唯一にして聖なる公会と主にありて一つの肢体であることを実感し、地上に神の国を実現するため、両国の不幸な過去を再確認すると共に、日本による歴史の歪曲と経済的支配、そして文化的偏見と差別を信仰によって拒否することを決意した。
3. 大韓聖公会は、相互交流と協働が宣教的使命と直結する召命の道であることを自覚し、正しい両国関係を発展させるために、過去の両聖公会関係の信仰的反省を土台として、相互人事交流の活性化、日韓青少年協働プログラム開発計画を積極的に推進することにし、在日韓国人の宣教問題と法的地位対策、そして、共産圏にあるキリスト者たちとの交流と宣教に継続的な関心を持つことにした。
4. 日本聖公会の最も身近かにある在日民族への差別問題を日本聖公会が取り組むべき、緊急かつ重要な宣教の課題であると認識し、これを推進する事を決意した。
又韓国からの日韓の歴史理解を受けとめる事に依って、日本聖公会がキリストの教会として、正しく生きるための自己認識を得られることに気づかされた。
5. 日韓両国聖公会は、本セミナーを通じて提起された課題(両国聖公会の情報交換、サイクル・プレイヤー、各種宣教協働プログラムの開発、聖ガブリエル教会への支援等)に対して、継続的な協議と両国聖公会の宣教協力のため、常設の協議機構の発足が必要であるという意見に一致した。

1985年中に日本において、第2次日韓宣教セミナーを開催することを合意した。以上のことについて、両国聖公会内に衆知するように努める。

1984年10月10日

日本聖公会セミナー準備委員長
主教 木川田 一郎
大韓聖公会セミナー準備委員長
主教 金 成 洙

「日韓聖公会交流20周年」をめぐって

野村 潔

1. はじめに

1984年に「第1回日韓聖公会宣教セミナー」(以下『日韓宣教セミナー』と略)がソウルにて開催されることになったが、その内容と決定のプロセスに疑問をもった日本聖公会の信徒・教役者有志が「『日韓セミナー』を考える会」(以下『考える会』と略)を結成し、「大問題です!『日韓聖公会宣教セミナー』の危険性」(以下『大問題です!』と略)と題する問題提起を行なった。以来、私自身は日韓聖公会の「公式」交流プログラムにはほとんど関与してこなかったが、この『考える会』に名を連ね、当時、日韓宣教セミナーの開催に疑義を唱えた者の一人として、『考える会』が提起した課題を思い起しながら、日本と韓国の交流を振り返ってみたい。

しかし、20年前のことでもあり、記憶もすでに遠退いていることも多いので、多少、誤解している面もあるかも知れないので、反論、訂正していただければ幸いである。

II. 『考える会』による『日韓宣教セミナー』への問題提起

『考える会』は、『日韓宣教セミナー』の開催について、『大問題です!』において、下記のように主に三つの課題を指摘している。

(1) 「朝鮮半島に対する日本の侵略の歴史」に関して

1910年、日本が朝鮮半島を植民地化し、以来、36年間にわたる過酷な占領政策によって、多くの朝鮮人の生命、財産、人権、信仰等を奪ったことについては説明するまでもないが、問題は大多数の日本国民や他のキリスト教会同様、日本聖公会もこの侵略戦争に反対するどころか、多くの点で戦争協力を行い、しかも聖戦として正当化したということである。そして更に、戦後も、この歴史的な事実に向き合うことをせず、多大な犠牲と被害を与えたアジアの国々、とりわけ隣国である韓国・朝鮮に対して公式に反省も謝罪も表明してこなかったということである。また、戦前・戦中の日本は天皇制絶対主義という国家体制の下で、アジアの国々を軍事侵略し、植民地支配を拡大しようとしたのであるが、にもかかわらず、日本聖公会は、戦後も祈禱書の中に、そのような天皇・皇室を賛美する内容をもつ「天皇・皇室のための祈り」を掲げ続けていたのである。このように日本或いは日本聖公会が朝鮮に対して行なった犯罪行為に、直接間接に加担協力していながら、そして、そのことについて真摯な反省もないまま、いったいどのような交流をしようというのだろうか、というのが、『考える会』の率直な疑問であった。

(2) 「日本社会における在日韓国・朝鮮人の被差別被抑圧状況」に関して

36年間にわたる日本の朝鮮半島支配において、ことに15年戦争下では、日本国内での労働力不足を補うため、多くの朝鮮人を強制連行して、各地の鉱山や工場などに送り込んだ。敗戦時に、日本にいた朝鮮人の数は二百数十万人と言われている。現在、在日韓国・朝鮮人は、約60万人とも70万人とも言われているが、その多くは強制的に連れてこられた人々とその子孫である。

在日韓国・朝鮮人の多くは、このような経緯で日本に居住するようになったにもかかわらず、しかも彼らの多くが日本で生まれ育っているにもかかわらず、様々な差別抑圧的な状況に置かれてきた。たとえば彼らには「外国人登録法」によって外国人登録証に指紋押捺(現在は散廃されている)や常時携帯などが義務づけられており、実行しないと刑事罰を課され、場合によっては強制退去などに課せられてきたのである。更には、年金や保険など社会保障制度への加入の問題、就職、結婚、アパートの入居などをめぐっても、様々な差別が生じている。

1970年代から、こうした在日外国人、とりわけ韓国・朝鮮人に対する差別や偏見を取り除こうとする市民運動が盛んになってきており、この運動には多くの市民とともに聖公会の信徒・教役者も参加してきたが、しかし、今回の『日韓宣教セミナー』の開催に際して、主催者側には、残念ながらこうした運動を担っている人々と協力、連携をしようとする動きはなかった。

(3) 「戦後から現在に至る日韓及び日朝の関係の歪み」に関して

1945年、日本の敗戦によって朝鮮半島は解放されるはずが、結果的に米ソ2大国によって朝鮮半島は南北に分断されてしまう。1950年から始まった朝鮮戦争は、まさに東西の利害を代表した形で、親子、兄弟が南北に別れて血を流し合うという悲劇を生み出した。この戦争は、今尚、多くの韓国・朝鮮人に対して深い悲しみと耐え難い傷を与えている。朝鮮戦争は1953年に停戦となるが、東西冷戦構造の中で、この南北分断は固定化され、現在もその状態が続いている。

日本の植民地支配の結果として、南北分断が生じたのであるから、日本は、どこよりも朝鮮半島の平和統一について積極的に貢献しなければならなかったはずである。にもかかわらず、1965年、日本は韓国との間に「日韓基本条約」を結び、戦後初めて国交回復をした。この単独講和に関しては、アメリカの強い意志が働いていた。当時、アメリカはベトナム戦争で消耗しており、日米韓の同盟関係を強化することによって、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)及び共産圏の脅威に対抗しようとした。しかし、分断され、敵対する二つの国の一方と国交を結ぶということは、更に分断を固定化するだけで、むしろ平和統一の道を妨げることになることは明らかであった。しかも、今日に至るまで日本は北朝鮮に対しては戦後賠償を放棄しており、在日朝鮮人の在留資格など法的地位に関しても、明らかに不安定な状況に置いてきたと言える(在留資格は1991年に特別永住に一本化)。

こうした日本の姿勢が南北の統一をより困難なものにしているものであり、今日、取り沙汰されている北朝鮮による拉致問題等にも結びついているのである。

その一方で、朝鮮半島の平和統一という課題については、すでに1970年代から日韓両国のNCCをはじめキリスト者有志の間で始められており、80年代にはWCCが朝鮮半島の統一問題を宣教課題として取り上げている。このような動きに、当時の日本聖公会は、どのように関わりながら日韓の交流を進めようとしていたのであろうか。

以上、『大問題です!』が指摘している三つの課題を概観したが、『考える会』では、日本聖公会が、こうした課題について、ほとんど取り組んでこなかったことを指摘した上で、公式な交わりを開始しようとしている相手の国の人々が歩んできた歴史や、今まさに直面している社会的な課題に対する認識と関わりないところで、どのような「宣教協働」をしようとするのかという問いかけを行なったのである。少なくとも、当初、『日韓宣教セミナー』を計画した日本聖公会側には、こうした歴史認識と宣教的課題に対する地道な取り組みが欠けていたことは否めない。と同時に、両国聖公会の交わりの再開に際しては、それまでの歴史的な経緯からも、少なくとも戦争責任に関する姿勢を日本聖公会として明確にしておく必要があったはずである。手続き的にも、最低限、日本聖公会の総会を経て全教区的な理解の得ながら計画を推進することが、殊に歴史的に信頼を損ねてきた韓国に対する礼儀ではなかったかと思う。しかし、そのようなプロセスを省いたため、結果的に『日韓宣教セミナー』には全教区からの参加者も得られず、参加者も必ずしも教区を代表していたわけでもなく、日本聖公会側は「管区」としての実態を伴っていなかった。

『第1回日韓宣教セミナー』では、最終日に「共同声明」を発表し、日本聖公会はこれまでの「罪を懺悔し、深く陳謝した」とことになっているが、『考える会』が指摘したことは、実態として日本聖公会を代表していない人々がいくら懺悔し、陳謝しても日本聖公会としての態度表明にはならないということと、結果的に「共同声明」がその場限りのもので、具体的内容を伴わない美文に終わってしまうのではないかという危惧であった。

しかし、この時の『日韓宣教セミナー』の報告書を読むかぎり、かなりの部分で『考える会』の指摘を積極的に受けとめつつある様子が散見され、また、共同声明の中でも、『考える会』が指摘した三つの課題についてすべて触れられていた。その意味では、『考える会』が問題提起したことも無駄ではなかったのかも知れない。

他方、この『日韓宣教セミナー』を皮切りに日韓の交流を始めようとした1980年代というのは、韓国の民衆による民主化運動が盛んに行なわれた時代でもある。報告書には、あまりその点が触れられていないので、簡単に触れておきたい。

Ⅲ、韓国の民主化運動と日韓協働

1961年の軍事クーデターによって実権を得た朴正熙政権は、急激に軍事独裁化を強め、反共イデオロギーによる国家管理体制が整えていった。それを支えたのはKCIA(韓国中央情報部)である。朴正熙大統領はKCIAを使って過酷な恐怖政治を行なった。

政府や軍部を批判すれば、国家反逆罪の容疑や共産主義者の嫌疑によって逮捕され、拷問されたりすることは日常茶飯事だった。

1970年代には、労働運動も盛んになり、学生や教会による反政府運動も盛んになるが、しかし、その一方で多くの民衆が弾圧された在日韓国・朝鮮人の留学生たちが、次々にスパイ容疑で、つまり政治犯として逮捕されたのもこの時代である。日本のNCCに連なる教会指導者や大学関係者、そして学生運動のリーダーたちは、この間、熱心に政治犯として逮捕され、拘禁されている人々の救援活動を行なった。しかし、そのため、多くの人々が韓国への入国ビザを受けられなくなった。

1979年に、朴大統領は暗殺されるが、後を継いだのは全斗煥政権である。1980年代に入ると民主化運動が、更に盛んになり、1980年5月には、いわゆる光州事件が起こる。光州市内にて派遣された軍隊に抵抗した学生、労働者、市民など数千人が殺されるという事件が起こった。1980年代は、全斗煥政権による政治活動の禁止など、きわめて抑圧的な状況があったが、他方、民主化運動も非常に盛り上がった時代である。そして聖公会を含む多くの教会もまた民主化運動を支援した。そして1987年に、一人の学生の拷問死をきっかけに全国的な抗議が起こり、6月10日から20日迄の間、聖公会のソウル大聖堂を中心にデモ隊が道路を埋めつくした。これが6月民主化大抗争と呼ばれる運動であり、この運動がきっかけとなり全斗煥政権は崩壊したのである。

このように、『日韓宣教セミナー』が始まった20年前は、韓国はまさに激動の時代であった。問題は、日本政府はこうした朴正熙から全斗煥に続く軍事独裁政権を一貫して支えてきたことである。韓国において、多くの学生、労働者、市民が軍事独裁政権と激しい闘いをしているとき、日本聖公会は、韓国の民主化運動に対してどのようなメッセージを送っていたのだろうか。そして日本聖公会は、その闘いにどのように具体的に連帯しようとしていたのだろうか。

1V、今後に向けて

様々な批判にさらされながら始まった『日韓宣教セミナー』であったが、20年間にわたる両国聖公会の交流によって、確かに少しずつお互いの理解が深まってきていることは間違いないことである。1995年に日本聖公会各教区からの代表やアジアの国々からの参加者も得て日本聖公会宣教協議会が開催され、戦争責任にも触れた「宣言」を採択したが、この協議会には、『考える会』のメンバーや『日韓宣教セミナー』の参加者も多数参加し、「宣言」の作成に貢献した。ずいぶん遅きに失した感はあるが、こうした動きが、翌年1996年に開催された日本聖公会第49(定期)総会における「戦争責任に関する宣言」の決議に結びついたことは確かである。

しかしながら、『考える会』の指摘にもあったように、日本と韓国との関係は歴史的、政治的、経済的に非常に深く、そして、決して切り離せない特別な間柄にある。日韓聖公会の公式の交流が20周年を迎えるのだが、二度と戦前、戦中と同じ誤りを繰り返さないように、基本的には未来永劫、教会が続くかぎり、今のような関係を続けていく必要があるだろう。

国際交流は、お互いに影響を与えあうということが大切だと思う。今、大韓聖公会が行なっている宣教活動の多様な働きについて、日本聖公会はまだまだ学ぶ必要が多いと思う。とりわけ、ホームレスの支援活動である「分かちあいの家」や移住労働者を支援する「シャロームハウス」などユニークな働きから学ぶ点は多い。今後、こうした具体的な働きに関する分かちあいや協働が、各地で起こってくることを期待したい。

そして更に大切なことは、「日韓」の「韓」の中に朝鮮半島全体を含むような視点が必要ではないかということである。なぜなら、現在の分断状況を生み出したのは日本の植民地支配の結果である。したがって、日本人の戦争責任の行き着く先は朝鮮半島の姿を日本の植民地支配以前の状態に戻すことではないかと思う。日韓の交流の最大の宣教課題は、南北の平和統一への貢献ということになるのではないか。今後は朝鮮半島の平和統一に向けて、日韓聖公会の具体的な協働プログラムにする必要があるように思う。

以上

日韓聖公会宣教協働20周年記念大会共同声明

日本聖公会と大韓聖公会の日韓聖公会宣教協働20周年記念大会は2004年10月18日～21日まで、日本の福岡において両聖公会の首座主教、管区長主教を始めとして日本側8教区主教、韓国側3教区主教の参加のもと、日本側62名、韓国側44名、計106名の参加者を得て開催された。

1984年から公式に宣教協働を開始して20周年を迎え、その記念の大会の主題は「感謝と希望」であった。この大会の主なる目的は、過去20年間にわたる宣教協働の結実への感謝と、今後の両聖公会の協働の課題を模索することであった。

初日は開会礼拝において日本の九州教区五十嵐止司主教の説教があり、ついで歓迎の交歓会が日本聖公会主催で開催された。二日目に両国から信徒及び聖職者一人ずつ、計四名によって20年の感謝と今後の交流の展望を述べた報告がされ、さらに今後の課題について試案の発表があった。続いて立教大学教授の李鍾元氏の特別講演を通して、朝鮮半島の平和と統一が南北朝鮮のみならず、日本にとっても、東アジア全体にとっても重要なことであることが認識された。その後、参加者は分団に分かれて協議をおこない、三日目にも分団協議を重ねた。夕刻には大韓聖公会主催の交流会が催されソウル教区オモ二連合聖歌隊の賛美のコンサートもおこなわれ文化あふれる交歓会が繰り広げられた。

この度の記念大会で提案、討議、確認されたことは多岐にわたるが、何よりも根本に私たちはキリストにあっての交わりの20年間の豊かな実りを実感した。ただし最近の日本聖公会の機構改革に際して日本聖公会は「日韓協働委員会」の責任と職務を「正義と平和委員会」に吸収、付託する決定をしたが、日本聖公会はその過程を大韓聖公会と十分に協議しなかったことは「協働」の精神に反し、日本聖公会は深刻に反省している。

今回の記念大会を通して私たちに提示されたことのもう一つは東北アジアでともに生きる者として日韓の平和のみならず、朝鮮半島の平和定着さらには統一に向けて日韓両聖公会に連なる私たちが主体的な取り組みを神と歴史の前に要請されていることであった。

以上の認識をもとに、20年前にソウルで採択された「第1回日韓聖公会宣教セミナー共同声明」の「①相互理解②神の国を実現する決意③人事交流の実施④在日韓国人問題への取り組み⑤常設委員会の設置」を更に発展させて、日韓聖公会宣教協働20周年大会に参加した私たちは以下の項目について合意し、管区次元で取り組んでいくことをここに共同の声明として日韓聖公会に向けて発するものである。

1. 日本聖公会と大韓聖公会は継続的な宣教協働のために両国の管区次元でそれを計画、推進する機構を設置する。
2. 両聖公会は今後も管区次元の青年交流のプログラムを実施する。
3. 両聖公会は管区次元で積極的な女性の交流を推進し、宣教活動における女性のリーダーシップの育成をおこなう。
4. 両聖公会は管区次元での社会宣教(社会正義、平和、人権、福祉)、教育などを担っている人たちの交流を推進する。
5. 両聖公会は教区、教会での相互訪問を活性化して、文化交流や信徒・聖職の交流を活発におこなう。
6. 両聖公会は在日韓国朝鮮人との共生にさらなる努力を傾け、在日韓国朝鮮人であるが故に不当な差別に苦しんでいる人々との「共生の宣教」の取り組みを積極的におこなう。

7. 日本聖公会は朝鮮半島の南北分断が日本の朝鮮植民地統治がその根源にあり、戦後も朝鮮半島の分断状況から日本が利益を得ていたことを認識する。
8. 両聖公会は、朝鮮半島の南北統一に向けて共に祈り、積極的な取り組みを展開する。
9. 両聖公会は東北アジアの宣教に新たに取り組んでいく。
10. 両聖公会は、お互いの宣教方策を交換し、神学、礼拝、宣教、牧会・司牧などの共同の研究と実施を一層促進する。
11. 両聖公会は以上のことについて10年後に評価する機会を持ち、それ以降の宣教協働についての協議をおこなう。

2004年10月21日

日本聖公会 首座主教 宇野徹

大韓聖公会 管区長主教 丁哲範

日韓聖公会宣教協働20周年大会実行委員長 主教 植田仁太郎

韓日聖公会宣教協働20周年大会副実行委員長 司祭 金根祥

日韓聖公会宣教協働20周年大会参加者一同

07/07/06

名古屋学生青年センター

日本聖公会青年委員会の役割と日韓聖公会青年交流に関する見解

I、青年委員会の役割.

- 1、日本聖公会の各教区及び各教会における宣教の担い手として青少年による諸活動の活性化のため支援・協力する。
 - ・各教区における青少年の育成及び活動の活性化に結びつくような情報や機会の提供を行なう。cf.青年担当者の集い、ネットワークニュース、各種研修会
 - ・青少年の育成に結びつくような教区機関を設置する。cf.ユースコーディネーター、青少年担当デスク
- 2、各教区及び各地域における様々な宣教課題、殊に'95日本聖公会宣教協議会宣言(別紙参照)及び6委員長(学生青年運動協力委員会、部落差別問題委員会、日韓協働委員会、天皇制・靖国問題委員会、「正義と平和」委員会、訓練計画委員会)と主事による合同会議によって取り纏められた日本聖公会の「宣教方針・宣教課題」(別紙参照)に示された諸課題に関して、青少年による主体的な関わりを推進し、人材及びリーダーシップを養成する。
 - cf.現場研修、解放セミナー、平和学習、エクスポージャー
- 3、全国青年大会をはじめとする全国的な青少年活動の計画・実施を支援・協力し、各教区及びエキューメンカルな交流とネットワークづくりを行なう。
 - cf.全国青年大会、リーダーシップトレーニング、災害救援ボランティア学生青年運動エキューメンカル協議会
- 4、日本と諸外国との歴史をふまえ、アジアの近隣諸国をはじめとする諸外国との青少年による国際的な交流とネットワークづくりを行なう。
 - cf.聖公会国際青年大会、アジアキリスト教協議会青年プログラム
 - 各種海外交流プログラム

II、日韓聖公会青年交流に関する委員会見解

- 1、日本聖公会青年委員会のミッションである「日本聖公会の宣教の課題を担う青年たちを育成する」という点からも、大韓聖公会及び韓国キリスト教学生青年運動から学ぶことの意味は大きいと考える。
- 2、今後のプログラムの内容として、日韓両聖公会の宣教課題を明確にし、その課題に沿った内容をプログラムに反映するよう検討する。殊に、朝鮮半島の平和統一問題をはじめとする東アジアの平和の課題に結びつくような内容のプログラムを検討することが重要である。
- 3、両国の青年たちの現状を踏まえつつ、これまでのような交流の在り方にはこだわらない。

以上

日韓聖公会青年セミナー準備会資料

2007年7月7日(七夕)

池住 圭

「軍慰安婦」問題と戦後補償問題

(軍用性奴隷)

1. 「軍慰安婦」とは？

1930年代の日中戦争から1945年の太平洋戦争の敗戦までに、中国各地をはじめとして、シンガポールやボルネオ、ビルマ、フィリピンなどに強制連行され、無権利状態のまま日本軍の管理のもと、戦地の慰安所で日本軍の将兵の性の相手をさせられるなどの被害を受けた女性。多くは日本の植民地だった朝鮮半島から強制連行された女性だが、中国、台湾、フィリピン、インドネシア、オランダなどから連行された女性もいた。人数は5万人とも20万人とも言われるが、確定的な資料はない。

そもそも「慰安所」は1932年の上海事変の時に、日本の旧陸海軍によって上海に初めて設置されたと言われているが、旧日本軍が大量の「慰安所」を中国各地に設置し始めたのは、1937年、日本が中国に対する全面的な侵略を開始し、中国大陸に常時100万以上の軍隊が駐屯するようになってからである。慰安所の大量設置のきっかけは、南京大虐殺を惹き起こした時に、中国人女性への強姦事件が多発したことであると推測されている。慰安所設置の目的は、第一に中国人女性に対する強姦を防止する事、第2に梅毒など性病の蔓延を防ぐ事であった。これは、帰還兵によって性病が日本国内にもたらされる事を防ぐ目的でもあった。第3に、機密漏えいの防止である。将兵が地元の売春宿に行つて、地元の売春婦を通して軍の機密が漏れる事をおそれた軍が、自ら監督統制のできる慰安所を作り、機密漏えい防止をはかったのである。

当初はもともと売春を職業としていた女性が日本国内から集められたが、性病にかかっている率が高く、また、年齢の高い者も多かったため、1日に多くの兵士を相手にするには体力的に限界があった。加えて、日本国内で「慰安婦」を大量に募集することは目立ちすぎたし、何よりも公営の売春婦を引き連れて戦争をしていることは「皇軍」の威信を損なうと考えられた。

1941年に太平洋戦争が勃発すると、戦線がアジア全域に拡大し、「慰安婦」の数がますます不足するようになった。そこで、軍幹部は朝鮮総督府と組んで、当時日本の植民地であった朝鮮半島、特に南部の貧しい村で、大々的に「慰安婦」狩りを開始した。17歳～20歳の未婚女性、足りなくなると14歳～16歳の少女や30歳以上の既婚女性なども対象になり、「挺身隊」の美名のもとにだまされたり、「慰安婦」として働くという目的は告げられずに集められた。目についた女性を手当たり次第トラックに乗せ、慰安所に運んだ事実も数多く報告されている。既婚女性の中には子どもを持つ人もおり、子供達から母親を奪う結果になった。一般の朝鮮人女性の方が性病に蝕まれている事が少ないし、体力的にも優れていた。何より、植民地であったから少々手荒な事をして同本国内で問題になる事が少なかった。さらに、婦人・児童の売買を禁止する国際条約には、植民地などに適用しなくて良いとの規定があり、日本政府はこの規定を利用した。多いときには1日に100人を超える将兵を相手にしなければならぬ場合もあり、命がけで拒否したり、酷使に身体が耐えられなくなると、ヒロポンを注射されるような事もあった。

1945年前後(敗戦前後)になると、女性達は戦地に置き去りにされたが、これはまだ良い方で、その存在を隠すため、軍部は防空壕の中に閉じ込めて爆破、多くの女性が犠牲になった。生き残った女性は、儒教の性倫理によって自らを恥じ、帰国を拒んで異郷の地で老

い、過去を固く閉ざしたまま、生活苦に喘ぎながら戦後を生きている女性も大勢いる。また、この時の無理がたたって、様々な病を抱えながら戦後を生き抜いて来た人も多い。

II. 「軍慰安婦」問題とはどういう問題か？

⇒女性蔑視、女性の人格の尊厳を根底から侵している問題、人間の尊厳を否定している問題

⇒日本人のアジア人蔑視(民族差別)という問題、民族の誇りを踏みにじっている問題

⇒人権侵害問題しかも過去の問題ではなく、現在においても克服すべき根源的人権問題

⇒性暴力という問題

⇒性の商品化(搾取)という問題

⇒旧日本軍の残虐な体質という問題

⇒旧日本軍の国際法違反の植民地政策という問題

III. 何故、戦後60年間も明るみに出なかったのか？

①日本が過去の蛮行を隠蔽し、責任回避のために徹底して関連資料を破棄してしまった。

②韓国歴代政権が植民地的な残滓(ざんさい)の清算を留保してきた。

③「男性中心の社会」では、被害者である女性とその過去をはっきり明かしたり、世論化させたりすることはできなかった。

④被害者である女性とその過去を明かすことによって、家族、親戚らに多大な迷惑がかかることを恐れた。

⑤学会でも民族史の受難や女性の受難について積極的に究明しようとしてこなかった。

IV. 「慰安婦」への戦後補償

* 「ハーグ条約」

1907年に成立した「陸戦の法規慣例に関する条約」の通称。日本は1912年に批准。第三条は「前記規則(文民保護義務を規定した陸戦規則)の条項に違反した交戦当事者は、損害があるときはこれを賠償する責を負うべきものとする。交戦当事者は、その軍隊を組成する人員の一切の行為につき責任を負う」としている。

* 「戦後補償」

戦争という国家の行為によって踏みにじられた個人の人格の尊厳・民族的尊厳性を回復するために、謝罪のしるしとしてなされるべきものが国家補償。それをすることは、すなわち私たち(日本人)自身にとっての「人間回復の道」でもある。

1985年8月 台湾人元日本兵・軍属が日本政府に対して国家補償と補償立法不作為の違憲確認請求のために東京高裁に起こしていた訴訟で、東京高裁は「戦後補償のための立法措置を取るべきだ」と国会に対応を促す判決を出す。

1991年4月 国立国会図書館に所蔵されているGHQからの返還資料のなかに、朝鮮人「慰安婦」とみられる名前が含まれている名簿が見つかる。

1991年8月 ソウル居住の金学順(キム・バクスン)さんが実名で記者会見し、日本軍の「慰安婦」だった体験を証言。これをきっかけに、韓国国内で元「慰安婦」が名乗りでようになる。同年12月に金学順さん、韓国在住の他の元「慰安婦」の女性らと共に日本政府に対してはじめて訴訟を東京地裁に起こす。呼称「愛子」。16才だった1940年に日本軍にだまされて連行される。一日平均3~4人の兵士の相手をさせられた。運良く脱出し、以後中国で暮らす。(1997年7月死去、73才)

- ・『夫も二人の子もすでに亡くなり、天涯孤独の身なので、恥ずかしくとも死ぬ前にぜひ話しておかねばならない、と思った。日本や日の丸という言葉を聞くだけで今も胸がつぶれる…』
- ・『もう隠すべき人はみな死んでしまった。独りに戻った私に失うものはない。なぜ今さら、と聞く人がいる。それは違う。半世紀たってやっと話せることもあるんです』
『女子挺身隊問題に、日本が国として責任をとろうとしないので、恥ずかしさを忍んで…』
- ・『日本で証言したあと、皇居前で自殺するつもりでした。しかし、たくさんの日本の若い人たちが私の話を聞いてくれましたので、日本政府も考え直してくれるかも知れません。その希望がわいてきました。日本政府がこれからどうするか、そのやり方を見届けようと思い、死ぬのをやめました』

1991年 この年から、元従軍「慰安婦」の女性達のための生活支援を求める韓国国内の世論が高まり、1992年6月「ナムムの家」建設促進委員会が韓国国内の仏教団体や各種の社会団体により結成され募金運動が開始された。この募金を基にソウル市内に「ナムムの家」開設。1995年に京畿道広州市に移転、高齢の韓国人元従軍「慰安婦」が、日韓の若者を中心としたボランティア・スタッフと共に共同生活をしている。1998年には、敷地内に設置した慰安所の分布図や女性達が描いた絵など、多くの資料が展示されている。実際の慰安所内を実物大に再現した部屋もある。

1992年1月 防衛庁の防衛研究所図書館に、陸軍省と中国に派遣された部隊との間で交わされた**極秘文書「陸支密大日記」**が公になる。

1938年3月4日作成の陸軍省副官による通牒および同年6月岡部直三郎北支那方面軍参謀長による「軍慰安所従業婦募集に関する件」通牒。占領地域内で、交通網の破壊など、治安回復が進まないのは住民に対する強姦事件などの不法行為が反日感情を高め、軍の作戦を阻害しているため、「すみやかに性的慰安の設備を整え…」と、設置を指示。

1993年8月 「**河野談話**」。河野洋平官房長官(当時)、「従軍慰安婦」問題について政府の基本的立場を談話でしめす。①慰安所は当事の軍当局の要請で設置されたこと、②設置・管理及び「慰安婦」の移送は日本軍が直接・間接慣用したこと、③「慰安婦」募集は軍の要請を受けた業者が主としてこれにあたったが甘言・弾圧など本人の意思に反して集められたこと、④当時の軍の関与の下に多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけ心からお詫びすることなど、従軍「慰安婦」が強制的なものであったと認める。

1996年春 **国連人権委員会**が特別報告『「慰安婦」問題報告書』を採択し、戦前の日本軍

部がアジアの女性に対して強要した「従軍慰安婦」を「性奴隷」と規定しその日本軍の行為を「人道に対する罪」と断定。日本政府の責任を激しく追及し、日本政府に国家賠償と加害者の処罰を勧告。

* それ以降も、ILO 条約適用専門家委員会(1996年3月)、国連人権委員会差別防止・少数者保護小委員会(1998年8月)、国連人権促進保護小委員会(2000年8月)などが日本政府に対して勧告を行う。これらに対し日本政府は、「法的責任は果たしている。国家賠償には同意できない」との従来の姿勢を表明。

2000年12月 日本軍の「慰安婦」問題は、誰が責任を負うべきかを模擬裁判で明らかにしようとする「女性国際戦犯法廷」を東京で開催。戦時性暴力の不処罰を終わらせようという民衆法廷。翌年(2001年)12月にはオランダのハーグで開催。「慰安婦」問題で天皇と東条英機ら指導部9人は、「その犯罪的性質の知識」を持ち、その設立、維持、促進に継続して参加」と指摘。人道に反する犯罪の責任があり、有罪だとする最終判決を下す。

2004年10月 韓国国会の統一外交通商委員会は、従軍「慰安婦」の名誉と人権回復のための歴史資料館「戦争と女性人権博物館」を復光=日本の植民地からの解放=60周年にあたる2005年までに建設する事を政府に求める」決議案を全会一致で採択。その後、建設に向け募金活動を行っている。

韓国挺身隊問題対策協議会 戦争と女性人権博物館建設委員会

2004年11月 韓国人元軍人軍属、元「慰安婦」とその家族計35人が日本政府を相手取り、一人当たり2000万円の賠償請求を求めた訴訟の上告審で、最高裁がこれを棄却。

2005年3月 中国人元「慰安婦」2人、日本政府に損害賠償を求めた訴訟の控訴審で、東京高裁が請求を棄却した一審判決を支持、原告の控訴棄却。但し、江見弘武裁判長は「**日本軍による強制連行、監禁、強姦を事実と認定。軍の戦闘行為と密接な関係にあり、国に賠償義務がある。**しかし、1952年の日華平和条約により、個人の国に対する賠償請求権は放棄された」との初判断を示し、賠償請求はできないと結論づけた。

2005年8月 日韓国交正常化に関する外交文書の公開を受け、植民地時代の従軍慰安婦問題が日本に法的責任が残っているとして、今後は外交ルートを通じて公式に日本政府の責任を追及する方針を発表。韓国政府はこれまで、日本の道義的責任は指摘したが、法的責任に言及したのは初めて。

2006年8月 戦時中、日本の植民地下にあった中国・海南島で日本軍に性暴力を受けた女性8人(うち2人は死亡)が、日本政府に対し一人2300万円の損害賠償と謝罪を求めた「海南島戦時性暴力被害訴訟」の判決で、東京地裁は原告の請求を棄却。原告側は控訴を予定。この裁判には、若者を中心に多数の原告支持者が傍聴をしたが、裁判長は、わずか数秒で請求棄却の主文を読み退出。

2007年3月 安倍首相は、日本軍の関与を認め謝罪した1993年の「河野談話」について、「強制性を裏付ける証拠がなかったのは事実だ」と発言。これに対して韓国政府は強い遺憾の意を表明。

2007年4月 日本軍「慰安婦」問題をめぐり、東京裁判に提出された各国検察団の証拠資料の中から、占領支配したアジアの女性が日本軍に強制的に「慰安婦」にされた事を示す尋問調書を林博史関東学院大学教授が確認。裁判で証拠として提出されたもので、東大社会科学研究所図書館に所蔵されている。東京裁判には、日本軍によるアジア各地での住民・捕虜殺害など具体的な残虐行為を立証するために膨大な資料が提出された。この度林教授が確認したのは、オランダやフランス、中国など各国の検察団が提出した調書や陳述。

2007年6月 米下院外交委員会は18日、従軍「慰安婦」問題で、日本政府に対して明確に歴史的責任を認め、首相が公式に謝罪するよう求める決議案を採択。(この決議案は、日系アメリカ人のマイク・ホンダ議員によって提出された。)7月第2週か3週に本会議で採決にかけられる見通し。

従軍「慰安婦」決議の骨子:

- 1、日本政府は「慰安婦」問題の歴史的責任を明確な形で認め、謝罪すべきだ。
- 2、謝罪は日本の首相が公式な声明を出すべきだ。
- 3、日本政府は「慰安婦」問題がなかったという主張に反論すべきだ。
- 4、日本政府は国際社会の声を理解し、この問題を現在と将来の世代に伝えるべきだ。

これに対し、日本の国会議員有志や言論人らが6月14日の米紙ワシントン・ポストに、強制性を示す文書はないとする全面広告を出した。広告には「1945年、占領当局は、米兵による強姦を予防するために慰安所の設置を日本政府に要請した」との記述もあり、これが大きな反発を招き、確実に上記の採決を促す要因になった。

韓国の支援団体「韓国挺身隊問題対策協議会」が、ソウルの日本大使館前で記者会見し、日本政府に決議の受け入れを促した。

～以後、今日に至るまで数多くの損害賠償を求める訴訟が中国、韓国、フィリピン人ら女性によっておこされている。日本の裁判所は被害事実を認定したうえで「軍上層部が加害行為の防止を怠った」と述べ、日本軍と国の不法行為を認めている。またその判決で戦後60年を経ても、被害が原告らの心から消え去ることのないことを考えると、何らかの慰謝をもたらす方向で解決することが望ましい」と、政府と国会に解決策を求めている。しかし、「原告が日本政府に損害賠償を求める国際法上の規定はない」と述べ、損害賠償請求はすべての訴訟で棄却となっている…

V 米国・カナダ・ドイツの戦後補償

●**米国の場合:** 米国は、第二次世界大戦中、1942年2月の大統領行政命令にもとづいて国本土西海岸に居住していた日系アメリカ人約11万人を敵性人種として収容所に強制収容し、その自由を剥奪するなどの犠牲を強いた。

1988年8月、そうした当時の米国政府が行った措置が日系アメリカ人の市民的自由と憲法上の権利を根底から侵害するものであったことを認めて謝罪するとともに、一人2万ドル(約を200万円)の補償金を支払うことを定めた「市民的自由法」を制定。当時のブッシュ大統領の謝罪趣旨を託載した手紙を添えて補償金の支払いを行った。

- カナダの場合：** カナダ政府も日系カナダ人にたいして米国政府と同様の不当な取り扱いをしたことについて、人権の原則を侵害するものであったことを承認、一人2万1千カナダ・ドルを個人補償。
- ドイツの場合：** ドイツは政府の責任として1951年に「連邦補償法」などで、第二次世界大戦中にナチスによって人種や宗教、政治的信条の違いで迫害された人に賠償を実行。すでに過去40年間で7兆円を支払った。2010年までに総計8兆円を支払ってすべてを終える計画。さらに1999年、シュレーダー首相はドイツの自動車、鉄鋼、金融など大手企業の首脳と協議し、ナチス政権下の強制労働に対して補償するための基金創設に合意し、2000年7月に正式に設立。基金の名前は『記憶・責任・未来』。2006年9月に補償金支払いを完了した。
- オランダの場合：** 2005年8月、オランダ政府はインドネシアに対する植民地支配(17世紀初頭から1942年までの約350年間)と軍事攻撃(1945年8月17日から1949年12月の約4年間)について深い遺憾の意を表し、公式に謝罪した。「つらい記憶が私たちの心から消え去ることはないが、この記憶が我々の和解を妨げることはない」(外相談)
- ブラジルの場合：** 2005年4月ルラ大統領はセネガルのゴレ島を訪問し、16～18世紀にブラジルが黒人奴隷を労働力として利用した歴史を謝罪した。
- 英国の場合：** 2007年3月、ブレア首相は、奴隷運搬船の主要拠点だったガーナで行われた英国の奴隷貿易禁止二百周年記念式典に、奴隷貿易を行ったことを公式謝罪した。

3) セミナーで用いられた資料

日韓青年セミナー'07日本側プレゼン資料

(セミナー中のレジメをそのまま掲載)

1、はじめに一靖国神社の問題にとりくむにあたって一

日本にはまだまだ未解決のたくさん問題がある

- ▶ 昨年のセミナーで小泉前首相が参拝した8月15日に靖国神社を訪れ、その現状を目にしたが、予想以上の光景であった。戦争肯定を主張するたくさんの人々の姿を目の当たりにし、靖国神社のあり方についてもっと話し合うべきだと痛感したが、昨年のセミナー内ではあまり時間がなく深いところまで話を進めることができなかったため、今回プレゼンをするにあたり日本側のテーマとしてこの問題を取り上げることにした。

2、靖国神社ってどんなところ？一実際に私たちが目にした光景一

1. 靖国疑似ツアー

靖国神社 石碑 神門 拝殿 遊就館 (パワーポイントを参照してください。)

2. 靖国の歴史

バックサウンド: 「九段の母」

流れているこの曲は、戦争で戦死して靖国に合祀されている息子に会いに遠くから母親がやってきた、という内容である。「九段の母」が歌われたのは日中戦争が激化していた昭和14年のこと。当時は兵士の中に「靖国で会おう」という合言葉があり、死んでも神様になって靖国神社で会える、という思想があった。

靖国神社の歴史は近代のものである。今から130年ほど前の1879年に靖国神社が作られた。この靖国神社は別格官幣社(国民を神として祀った政府管轄の神社)であった。「靖国」とは、国を安らかにする、という意味の言葉である。靖国神社は、天皇のために戦った人々を神として祭り上げる施設であり、神社という宗教的施設の形をとった。具体的には明治以降の内戦や侵略戦争によって戦死した戦闘に参加していた人々が祀られていて、この中には旧植民地出身者約5万人が勝手に合祀されている。第二次世界大戦が終了し、GHQの指導により国の管轄で無くなるまで、靖国神社は天皇を中心とする八紘一宇の世界、また狭い範囲で言えば「大東亜共栄圏」の精神的支柱となっていた。国民に「天皇のために死ぬと神様になれるのだ」という死への安心感を与え、また共同体への帰属意識を高めさせることを、宗教装置を使い具現化したものが靖国神社であった。

今靖国神社に合祀されている神の数は、246万6344柱で、靖国神社に祀られたこれらの神は、一度神となったら合祀を取りやめることはできない、ずっとこれからも神である。「死んだら靖国に祀ってもらうんだという気持ちで戦って死んだのだから、遺族の申し出で取り下げるわけにはいかない」という宮司の話である。

後は靖国の問題で…

靖国クイズ(パワーポイント)

1.靖国神社にはどのような人々が祀られているのでしょうか。

戦闘によって死んだ人々、歴代天皇、伊藤博文

2.靖国神社に祀られているのは日本人だけですか？ ○ or ×

3.神様は何人いますか？

1人、約100万人、約246万人

4.靖国神社はどこにありますか？

大阪、京都、東京、名古屋、北海道

日韓青年セミナー'07日本側プレゼン資料

3、見えてきた問題点—私たち日本の青年の現状—

なぜ靖国神社はこんなにも問題となっているのだろうか？

- ・ 植民地時代の朝鮮人や中国人、そのほか他民族の人々を日本人として勝手に合祀している。
- ・ 靖国の存在が戦争を肯定している。戦時中の日本の思想を引き継いでいる。
- ・ 憲法やその他の法律に反している。

↓

日本政府の代表である首相が参拝するということは大問題！！

戦争を肯定している靖国を肯定することは、戦争そのものを肯定することに…。

日本の青年の靖国問題に対する現状は？

- ・ 多くの場合が無関心。話し合う機会、きっかけがない。
- ・ 周囲との温度差、壁などを感じる。積極的に活動をしづらい。
- ・ 未だに韓国や中国等、他のアジア地域への差別、蔑視が残っている。

韓国の青年は靖国の問題に対してどのように考えていますか？

4、まとめ—靖国問題解決に向かって—

身近なところから始めよう！

- ・ 靖国をいきなりなくすというのは難しいが、無関心な周りの人々に靖国の問題に関心を持ってもらうことが、いずれ解決につながるのではないか。
- ・ 若者の中で靖国に対する勉強会を開いたりすることによって、より一層意識を高めてゆくことが大事。
- ・ 新聞などのメディアに発信してゆくことで多くの人々にこの問題について考えるきっかけを与える事ができる。

靖国に反対する日本人だってたくさんいる！！

- ・ すべての日本人が靖国に対して賛成しているわけでは決していない。
- ・ 靖国にかかわる多くの問題を解消してゆくために活動している多くの団体が存在している。力を合わせるように呼びかけていくべき。

靖国神社のない日本へ

- ・ 一つ一つの問題を解決し、いずれは靖国そのもののない日本を目指してゆく。
- ・ 合祀取り下げを目指し活動している団体などの支援を実際に行うことによって問題解決に協力する。
- ・ 最終的には裁判を起こすなど具体的な解決につながる運動を行っていかねばならない。
- ・ 戦争を肯定する靖国の存在がなくなることで、日本と韓国を含む他のアジア地域との間のわだかまりがなくなり、東アジアの平和にもつながっていくだろう。

キツネとトラと「私」と少年

ある人が、森の中をさまよっている時、片足の無いキツネに出会いました。歩くことが出来ず、うずくまっているキツネを遠くから眺めていると、やがて、一頭トラがキツネに近づいてきて、その前にそっと食べ物を置いて行きました。

ある人は、感動し、「神さまは素晴らしい!自分で食べ物を採ることが出来なくなったキツネをも、トラを用いて養ってくださる!」

ある人は、「きっと、私にも神さまは同じようにしてくださるに違いない!!」そう考え、その場に横たわりました。きっと、誰かが、自分のために食べ物や飲み物を運んできてくれるに違いないと信じて。

ところが、何分経っても、何時間経っても何も起こりません。やがてある人は意気消沈し、あきらめて森を出て町へ行きました。

町で、ある人は、建物の影にうずくまっているやせ細った少年を見つけました。「あの子は、きっと空腹に違いない。なんてかわいそうなんだ。しかし、神さまはあの少年なら、救ってくださるかもしれない。」

ところが、何分経っても、何時間経っても何も起こりません。

ある人は、自分にも、かわいそうな少年にも、救いの手を差し伸べない神に向かって叫びました。

「あなたは、片足の無いキツネをトラを用いて救っそくださった。なのに、私がどんなに空腹になろうとも、あの少年がどんなに弱っていても、助けようとはしてくださらない!」

すると、ある人の心に、神が語りかけました。

4) 感想文

『日韓聖公会青年セミナーに参加して』

日本聖公会東京教区

中村真理

私は2006、2007年の日韓セミナーに参加しました。実を言うと06年の参加は私が自分で希望したというよりも知り合いから依頼を受けてという形での参加だったのですが、翌年の07年には自分から参加を決めました。その理由は06年のセミナーに参加したときに、この日韓セミナーが自分が考えていた以上に重要で、そしていろんな可能性を秘めたものだという事に気付いたからです。もう3、4年前のことなので正直当時の詳細なことはあまり覚えていないのですが、日韓セミナーに参加した、という経験は今でも私の中に強く残っています。

まず感じたのが韓国の参加者たちはみなエネルギーに溢れていてとても力強く、熱かったこと。参加者数からして圧倒的に韓国側が多いこともあるのですが、なんとというか韓国の教会自体が活気に溢れていて、青年も青年活動に積極的に参加して楽しんでいるんだ、ということが見てとれました。日本と比べてしまうのはあまり良くないのですが日本の青年活動もこのくらい活発だったらなあと思ってしまう。韓国の青年は皆優しくフレンドリーで、馴染みやすい方たちばかりで人見知りするタイプの私は助かりました。

そしてもう一つ考えさせざるをえなかったのは、日本が韓国にしてきた過ちの大きさです。このセミナーは平和について様々な題材を取り上げながら話し合い、分かち合うことを目的としています。元「従軍慰安婦」問題について勉強する機会があった時は本当に辛くて、日本人で居ることをここまで恥ずかしく思ったのはこのセミナーが初めてでした。

取り返しのつかないようなことをしてしまっている事実とその事実を否定し続けている日本政府（靖国神社に行けば明らかです）を考えると、本当に日本と韓国は同じ地点に立ち、同じ方向を向き、共に歩いていけるのだろうかと思ったことを覚えています。でもそこまで考えて初めてこのセミナーの目的が見えてきたような気がしました。確かに日韓には越えられそうもない壁が未だにあり、乗り越えなければいけない課題がある。しかし、

それを確認したこと、その問題に取り組もうとするスタート地点に立てたことが、このセミナーの大きな成果ではないかと考えたのです。もちろん、それだけでは一向に両国の関係は前に進みません。だからこそ、このセミナーは毎年開催され、継続していく必要があるのだと思います。

この日韓セミナーは新しい考え方を持った青年たちが、このセミナーの歴史を振り返りながらその先の未来へ向かっていくために集い、また一つずつ新しいステージに進んでいくような、そういうもので在って欲しいし、そのために私ができることがあれば、これからもお手伝いしたいと思っています。



『平和の種になろう！』

日本聖公会京都教区

浮田倫太郎

6日間に渡る長い日程だったが、終わりを迎え振り返ると本当に充実した日々だったと思う。日韓の青年が6日間かけて本当に平和の種となる人間、仲間となったのではないだろうか。去年のメンバーも多数いたから仲良かった、ということではなくて、6日間かけて築き上げた結果だと思う。日韓の間に横たわる課題の克服に向けて、今回のセミナーではキリスト者としてのヴィジョンが立てられたのではないだろうか。「東アジアの平和」「日韓の平和」など、平和ということの範囲が問題になることもあるが、今回のキャンプでは、青年みんなが世界の平和を本当に願っていることが各所に表れていたと思う。具体的な活動の指針も示せたが、それ以上にみんな一人一人が愛し合っていて、一人一人を受け入れ

ていることをしっかりと分かり合えたことは、日韓キャンプでの最高の結果ではないだろうか。去年のキャンプでは政治の問題や社会問題と、様々な問題に取り組んだため、各国の政治討論のようなことになってしまった。今回は、最後に日韓青年による聖餐式を行なうなど、キリスト者としての集いである、ということがまずはっきりと表されていた。同じ聖公会の青年として、共に行動でき、分かり合い、交わることができるのは神さまの導きのためと思う。語弊があるかもしれないが、一般的な青年の集まりでは、韓国・日本の青年のお互いのことを、ここまで深く分かり、考え、交流することもできないのではないかと、思う。昨年から日韓聖公会青年セミナーは「東アジアの平和を考える」ということを目的としているが、そこにはキリスト者としての前提がある。政治・社会の問題を考えるが、神さまのお導きを通して、小さな私たちに何かできることはないか、と一緒に考えることも大きな目的の一つではないか。私たち一人一人は弱いから、互いの国のことを敵対視したり、憎んだりしてしまうことがある。そのような非力な私たちだが、お互いの国の人、青年と知り合い、交流していくことで、共に考え動くことが出来る。今後とも日韓キャンプでは、お互いが深く交流し、神さまの存在を改めて感じ、そこに感謝を覚え、共にヴィジョンを立てることができれば、それが最も素晴らしいことだと思う。

そのように考えたとき、今回のキャンプではその目的が十二分に達成されたと思う。プログラムの一つ一つでは、神さまの存在を意識できないときもあった。しかし最終日の聖餐式で、心から6日間のプログラムを通して神さまが見守ってくださったということを感じることができた。様々な政治事情があり、内面的には重い過去を引きずる両国の青年が、国境を越えて、「国民」の壁を越えて一つになった。日本と韓国が一つになる、というよりは、一人一人の人間が一つになったといえるだろう。人間はもともと国家に縛られるものではないから、一人一人が正義と平和の道に神さまによって導かれていき、一人一人が平和の種となれることは本当に素晴らしいことなのだと思う。平和の種になる、抽象的表現で難しい概念ではあるけれども、今回のキャンプの最終日に、私たちは平和の種になれたのではないかと、思う。平和とは国が

作るものではない。国が作る「平和」はバックスロマーナに代表されるように常に圧倒的な武力による威力的平和であった。未だに本当の平和が達成されていないのは、世界中の人々の中に平和を勘違いしている人がいるからだろう。私たちは様々な問題を意識する中で、自分たちが神さまによって生かされていることをはっきり確認できたと考える。聖餐式の平和の挨拶での涙は、そのものだったと思う。一人一人の人間が、互いのことをこれほどにまで愛しているのに、そこに国家という強大な壁が立ちはだかる。そんな現実が悲しくなり、また、一人一人がこうして愛することができたことに対する感謝の涙を流したのかもしれない。そこに、平和の種になった私たちがいたのではないだろうか。

国家が作るものが平和ではない。一人一人が作るものが平和である。神さまのお働きを通じて互いを愛することができた私たちは平和の種になったのではないかと。日韓キャンプは「平和」を考える会になっているが、キャンプを通じて聖公会の青年として神さまの存在をみんなでもっと感じることも大きな意義があると思う。平和は一人一人が作るもの、その平和は神さまのお力によってもたらされるもの。キリスト者として、一人一人が平和について考え、問題について意見し、お互いに意見を求め、お互いを理解し、愛せたこと、私は日韓キャンプの大きな大きな収穫であると思う。

具体的なヴィジョンが示せなかった、などの問題点も挙げられるかもしれない。でもその前に、日韓の青年で集まることができ、平和の種になることができたことを感謝することが大切だと思う。種は育つ。平和を育てるのは、このキャンプを体験した私たち一人一人だ。日本、韓国、それぞれの国に戻っても、キリスト者としての一人の人間として、平和を成長させていく働きをこれからする必要はある。その働きは、今回のキャンプを終えた私たちが実行することができるものであり、それが新たな一歩であると思う。

2008 年

第 3 回日韓聖公会青年セミナー

日時：2008 年 8 月 21 日～24 日

場所：日本 沖縄

※ この回は日本聖公会「全国青年大会」との同時同地開催となった。
プログラムも両者共通で進められたため、第 3 回の報告については「全国青年大会報告書」をご参照いただきたい。

2009 年

第 4 回日韓聖公会青年セミナー

日時：2009 年 8 月 13 日～18 日

場所：韓国 華川・ソウル

1) 2009 年プログラム概略



写真 1 李司祭の説教



写真 2 Tシャツ作り



写真 3 一人ひとりの思いが込められた Tシャツ

▼1 日目(8 月 13 日)▼

今回の日本側の参加者は、北関東教区から 2 名、東京教区から 1 名、横浜教区から 1 名、

中部教区から 3 名、京都教区から 3 名、大阪教区から 3 名、さらには香港教区からの参加者も得て計 14 名が集い、13 日午後各地より仁川国際空港に到着した。韓国の青年の出迎えを受け、全員で専用バスに乗り一路華川へと向かった。今回のセミナーではプログラムの前半を江原道・華川で過ごし、後半にはソウル市内に戻る日程が組まれた。華川はソウルの北東に位置し、DPRK(Democratic People Republic of Korea)=北朝鮮との軍事境界線にも近接した小さな村である。ソウルよりも高緯度であり、周囲を森に囲まれた華川は、夏でもひんやりとした心地よさを与えてくれる土地で、豊かな自然が残されている。バスに揺られること 2 時間半ほど、その間にたっぴりと自己紹介やゲームをし、華川に到着した。華川での宿泊施設は「山中湖村」という、1997 年に閉校した小学校を改築したもので、日本でも珍しくなった木造のかわいらしい校舎が森の中に佇んでいた。2 日目に実際に船に乗るが、すぐ近くに大きな湖があり、その湖の名から「山中湖村」と名付けられている。到着したころには夕刻となり夕闇が迫っていた。到着してまずは夕食。板の間の食堂にて、韓国の家庭料理をいただいた。一見和食に通じるものを感じたが、キムチやトウガラシなどが使われしっかり味付けされ、ごはんが何膳もすすんだ。

開会礼拝

食事の後はみなで開会礼拝をおこなった。今回はそれぞれの祈り、礼拝用に特別な式文が用意されており、後掲しておく。

李司祭の説教では「世界がもし 100 人の村だったら」という絵本をもとに、これから平和の構築に向けたプログラムを行っていくというオリエンテーションをされた。(写真 1)

平和の Tシャツ製作

開会礼拝のあとは早速最初のプログラムとして、一人 1 枚 Tシャツを作製した。ただ作るのではなく、テーマがある。それは「平和」。一人ひとりがイメージする平和を絵に表現してみよう、というプログラムである。一人ずつに真っ白い Tシャツが配られ、アクリル絵

の具を使用して色付けしていく。簡単なように思えて、自分の心の中にある「平和」のイメージを具現化させていくという作業はなかなか難しい作業で、図案決めに悩む参加者も多かった。(写真 2)

色付けをはじめるとみな無口になり真剣に筆を進めていた。約 1 時間半かけて、個性的な図案で色とりどりに美しい、それぞれの「平和」を描いた T シャツが完成した。(写真 3) この作業は 5~6 人が一つの作業机を使い共同の絵の具で製作にあたった。今回のセミナーでは自己紹介以外にこれといったアイスブレイキングはなかったものの、この T シャツを作る作業が、声を掛け合い、作品を見せ合うなかでアイスブレイキングとしての役割を果たし、それぞれうちとけあっていくことができた。

夜の交流

例年ならば韓国の青年参加者が日本の青年参加者よりも元気がよく、圧倒していたが、今年に限っては日本側の参加者の威勢がよく盛り上がりを見せていた。夜の交流会では韓国側の青年がマッコリや焼酎などを用意してくれていて、チヂミなども即興で料理してくれた。会話も弾み、韓国と D P R K (北朝鮮) 情勢のこと、日本の青年の過去の認識、韓国国民の対日感情など、真剣な話題もずいぶんと時間をかけて語り合われていた。マッコリと焼酎は 3 日分用意されていたのだが、盛り上がった参加者の一部は、初日の夜にそのすべてを飲み干してしまった。華川の夜は過ごしやすく、酔いつぶれてグラウンドに面したテラスなどで寝ている青年もでる始末。飲みすぎた面々は明るる日に二日酔いに悩まされたことは言うまでもない。

▼ 2 日目(8 月 14 日) ▼

2 日目は終日フィールドトリップ。D P R K との軍事境界線である D M Z を訪問し、「平和のダム」などを見学した。また韓国北東部華川ならではの大自然のなかでの遊びも体験した。



写真 4 湖を進むフェリー

平和のダム～ベルパーク

宿舎脇につながる農道を 5 分ほど歩くと湖岸にたどり着く。深い緑色した水を湛える湖である。見た目以上に水深が深い湖で中型の船も着岸できるようになっている。予定の時間になるとかなたより中型フェリーが到着した(写真 4)。一般の乗船客の姿も見られ、観光用だけでなく生活の足として使われている。船は波もなく穏やかな湖の水面を滑るように進んでいく。川よりやや幅が広い程度の湖は、両岸に急峻な山の斜面が迫ってくる。船上では語らったり日光浴をしたり、昨晚の酔いの疲れを癒したり…思い思いに時間をすごした。よい機会であったので横断幕を船上に掲げみんな写真に納まった。(写真 5)

30 分ほど進んだところで船の進行方向左手前方に大きなコンクリート製の壁が現れた(写真 6)。一目でダムのそれとわかるものだが、見方によっては大きな堤防のようにも見える。

この壁にはダムにみられる放水用の排水口などは造られていない。大きなそのダムは「平和のダム」と呼ばれている。ダムと平和という語はすぐにはつながりにくいのだが、この名前には歴としたいわれがある。かつて、D P R K が韓国側に攻撃をしかけようとしたことがあったという。攻撃は直接的な軍力によるものではなく、D P R K 領内にある人造湖を決壊させ、一気に水をソウル市内へと流し込み洪水を起こすという作戦だったそうである。これに対し韓国政府はダムを製造し水



写真 5 船上で記念撮影



写真 6 平和のダム



写真 7 子どもたちが描いた平和の絵

をせき止めるという対応策を検討した。その際、ダムをつくるにあたって小学校などにも寄付金の要請があり、国民が一致団結してダムの建設を支持したという。現在 30 代のスタッフは小学生のころにダム造営の寄付をお

こなったことを覚えているという。

後に判明したことだが、この DPRK 側の作戦は韓国政府による自演であったらしい。今日では、大手ゼネコンと癒着した政府が、利益を上げるため偽りの情報を流し、ダムを造ったとされている。

ダムのすぐそばには「The World Peace Bell Park」と呼ばれる公園がある。ベルパークという名の通り、多数のベル＝鐘が展示されている。公園には平和の象徴として大小多数の鐘が置かれ、こどもが描いた平和の絵が展示されている。(写真 7)

同じ場所に朝鮮戦争の記念碑も建てられ、韓国を支援した国の国旗のプレートが一つの石碑に納められている。

続いて少し離れた高台にある「世界平和の鐘」を見た。この鐘は世界中の紛争地域に落とされた弾丸の薬きょうから作られている。重さは 9,999 貫(約 37.5t)と大きい、鐘は未完成である。鐘の上部の四方には平和の象徴として鳩が置かれているが、この鳩のひとつ、北側のものだけ羽が欠けてしまっている(写真 8)。これは初めから意図して造られた。北側とは DPRK の位置する方向であり、両国が分裂しているために平和の鳩が飛べない、ということを表している。鐘の前に羽だけが展示されており、南北統一後に晴れて取り付けられる予定という。ガイドの方の説明を聞いた後、全員で代わる代わる鐘を撞いた。

「世界平和の鐘」のそばには歴代のノーベル平和賞受賞者の写真と青銅製の手形の立体像が置かれている。手を握ればあたかも受賞者と握手をしているようである。

DMZ

昼食後はいよいよ南北軍事境界線 DMZ(非武装地帯)へ。もともとのスケジュールでは非武装地帯をトレッキングする計画だったが、韓国軍の許可が下りずに中止となった。李明博政権になり管理が厳しくなっているという。DMZ＝非武装地帯とは、朝鮮戦争の休戦協定時に定められた北緯 38 度線を基準に引かれた軍事境界線を中心に、南北各 2 キロ、計 4 キロの幅をとり設けたバッファゾーン(緩衝

地帯)である。この DMZ をはさみ両軍が山の稜線などに営舎を築き警戒にあたっている。

「非武装」地帯ではあるが、過去には衝突も起こっている。

バスは舗装路をそれて未舗装の細い道を進む。やがて最初の検問所があり、兵士の検問を通過、その後いくつかの検問を通過し、山道を登り哨戒岩に到着した。訪れた岩は朝鮮戦争で激戦地となった場所で、「四二五高地戦跡碑」が建てられている(写真 9)。日本でも米軍基地や自衛隊基地などで兵士を見ることはあるものの、すぐ目の前に実際に実弾入りの自動銃を下げ警戒する兵士を目にするのは珍しい(写真 10)。大きなガラス張りの部屋に入り、兵長から警備の概要、最近の北朝鮮軍の動向などの説明を受けた。ガラス張りの外にも出ることができ、目と鼻の先に北朝鮮領を目にしたが、岩のほかにこれといった建造物はなかった。しかし、備え付けの双眼鏡をのぞいたところ、川べりで魚を獲る一般民の姿が見えた。近くに民家などは見当たらないので、わりと遠い距離を歩いて川まで来ているようであった。一見するとまったく争いのないように思える静かな大地に、かつて銃弾の雨がふり、今も同じ民族同士で銃を手に警戒しあっている状況は、本当に悲しく、その原因を作った日本人の責任を感じずにはいられない場であった。

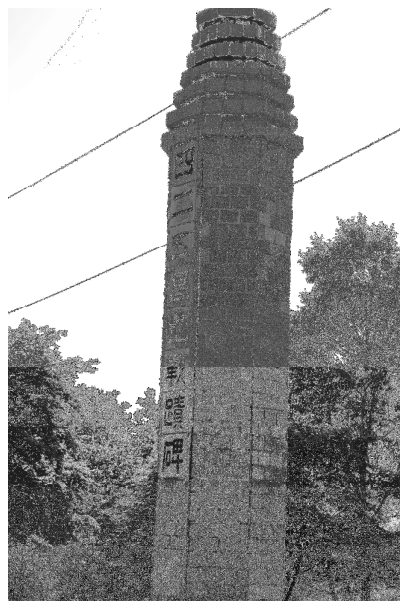


写真 9 前線基地に建つ碑



写真 10 韓国軍兵士



写真 8 平和の鐘



写真 11 ヤマメつかみ

ヤマメつかみ

華川の自然公園でヤマメつかみを楽しんだ。水深の浅いいけすに入り、みな大はしゃぎで

ヤマメを追った(写真 11)。獲ったヤマメは公園内の食堂で塩焼きにしてもらい、夕食の食卓に上った。ほかにもヤマメの刺身や冷麺と、おいしい夕食をいただいた(写真 12)。

華川は緯度が高いので夏の夕暮れは遅い。夕ご飯を食べたあともまだまだ明るかったため、みんな川へ入り水遊びをした。本当に自然の豊かなところで、川の水はとても清らか。韓国の青年も日本の青年も、なかなか日頃自然に触れていないので、服が濡れてしまうこともかまわず、ここぞとばかりに楽しんでいった。

その夜は体験したことを分かち合った。



写真 12 ヤマメ料理の夕食

▼3日目(8月15日)▼

この日は終日学校(宿舎)のなかでワークショップを行った。ソウルから平和学の講師を招聘してのワークショップは、抽象的な事柄も多かったが、葛藤と和解を感じる事ができるプログラムだった。

平和のワークショップ

1) アイスブレイキング

プログラムを始めるにあたり、講師の先生と参加者、参加者同士の緊張をほぐすためのアイスブレイクとして簡単なゲームを行った。全員の誕生日の順番に1列にならぶという内容だが、互いに誕生日を教えあったりしてはいけない。ただ1月から数えて自分はこのあたりだ、と思ったとおりに並ぶ。きれいに順番を成していたり、外れていたたり、答え合わせで盛り上がった。その後、番号を振り分けて日韓混合の6つのグループに分かれた。

2) 図形ゲーム

最初のプログラムは、人と人との意思疎通の困難さを認識する目的で、ゲームを行った。5~6人のグループにわかれそれぞれのグループにいくつかの型紙が配られる。それを無言のうちにみなで形を組み合わせて四角形を作っていく。少し詳しいルールを説明しておく、グループのなかで一人だけ審判をする。メンバーが言葉を発しないか、またアイコンタクトも禁じられているため、何か身振り手振り、視線などで合図を送っていないかどうかを監視する。なんとかすべてのグループが四角形を作ることができたが、グループによっては合図を出し合ったりしてしまうところもあった。始めるまでは声をかけて行うことと、無言で行うことの差異はなかなか想像しがたいのだが、実際に行ってみるとジェスチャーも目配りも一切ない状況での意思疎通はかなり難しいものであった。

3) 切り絵ゲーム

続いて、四角形よりもやや難易度が上がる、切り絵ゲームを行った。まずグループごとに車座になり、A4サイズの1枚の紙が配られる。次にグループの各人はそれぞれある動物を頭の中にイメージする。続いて、1枚の紙を順番に1人1回ずつちぎっていき、順繰りに回していく。そして最終的にある動物が「できあがった」と思われた時点で、グループ内の誰かが回すのを止める。各人が思い描く動物は様々なので当然ながら順番に紙をちぎる過程で自分とは異なる動物に仕上がっていく。その時に、あくまで自分が造りたい動物を目指して切っていくのか、それとも、その時々状況に応じて自分の目標を変更し他人の目標に修正していくのか。しかもそれらの作業は目配りもジェスチャーも一切できない。ただ黙々と紙をきっていくだけである。これはグループによって完成品に大きな差異がみられた。あるグループは非常に精巧に描いたし、あるグループはまるで宇宙人のような、如何とも判別しがたいものを作り上げていた。

この作業を通して、意思疎通のむずかしさ、さらに人の思考を読み取ることのむずかしさ、もどかしさを知ることとなった。

4) 劇—葛藤と和解—

午前中に引き続き、午後もプログラムを行った。葛藤と和解のしくみを知るため、ロールプレイングをした。日本側と韓国側に分かれてグループをつくり、ストーリーから考えた。あるグループは年頃の娘をもつ父親の葛藤を表現した。門限に反発し外泊する娘への接し方に父親は悩み、なんとかいうことを聞かせようとしてもうっとうしく思われてしまう…。別のグループは、訪問客と客人を招くホスト側の葛藤を表現した。とあるヨーロッパの室内管弦楽団を招待したところ、受け入れる側の宿泊施設に不満があったらしく、どうしても1人部屋がいい、などの要求を受けた。最善を尽くして受け入れを行ったつもりなのに、感謝の言葉よりも先にクレームがくる、という葛藤が演じられた。韓国のあるグループは、母娘の葛藤を描いた。日常的に家のなかでみられるであろう家事分担の際の家族の衝突。

「好きなドラマだから」などと言って好きなだけテレビを見て勉強もなかなかせず家の手伝いもしない。そのような娘に腹を立て叱りつける母親とそれに猛反発する娘の間の葛藤。日本のあるグループは一人の青年が韓国で体験した出来事を劇にした。日本人数人で韓国に旅行に来て、気分が高揚して電車のなかで大きな声で日本語で話していたときの話。韓国人の老人がいきなり日本語で叱りつけてきた。その内容は、過去の侵略に対して何も思っていないのか、よくもそんなにおもしろおかしく笑ってられるな、というようなことだったという。自分たちは何も考えていないわけではないし、過去についても学び考えている。それでも韓国の人から見ると、反省の心のひとつも見えない日本人に映ってしまう悲しさと葛藤。

それぞれのグループが様々な葛藤を伝えあった。ロールプレイングを通して、葛藤とは、その語を使う機会が少ないとしても、日常生活のなかでずいぶんとたくさん発生していることに気付かされた。

続いて、同じグループで、葛藤を演じた内

容に対する解決策＝和解策を話し合いロールプレイすることとなった。どうしたら和解することができるだろうか。それぞれのグループが様々な和解を考え演じた。

父娘の葛藤については両者の不信感をなくしていくために、門限などで縛るのではなく、また自分勝手に外泊するのでもなく、まず日々時々の状況を親に伝え、話し合う時間をとるようにすることが提案された。

招待客とホスト側の葛藤では、招待客側がもてなしにまず感謝すること、ホスト側は少しでも要望を聞くことなどが提案されたが、終局的に両者の対立は平行線をたどったままとなってしまう。

韓国の母娘の葛藤では、母親がテレビを見る娘を頭ごなしにしかるのではなく、「どんなドラマを見ているの？一緒にみようかな」と話題を作り、話をする。そうすることで娘の日頃の母親への不信感が和らぎ、積極的な心の通い合いができる、という提案がなされた。それぞれの葛藤解決のプロセスは興味深く、実践面がよく考えられていた。ただ、ロールプレイング中でも円滑な終末を迎えられないグループもあったように、家族を含め、人との間に葛藤が起こること、その葛藤を解決し和解していくことは、なかなか深い思慮が必要であり難しいことであった。

5) 新聞紙のタワー作成

最後のプログラムとして新聞紙でタワーを作製した。グループごとにまず作戦会議をする。10分間のうちにどのようにタワーを作るかを計画し、衆目を一致させる。そしていざ製作を始めたら、一度も話すことはできない。はじめの10分間のミーティングは非常に重要であり、また、無言のなかでの正確な意思伝達が求められる。新聞紙のタワーは2mの高さに積み上げることが目標で、実際に複数のグループが到達した(写真13)。残念ながらいくつかのグループは完成させることができなかった。チームワークや協調性が求められるが、最初の10分でしっかりと計画立案できていたか、作製手順の伝達できていたかということも完成に向けた大きな要因で



写真 13 新聞紙のタワー

あった。意思疎通のできているグループは各人がそれぞれの役目をもって働き、きびきびと仕上げていく。一方、設計は確認したものの、具体的な作業手順を確認できなかったグループは、途中からやみくもにタワーをたてることとなり失敗してしまっていた。ここで大事なことは、一人ひとりが主体的に計画に関わり、すべての作業を理解したうえで製作にかかることだろう。受動的に過ごしていたり、曖昧な理解のまま取り掛かってはいけない。新聞紙のタワーを作ったが、実社会でも同様のことがいえる。何か物事を実行する際に、自ら積極的に聞き、見て、話し、他人との協働に積極的にならねばならない。葛藤を抱かないためのもっとも近道となる行動は、各人が示された課題に対して自分なりに積極的に主体的に取り組んでいく、関わっていくことだろう。そして、起こってしまった葛藤を解決するためにも、当事者全員が主体的にかかわり話し合っていく必要がある。

BBQ／キャンプファイヤー

華川で過ごす最後の夜は大いに盛り上がった。夕食はサムギョブサル。サムギョブサルとは豚肉の三枚肉の焼肉のことで、韓国料理として最も人気あるメニューの一つ。ソウル市内ではサムギョブサル専門の飲食店が軒を連ねるが、今回華川では屋外で豪快にバーベキューをして食べた(写真 14)。乾杯の前に、金根祥主教が御挨拶をしてくださった。大いに食べて楽しんだ後、日もすっかり暮れてからはキャンプファイヤーをした。大きな炎を囲み、青年の集いらしく大いに盛り上がった。



写真 14 バーベキュー



写真 15 キャンプファイヤー

(写真 15)。その後も華川の最後の夜を思い思いに楽しんでいた。

▼4日目(8月16日)▼

主日にあたるこの日は、ソウル市内にもどりソウル大聖堂での聖餐式に歓迎のうちに出席させていただいた(写真 16)。聖餐式のあとは、地下三階に位置する食堂で昼食をいただき、その後2グループにわかれてソウル市内を散策した。ソウルは初めての日本人青年がほとんどで、韓国の青年が様々な名所に案内



写真 16 ソウル大聖堂にて



写真 17 伝統衣装体験

してくれた。一方のグループは南山韓国村ではチマチョゴリの着付け体験をしたり、昔ながらの韓国の遊びを体験したりした(写真17)。

もう一方のグループは韓国の伝統工芸体験などをして過ごした。夜になると夜景でよく知られる南山タワーにものぼり、ソウル観光を満喫した半日であった。

▼5日目(8月17日)▼

平和教育

この日は一日中ソウル市内の宿舎にて「平和学」についての講義を受けた。講義を受けるといっても、一方的なスクーリング形式ではなく、参加型のセミナーで考えながら学ぶ機会が与えられた。

午前中には葛藤とは何かということの講義を受け、日韓両国の青年が抱える葛藤について、それぞれ事前に準備した内容を発題した。日本側の青年は、日本には日本国憲法9条に基づく平和の理念があるものの、それと逆行する政治状況や民意があり、そのような現況が韓国の人々に映じるとどのような思いが惹き起こされるだろうかを案じていることを伝えた。現在韓国では日本文化を積極的に受け入れたりする反面、過去の侵略から目をそむけ続ける日本の在り方に疑問を抱き葛藤をおぼえているのではないだろうか、日本人は戦争・侵略の行為をうやむやにしたままで韓国の人々と「友人」と交流していてよいのだろうか、ということ課題として感じていると示した。

一方韓国側の青年は、日本を中心としたアジアにおける韓流ブームが惹き起こす葛藤を提起した。韓流が韓国の文化を伝える格好の役割を果たしている嬉しい反面、その舞台裏には企業が野心をくすぶらせる大量の商業性が存在しており、利益追求が大目的となると様々な矛盾が生じてくる。日本における昨今の嫌韓は韓流ブーム以後に一層強固になってきている。潜在的な差別視が日本国内に存在するなかで、マーケティング的に優位となるような戦略を韓国が仕掛けることで、嫌韓感情がさらに強まっていくことは明らかでその打開が必要であることを発表した。日本側青年の発題についてはそのレジメを後に掲載しておく。

その後、日韓双方の葛藤をもう少し細かに見る取り組みを行った。まず日韓の間の葛藤について、平和学の大家ヨハン・ガルトゥング氏が提示した「行動・態度・状況」の3つにわけ、それぞれの点で葛藤を惹き起こす原因となっている事柄を挙げた。そしてそれらを解決し日韓関係を改善していく方法について話し合った。小グループに分かれ話し合った結果を模造紙に書き壁に貼りだし発表があった。そのなかで葛藤の原因としては、「互いの無関心」「マスコミの煽動」、「総理大臣の靖国神社参拝」、があたり、解決方法として、「無関心の態度を改める」、「交流をより深める」、「マスコミの情報に流されない」、「正しい歴史教育を実現する」などが挙げられた。

午後はヨハン・ガルトゥング氏の理論を中心とした平和学の歩について、また現在の世界状況における平和学の果たす役割について講義を受けた(写真18)。これは重要な学びであったので、やや長くなるが平和学と葛藤について参加者が学んだことを書き添えておく。

平和学とは、暴力をへらし暴力に抵抗する力をつくりだす、「平和」を追及する学問である。ガルトゥング氏によれば平和には2つの種類がある。1つは消極的平和といって戦争や差別などのない状態、すなわち構造的暴力や直接的暴力のない状態を指す。もう1つは積極的平和であり、消極的平和に加えて幸福

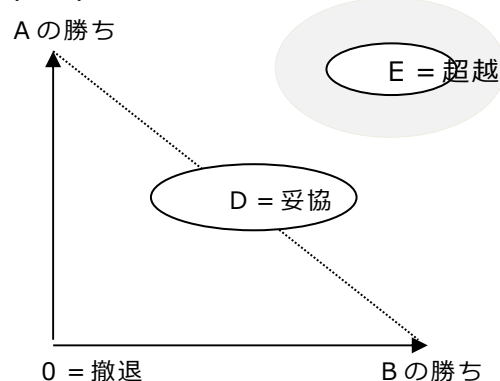
や福祉や繁栄が保障されている状態を指している。同じように暴力にも複数に分けられる。まず直接的暴力と呼ばれる、戦争やテロや殺人の類。次に構造的暴力と呼ばれている帝国主義や政治的圧力、経済的搾取などの暴力。そして文化的暴力といって、文化的な優位性を示すことにより、直接的・構造的暴力を正当化するものがある。ではなぜ暴力が発生するのか。なぜ積極的平和を創り出すことはできないのだろうか。その背景には conflict=葛藤が存在する。葛藤とは、国語辞典によれば「人と人との間や人の心の中などで、互いに争い、さからあい、また憎みあうこと」である。英語の conflict とは対立・紛争・もめごと・葛藤とやや広く定義されている。葛藤(conflict) のパターンとして夫婦間・兄弟間・職場間・生徒間・近隣住民との間・国家間・国民間など、様々な状況で発生する。

葛藤が発生した場合、通常様々な解決案が提示される。まずは A)妥協案(折衷案)と呼ばれるもの。問題の当事者双方が折れ、妥協する。次は B)どちらかがあきらめること。これで一方は解決するだろう。もう一つは C)どちらも我慢し、問題を放置すること。これら A) ~C)は身近な生活でも、また日本国内でも民事・行政裁判などを通じてよく生み出される状況であるが、果たしてこのような方法で葛藤を解決することはできるのだろうか。

この点に着目したガルトウング氏は「トランセンド法=超越法」を考え出した。この方法の特徴は一切妥協をしないことである。自分の意見を主張しとことん対話を行い、同時に相手の言い分を十分に聞く。そして両者の間で、対立する両者の各々の求める目標を越え、新たな地点に新たな目標(着地点)を定めるといったものである。

セミナー3日目に行った無言で紙を切り動物を作るワークも、トランセンド法に結びつくものである。はじめは各自が思い描く動物があり、その動物を作り上げようとする。しかし互いの思惑が相殺しあい、なかなか動物を完成することはできない。そのうちに、自分が目指していたものではない、まったく別

(参考)トランセンド法—A/Bの争い



の動物を作るという結果が生まれてくる。そこに話し合いの余地があるならば、説得性の強い人が勝ちその人の求める動物が作られることになる。しかし無言なので、互いに妥協するわけにもいかず、相手の心を読みまったく別のものを創造するしかない。

このように、トランセンド法は真の葛藤を解決する手段として大いに実用的であり、このセミナーを通して学ぶことができたことは参加者にとって大きな収穫だったのではないだろうか。

葛藤についての研究は世界中で進められ、日本国内でも平和学を開講する大学が増えてきている。葛藤を解決する手段は一つだけではなく、人間が生きて課題に取り組む数だけの解決策が存在する。トランセンド法のほかに、講師の先生が強調されたのは「イメージする力」であった。平和は残念ながら一朝一夕にはならず、実現のためのイメージ作りが大切であるという。講義の最後に、10年後の韓国と日本の関係をイメージして絵にする、という製作活動を行った。大きな模造紙に各人が思い思いの場所に思い思いの方法で10年後の未来を描いていった。若者同士が仲良く語り合い飲み明かす様子、韓国と九州が陸路でつながれる様子、日韓の子どもたちがともに学校で学ぶ様子、日韓の歴史教科書がひとつになり、歴史教育摩擦がなくなる様子などが描かれた(写真19)。

朝から夕方までの講義を終えた参加者は、さすがに疲れをみせながらも充実した表情であった。

ロザリオ作り

今回のセミナーの思いで作りとしてロザリオを製作した。韓国では今ロザリオが人気を呼んでおり、様々なロザリオが販売されているという。順調に作り上げていながらも最後に結ぶ段になり玉を床にばらまいてしまう人もおり、悪戦苦闘しながらもそれぞれ唯一無二のロザリオを完成させ、よい記念となった(写真 20)。

大きな葛藤

フェアウェルパーティーが近づき、別れの時も迫ってきた最後の夜、韓国の青年から「もう少しお互いを深めたい」との話があった。韓国の青年の口から堰を切ってあふれ出た言葉は、この日までの両国青年のセミナーに対する姿勢、とくにセミナーへの日本側の参加者の姿勢についてであった。韓国の青年はセミナーのなかで、華川での交流会をはじめたくさんのもてなしをしてきていた。マッコ



写真 19 平和のイメージ

リを作ってくれ、美味しい夜食も作ってくれた。日本の青年参加者の多くは「おいしい」「ありがとう」と感謝しながらも、楽しい語らいのうちに酔いが回り、後片付けなどもろくろくせず眠ってしまっていたりした。宿舍の台所では韓国の女性参加者が一から十までしてくれていたのがあった。

今回の日本側の参加者は、日本の青年同士でとても仲がよかったこともあり、日本側だけで固まって盛り上がっていることも多かった。韓国の青年からは「せっかくの日韓セミナーなのに…」と残念がる声が聞かれ、日本側に交流する気が少ないようにみえたようで

あった。

韓国の青年の発言に、日本側参加者はみな、衝撃を受けた。なぜ、今ここでそのような話をするのだろうか。日本側だけで集まり話し合いの時を持った際にも、韓国の青年たちの真意がわからずいぶかしがる面々もいた。だが、これこそが大きな葛藤だ、と日本側参加者は受け止めた。みながはじめて、隠れていた真実を知り相手の気持ちを痛いほどに知ることとなった。夜 9 時から深夜 2 時までほとんど休憩もせず 5 時間話通した。この話し合いのなかで、青年たちは葛藤の解決手段の一つ、ホ・オポノポノを実践していった。

ホ・オポノポノとは南太平洋諸島に伝わるもめごとの解決方法で、いくつかのポイントがある。まずは事実の確認と心からの謝罪が必要となる。これはせねばならなかったことを「しなかった」「できなかった」自分の責任を感じ、相手の思いをしっかりと受け止める行為である。次に、自分の気持ちをはっきりと主張する。一方的に素直に謝ればよいかといえそうではなく、その時に問題の行動をとるにいたった理由、その背後に自分がもっていた考えを整理し、相手に自分の気持ちを理解してもらおう。当事者間の話し合いに続き、当事者の周囲の人々も責任を総括する。周囲の人々が一人ひとり自分たちの立場を振り返り、事実を確認し、とるべきであった行動、できなかったことなどを反省し総括する。最後に、どうすればよかったのか、これからどうしていくのかを考える。



写真 20 手作りのロザリオ

これらの一連のプロセスを経ることにより、過去を水に流し(清算)、建設的な未来を築くことができる、ホ・オポノポノはまさに究極の葛藤解決法=和解法とされている。

青年たちは如何なるホ・オポノポノを実践していたのだろうか。

青年たちは車座になり、一人ひとり、余すことなく思いを打ち明けていった。まず日本側の青年は飲み会の後に、片づけをしなかった、配慮がなかったことに対する反省の思いと謝罪を涙ながらに行った。続いて、文化・言葉の壁、自国ではない外国での慣習の戸惑い、韓国青年の朝の礼拝の出席率の低さやプログラムへの取り組み方など、疑問に感じられたことや不満に思っていたことを伝えた。

これに対して韓国側の青年からも、その当時の思い、夜遅くまで片づけをしていたために朝起きられなかったなどの意見が伝えられた。

続いて周囲のスタッフたちも思いを語った。今回の日韓聖公会青年セミナーは、日本側ではセミナーとして捉えられていたのに対し、韓国側では「キャンプ」ととらえられていた。韓国側の青年もキャンプとして、「交流」を重視していた。日本側の青年は「学び」を重視していた。あらかじめプログラムの意図を明確に伝えていなかったこと、セミナーそのものの趣旨が食い違っていたなど、スタッフからも反省と責任の言葉が伝えられた。

長時間にわたる話し合いを経て、総括を全員で行った。交流会については、夜遅くまで続けるのではなく、一度時間を区切り全員で片づけをして、そこから続ける参加者は続けるという形をとるべきであったという結論がだされた。全体としてセミナーの趣旨をしっかりと共有すべきであったことなどが課題として確認され、来年に向けた方針作りなどに生かしていくことが話し合われた。

話し合いの間には、互いの辛辣な指摘や、時には心無い言葉も発せられ傷ついてしまうこともあった。ただ、これらの苦しい作業を経ることにより、青年たちは自分たちの体で葛藤を感じ、その解決がいかに困難であるか、

しかしかに重要なことであるかをしっかりと経験として学び心に刻んだことと思われる。そして長い話し合いのあとは、熱いソウルの夜、屋外にて夜が白むまで飲み語り明かし、最後に絆を深めていた。

▼6日目(8月17日)▼

この日は早朝7時半より閉会礼拝を兼ねた聖餐式を行った。みな2時間ほど前まで大いに盛り上がっていたため、寝ぼけ眼であったが、このセミナーに集えたことに深く感謝し聖餐式を捧げた。そして全員で「和解」の集合写真にこやかに収まりセミナーは幕を閉じた(写真21)。



写真 21

2)事前準備会プログラム

2009年日韓聖公会青年セミナー準備会

7月24・25日

於中部教区教区センター

○参加メンバー

キャンパー：井上瑠美 荻野直人 川村マリ 高木謙一郎 西川亘 山田拓路 和田岳 ス
タッフ：野村潔 武藤謙一 丁胤植 金善姫 矢萩新一 浮田倫太郎
準備会：池住圭 早川成 佐藤遼 眞子義人

目次

0. 日程表

1. プログラムⅠ

- 1) 自己紹介・志望動機
- 2) プログラム説明

2. プログラムⅡ

～“日韓の葛藤”についての話し合い～

3. プログラムⅢ

～続 “日韓の葛藤”についての話し合い～
在日問題 DVD 鑑賞

4. プログラム番外編

夜の交流会

5. プログラムⅣ

～池住義憲氏「武装・非武装ワークショップ」～

0. 日程表

7月24日(金)

- 16:00 受付開始 (中部教区センター 2F 会議室)
- 17:00 プログラムⅠ 自己紹介/オリエンテーション/わかちあい
(日本聖公会の戦争責任/日韓交流/憲法9条についてなど)
- 19:00 夕食
- 20:00 プログラムⅡ (プログラムⅠの続き)
- 21:30 就寝前の祈り (名古屋学生青年センターにて宿泊)
- プログラムⅢ 交流会

7月25日(土)

- 8:00 朝食/中部教区センターに移動/朝の祈り
- 9:30 プログラムⅣ 平和のためのワークショップ
(ファシリテータ:池住義憲氏 立教大学キリスト教学研究科特任教授)
- 12:00 昼食
- 13:30 プログラムⅤ (プログラムⅣの続き)
- 15:00 解散

1. プログラムⅠ

- 1) 自己紹介・志望動機 (割愛)
- 2) プログラム説明【資料1～3】

2. プログラムⅡ

～“日韓の葛藤”についての話し合い～

はじめに)

“日韓の葛藤 (conflict)”とは、2009 年度日韓聖公会青年セミナー第 5 日目の「平和プログラム」での日韓双方の発題のテーマとして選ばれたものです。日韓両国の間にある「葛藤」を発題、各国 30 分 (含通訳時間) の発表としてまとめるものです。

この発題「葛藤」とはどのようなものか? 何が葛藤なのか? 葛藤はどこからくるのか? どのようにして克服するのか? —これらのことについて、青年参加者のみで1時間強の話し合い・分かち合いの時間をもちました。(以下記録)

- 1) 葛藤—どういった葛藤なのか?
 - i) 日本と韓国の葛藤…戦後処理問題・補償問題をうやむや、あいまいにしたままで、目先の経済的発展のための協調関係のみを強調していくところ。
→それでよいのか、という“葛藤”
 - ii) 日韓関係—好転? 悪化? —韓国の歴史教科書の内容…韓国青年はどのような歴史教育を受けてきたのか?
→このような疑問が多々ある…

→一人一人が思っていること、知りたいこと、感じていること、韓国のいろいろなことの疑問について、それぞれに発言してわかちあっていこう。

- ・ <歴史> — 韓国の歴史…「従軍慰安婦」／済州島／朝鮮戦争…挙げきれない課題…
- ・ <現代> — 徴兵制…肯定する韓国青年も ⇔ 日本は9条もっている。

∴徴兵制は肯定できない。

しかし、日本も軍隊(自衛隊)をもっている。

現実には、いつでも攻め込める準備がある = 韓国をはじめアジアの脅威ではないか？

→日本が周辺国に対して信頼してもらえるような国になるためには？

— 「9条をもってください」アピール = 世界に9条をひろめる。

※しかしながら、日本はまだ、9条を広めるスタート地点に立っていないのではないか？

— 第二次世界大戦の精算もしていないのに…日本人としてどうなのか？

→私たちの立場を明確にする必要があるのでは？

= 何をどのように考えていくのか、ということ。

2) 日韓関係は平和か？

— 青年は案外気楽なのでは？…平和的…、文化先行…、過去のことはとりあえずおいておいて楽しむ…⇔これでいいの？ = 葛藤？

…「日韓は平和か？」の前に、「平和とは何か？」というものをもう一度確かめる必要。

3) 平和とは何か？—

①お互いを知り、理解している、痛みを知っている、わかちあっている、信頼関係

…平和とは個人個人ではじまるものなのでは？—隣人から平和を = ピースメーカー

しかし、個人レベルでの平和が、国家レベルの平和にはつながっていない。

→国家は国民 = 個人の集合体なのに…なぜ？ (葛藤？)

→日本という国家レベルでの平和を実現できていない、ということは、国民(日本人)一人ひとりが国政を通じてその責任を負っているのではないだろうか？

極言すれば、日本国内の国民としての個人は、国家規模での平和の実現、ひいては真に個人レベルでの平和を作っていないのではないか？

②「配慮・理解・愛」—韓国のアーティストの言葉

もとは人とのつながり、付き合いに対する言葉だが、これが平和につながっていくのではないか？

4) 平和をつくるために—

・「相手を理解」→そのためには「自分の歴史、自分のことをしっかり知る必要」あり。

Ex)人を愛するのに、自分自身のことを愛せていないと…

→「お互いを分かり合う意識を消す！」 = 「自分にとことん向き合う」

→自分を知った上で、相手に向き合う

(但、自分を知るきっかけは「相手がいる」からなのでは？—葛藤？)

—現在の日韓の平和に立ち戻って—

ややもすれば、文化的側面、「うわべ」の付き合いとして仲良くなっている…

しかし、平和が“理解すること”だとすれば、高校時代の友人との付き合いのような関係が必要なのでは？

—つまり「相手のよいところも悪いところも、全て認めて受入て、その上で付き合いしていく」という関係性の構築—

…相手の良いところを認め尊び、自らの悪いところを認める。

————— 夕食休憩 —————

3. プログラムⅢ ～続 “日韓の葛藤” についての話し合い～ 在日問題 DVD 鑑賞

1) ～続 “日韓の葛藤” についての話し合い～

プログラムⅡでの内容を口頭にて報告+意見陳述—(全体会)

○質疑・意見—

- ・韓国には「憎みはしないけど、忘れない」というスローガンがある。相手を理解するということは大切。過去の責任を曖昧にしてはいけない。憎むことではなく、その事実を決して忘れない、という思いが、韓国人の中にずっとある。
- ・日本からも、日韓青年でお互い考えさせられるような問題を提起してほしい。
- ・初参加と複数回参加の人の思い、葛藤の度合いというものは違うだろう
- ・日本の国民は、「葛藤」という感覚は抱いていない人が多い
→むしろ、「(韓国の人が)こだわりすぎ」という思いさえ浮かぶ→こだわらず交流できれば仲良くなれるのでは？
⇔ 韓国の人が聞くと、怒りがこみあげてくる。「何たること!」「そんな問題じゃない!」「しっかりと向き合え、考えろ!」となる。
「葛藤」すら抱かない問題意識の無さ、ということが大きな問題
- ・「知る」と「わかる」の違い…
韓国の歴史は知っている。でも、…「わかっている」?
頭の中で「知る」ことと、相手を前にして「わかる」こと…それが交流する意味では?

2) 「朝日放送 報道特集 昭和 56 年」DVD 鑑賞

3000 本安打を達成した張本勲氏は、在日朝鮮人である。朝日放送は張本選手を迎え、人権特番を組んだ。放送後、四児を抱える日本人の母親から手紙が届いた。「仕事をしたくても働き口のない日本人がたくさんいる。苦しいのは在日の人々だけではない。それなのに張本選手は、大企業の門戸を在日に開け、などという。なんということをするのか。思い上がるのもいい加減にしろ」

このような手紙をうけ、朝日放送は事の重さを認識、翌週にさらに報道特集を組み、関西を中心とした在日朝鮮人の人々のおかれている状況、強制連行など、日帝時代に積み重ねられた諸事実の検証を番組内で行なった。そこには、戦後 36 年経ってなお、鮮明に差別の構造が浮かび上がる地域社会内部の状況が描き出されている。実際に強制連行を指示した人物へのインタビューまでも収録されており、貴重な番組であった。それに加え、この番組は在日朝鮮人の人々の思いを、ストレートに日本の国民に伝えねばならない、という使命をも感じる特番であったといえる。綿密な取材とドキュメンタリー性を引き出した構成は、20 年以上前の日本の在日問題を、深くと考えさせられるものとなっていた。

4. プログラム番外編～ 夜の交流会

全プログラム終了後、お酒を片手に永らく語り合いました。いろいろな話をし、大いに盛り上がりました。このテンションを韓国に持ち込みたいものです。途中、和田岳くん 3 時過ぎに登場! その後も朝まで様々な社会問題、経済の問題、政治の問題、興味関心の赴くままに有意義な話しあいをすることができました。韓国の青年との交流も今から楽しみです。

5. プログラムⅣ

～池住義憲氏「武装・非武装ワークショップ」～

1) 日韓関係基礎知識チェック

Q1: 朝鮮半島の民族分断、その「きっかけ」を作った国はどこ？

A1: 一この答えは「これ」というものはない。各人の歴史認識の問題。何が大事、とみるか。【資料4】参考。

Q2: “北朝鮮”という呼称を金正日政権が頑なに嫌う理由は？

A2: 一「北朝鮮」というのは、朝鮮半島の南半分すなわち大韓民国を中心として、「その北半分」という意味での呼称。国名呼称ではなく、地理的呼称。大韓民国は金大中大統領の頃から、「朝鮮民主主義人民共和国」と呼んできたが、最近では「北韓」という「北朝鮮」に似た呼称を使用している。アメリカは“North Korea”“South Korea”と呼んでいるが、これに対して金正日政権は特に非難していない。おそらくは、朝鮮半島の両国をともに「地理的呼称」で平等に示していることによるものだろう。ちなみに、国連では DPRK (= Democratic People Republic of Korea) と表記している。日本語で「朝鮮民主主義人民共和国」とした場合、字数が多く新聞などでも苦勞するが、それを完全に英訳した DPRK が最も適した呼称ではないだろうか。

Q3: アメリカと DPRK は _____ 状態

A3: 一休戦状態

2) 世界で核兵器を保有する国は？

アメリカ ロシア 中国 フランス イギリス インド パキスタン イラン DPRK
計 9 カ国

NPT = 核不拡散防止条約(1972)制定後、4 カ国増加

3) 歴史に対して責任を負うということ一

- ・歴史の捉え方は人それぞれ。知識を得て、現地に立つことで、想像をする
- ・歴史は人間一人ひとりが起こした事実の積み重ね = 社会・世界の歴史
- ・一人ひとりの個人の視点を大切に
- ・長崎一被爆体験・戦争体験を話せる人が少なくなる一危機感を覚える。どこから、どのように学ぼうか。60年前の経験を聞き、どのように学び、どのようなことを受け止めるか。60年前に起こった出来事を自分のこととしてどう受け止めるか。
- ・歴史に対する責任一負わねばならない
- ・過去に起こったことの継続性を自己の中に取り入れた、自己の現在の問題を克服する

4) 憲法改案一

2008年5月 国民投票法 成立 = 衆参両議院に「憲法審査会」設置の予定

⇔ 成立せず

2010年5月 国民投票法 施行 = “改正案”の提出が可能となる

5) 武装 V.S. 非武装

(軍事) (非軍事)

- Q1 「理想的」なのはどっち？
- Q2 「現実的」なのはどっち？
- Q3 攻撃される「可能性」はどちらが高い？【資料 5】参照
- Q4 攻撃された際、被害が「甚大」なのはどっち？
- Q5 お金が多くかかるのはどっち？
- Q6 さて、もう一度本当に「現実的」なのはどっち？
- Q7 あなたの人生、どっちに賭けますか？？？？

「非武装なんて無責任だ」と言われたらどうすればよいだろう？

－仕方がない－でも、責められて被害が大きくなる可能性は「武装」の方が明らかに高い。逆に、「武装する」ことは、勝たないと意味がない。相手の武装が強大で負けてしまったらどうするのか？それこそ無責任だ。(池住氏)

6) 平和を妨げるもの

貧困／欲望／戦争／軍需産業／自然災害／過去の恨み／無関心／人間／資本主義／社会主義／愛国心／差別／プライド／不安／武器／核兵器／お金

Q 時間がかかっても、私たちが力を合わせれば「解決できる！」「廃絶できる」と、私が思うものを「×」で消す。(以下のうちで)

貧困／戦争／軍需産業／過去の恨み／無関心／資本主義／社会主義／差別／核兵器

→「私が思う」が大切＝内心の自由

自分がどう考えるか→自分の関わり方・取り組み方が変わってくる→生き方が変わる

- ・ある問題についてさまざまに勉強し、膨大な知識を集めても、その問題を本気で亡くす、なくなる、と思っていないと、そこで終わる。解説・評論の域にとどまるだけでは何も解決できない。内心の自由をもち、問題を無くせると思う気持ちをしっかりと持ってほしい。その気持ちをもって行動することで変わっていく。

ジョナサン・シエル『時代の贈り物—核兵器廃絶を今こそ』1997.

(英文名：The Gift of Time)

関連資料【資料 6】

日韓青年キャンプ 日程表

時間	華川(ファアジョン)	華川	華川	ソウル	ソウル	ソウル
	8月 13日(木)	8月 14日(金)	8月 15日(土)	8月 16日(日)	8月 17日(月)	8月 18日(火)
7	日韓青年が共に準備する朝の礼拝					
8	朝食					
9	朝食					
10	日韓の青年たちは華川(ファアジョン)に集まる。	船に乗って平和のダムへ	平和教育(1)	華川→ソウル	平和教育(3)	
11				聖餐式 (ソウル大聖堂)	閉会聖餐式 感想の分かち合い	
12		昼食				
1	青年キャンプ開会聖餐式及び自己紹介	トラッキング	平和教育(2)	自由時間 (ソウル観光)		帰省
2				夕食		
3		農村体験		平和のための誓い及び平和象徴物作り		
4	夕食					
5	映画上映及びグループ集い	キャンプファイアー及び 交わりの時間	自由時間			
6	オリエンテーション	グループ集い	自由時間			
7	自由時間					
8	自由時間					
9	自由時間					

1. 動く平和学校平和訓練ワークショップ

動く平和学校は円く座ってグループで行う創造的で独特な学びの形です。これは話して聞いて、考えを分かち合い、アイデアを探求して互いに影響を与え合うところに、情緒的に安全で、信頼して非難しない環境を創造する。これを通して自己肯定と確信、そしてケアを学ぶ共同体を形成し、情緒的、社会的そして個々の発達に役に立つ平和の感受性を新たに蘇らせる。

この学びは癒しそのものためのプログラムではなく気づきのスキルを慣らせるようになる。何かの問題に直面したり分析する教育方式ではなく、参加者たちの経験のなかにある情緒的発展とケアを実施する。

- 自分を理解して自分の個性を表現する。
- 他者を理解して他者についての洞察、認識そして感性を増進させる。
- 他者との友情と価値を尊重する。
- 同僚の圧力に抵抗して不和を扱う。
- 協力、分かち合い、効果ある疎通のような社会的奇術を増進させる。
- 代案的な解決と決定を追求する。
- 変化と難しいことに対処する。
- 葛藤解決と問題解決戦略を発展させる。
- 充満な人生を味わう。
- 楽しさを感じて、肯定を受けて、良い感じの要素を注入する。

		主題	主要活動内容
午前	SEC1	OT	紹介 参加者案内 -互いに知り合い、グループ規則同義、期待確認
오전	SEC1	意思疎通	傾聴と非傾聴 共感的対話
오전	休憩		楽しく面白い休憩
오전	SEC2	葛藤理解 葛藤解決	葛藤観察/葛藤は世界に広まらせる
昼食			
午後	SEC3	暴力/非暴力	平和感受性 共同体訓練 1
오후	休憩		楽しく面白い休憩
오후	SEC4	平和共同体 形成 1	平和感受性 共同体訓練 2
오후	SEC5	平和共同体 形成 2	平和感受性 共同体訓練 3
오후	評価と省察		進行/参与/感じたことについて全体的な分かち合いと省察

2. 日韓歴史葛藤とピース・ビルディング：挑戦の克服と共同ビジョンを建てる

紹介と挨拶

- 参加者と講師紹介
- ワークショップ内容、目的、進行 紹介

ミニ講義 1：葛藤とピース・ビルディング

- 平和葛藤研究の視覚から日韓の葛藤分析
- ピース・ビルディングの脈絡からの日韓葛藤接近
- 挑戦的、創意的接近の必要性

発題 1 (日本側)：50分 (通訳と討論含/発題は通訳含めて30分)

- 日韓葛藤の原因と内容 (一般的な視覚)
- 質疑&応答と短い討論

発題 2 (韓国側)：50分(通訳と討論含/発題は通訳含めて30分)

- 日韓葛藤の原因と内容 (一般的な視覚)
- 質疑&応答と短い討論

小グループ活動と発表

- 韓国と日本の認識の類似点相違点
- 何が問題なのか?
- 葛藤解決とピース・ビルディングの資源として使える点はあるか?

ミニ講義 2：ピース・ビルディングのためのネットワーク作り

- ピース・ビルディングネットワーク形成の必要性
- 社会 人的資源把握
- 時間構造と対応領域把握 (time frame & response areas)

小グループ活動：ピース・ビルディングの潜在資源把握

- 日韓文化の類似点把握
- 日韓交流の事例把握
- 日韓共同活動把握 (市民団体またはその他の領域から)

ミニ講義 3：自分を知って相手を知る

- アイデンティティと世界観の差を知ろう
- コミュニケーション訓練
- 差を乗り越えるための話のわく作り (framing)

小グループ活動と発表：対話のための話のわくを開発する

全体活動と討論：ビジョン作り

- 5年後と10年後、願っている姿を描く
- ビジョン成就のための個人、社会、国家 次元で出来ること

ミニ講義 4：私たちの前に置かれた過去と 200年の人生

評価と挨拶

朝鮮半島をめぐる過去99年の歴史的経緯 (南北分断の歴史的経緯)

メモ

I. 韓国併合(1910年8月)～第二次世界大戦(1945年8月)

朝鮮半島の状態⇒以後35年間にわたって日本が植民地支配・統治

II. 第二次世界大戦(1939年～1945年8月)

この間の朝鮮半島の状態は:

北緯38度線以北(現在のDPRK)は⇒「関東軍」が防衛分担!

北緯38度線以南(現在の韓国)は→「大本営」が防衛分担!

(防衛分担線)

III. ヤルタ会談(1945年2月)

米英ソ首脳が集まって戦後の世界の枠組みをつくるための駆け引きを行い、米ソは極東密約をかわす。その内容は:

- ・ 米国がソ連に参戦をもちかける。参戦すれば戦争終結後「樺太、サハリン、満州をソ連に譲ることを合意(→「北方領土問題」)
- ・ 日本降伏後朝鮮半島に独立を与えるが、しばらくの間、米ソを中心とする連合軍の信託統治とすることを確認・合意

IV. 戦後の米ソによる分割占領(1945年8月～1948年8月)

日本の無条件降伏後、米ソは:

- ・ 暫定的に北緯38度線を米ソの「分割占領線」とすることを決定
- ・ 38度線以北をソ連、以南を米国が分割占領

V. 韓国およびDPRKの独立/建国(1948年8～9月)

1948年8月15日国連臨時朝鮮委員会監督下で南だけの総選挙が実施され、大韓民国(韓国)独立

1948年9月9日ソ連指導下で朝鮮民主主義人民共和国(DPRK)建国

VI. 朝鮮戦争(1950年6月～1953年7月)

〈朝鮮戦争が始まる前の世界の動き〉

【資料4-②】

1949年8月 ソ連が原爆実験に成功!(米国の一方的優位が崩れる)

1949年10月 中華人民共和国(中国)が成立。ソ連、インドがすぐに承認

1950年2月 中ソ同盟(共産主義陣営)

<朝鮮戦争の経緯概略>

- 1950年6月 DPRK、ソ連と中国から開戦支持をとりつけソ連製戦車で南下
- 1950年6月 米国が国連軍の名の下に介入し、仁川上陸作戦開始
- 1950年11月 中国人民志願軍が全面介入し戦争が長期化
- 1953年9月 DPRK・中国・米国の3国間で「休戦協定」調印

<この休戦協定で>

- ・北緯38度線と斜めに交わる「軍事境界線（休戦ライン）」を設定。全長約250キロ。両側に約2キロの幅で非武装地帯を設ける。
- ・これが今日の南北の「国境線」になり、朝鮮半島の南北分断を固定化…

<朝鮮戦争が日本にもたらした/及ぼした影響>

- ①日本の戦後経済復興にはずみをつけた(朝鮮特需!)
- ②日米韓の安保体制を強めた(1951年9の日米安全保障条約の締結、日本と韓国における米軍基地の固定化、など)
- ③日本の軍備増強を進めるバネになった(1954年6月、防衛庁と自衛隊発足)

VII. 日韓基本条約(1965年6月)

1965年の日韓条約で日本は韓国を「朝鮮半島にある唯一の合法的な政府」とみなし、朝鮮半島北半分の人々の存在を否定。日本はDPRKを国家として認めていない(国交がない)。日本はこの条約を結んだことによって:

- ①米国による朝鮮分断(南北分断)の固定化に足を踏み込み、
- ②経済的に韓国の支配層をバックアップする役割を受け持った。賠償の名の下で行った約5億ドルの経済援助はその後の日本の資本が韓国に入っていく"呼び水"になった。

VIII. 南北基本合意書(1992年)

1991年12月、第5回南北首脳会談で合意書を採択。92年2月に発効。この合意書のなかで、南北関係は「国と国との関係ではなく、統一を志向する過程で暫定的に形成される特殊な関係」と規定。境界線は国境でなく、休戦ラインにすぎないことを再確認。

IX. 日朝平壤宣言(2002年9月)

2002年9月17日、小泉首相(当時)とDPRKの金日正書記が平壤で会談し、署名。

- ①日朝国交正常化交渉再開、②日本の過去の植民地支配に対しておわびの気持ち表明
- ③国交正常化後の経済協力実施、④日本植民地支配下での財産請求権を相互に放棄、
- ⑤生命と安全に関わる懸案問題の再発防措置、などを確認

以上

「非武装国家」リスト

2008年5月16日

池住義憲

<欧州>

- 1)アイスランド共和国(人口27万人、1944年独立、NATO加盟、米軍基地有り)
- 2)ルクセンブルグ(人口42万人、1815年独立、志願NATO軍兵士はいるが国軍はない)
- 3)アンドラ(人口72,000人、1278年独立以降非軍事、中立)
- 4)モナコ(人口33,000人、1297年独立、1740年より非軍事、フランスと協定)
- 5)リヒテンシュタイン(人口32,000人、1805年独立、1868年に非軍事化、中立)
- 6)サンマリノ共和国(人口26,000人、1295年独立以降非軍事、中立)
- 7)ヴァチカン市国(人口860人、1929年独立以降非軍事、中立)

<中央アメリカ>

- 8)ハイチ共和国(人口795万人、1804年独立、1995年非軍事化、米州機構加盟)
- 9)コスタリカ共和国(人口384万人、1821年独立、1949年非軍事化、米州機構加盟、中立)*
- 10)パナマ共和国(人口276万人、1903年独立、1990年非軍事化、中立)*
- 11)セントルシア(人口15万人、1979年独立以降非軍事、カリブ諸国機構加盟)
- 12)セントヴィンセントグレナディーン(人口11万人、1979年独立以降非軍事、カリブ諸国機構加盟)
- 13)グレナダ(人口93,000人、1973年独立、1983年非軍事化、カリブ諸国機構加盟)
- 14)ドミニカ共和国(人口71,000人、1978年独立、1981年非軍事化、カリブ諸国機構加盟)
- 15)セントクリストファー・ネイビス(人口43,000人、1983年独立以降非軍事、地域的安全保障他)

<アジア・太平洋諸島>

- 16)日本(人口1億2774万人、1952年独立、1946年以降"非軍事"、日米安全保障条約)*
- 17)モーリシャス共和国(人口114万人、1968年独立以降非軍事)
- 18)ソロモン諸島(人口41万人、1978年独立以降非軍事、地域的安全保障)
- 19)モルディブ共和国(人口27万人、1965年独立以降非軍事、積極的国際主義)
- 20)バヌアツ共和国(人口18万人、1980年独立以降非軍事、地域的安全保障)
- 21)サモア(人口17万人、1962年独立以降非軍事)
- 22)ミクロネシア連邦(人口11万人、1986年独立以降非軍事、米国と協定)
- 23)トンガ王国(人口98,000人、1970年独立以降非軍事)
- 24)キリバス共和国(人口94,000人、1979年独立以降非軍事)
- 25)マーシャル諸島(人口60,000人、1986年独立以降非軍事、米国と協定)
- 26)パラオ共和国(人口19,000人、1994年独立以降非軍事、米国と協定)
- 27)クック諸島(人口15,000人、1965年独立以降非軍事、ニュージーランドと協定)
- 28)ナウル共和国(人口11,000人、1968年独立以降非軍事)
- 29)ツヴァル(人口11,000人、1978年独立以降非軍事)

憲法において軍隊を保持しないと明言している国は、日本(9条、1946年～)、コスタリカ(12条、1949年～)、パナマ(310条、1994年～)の3ヶ国。

*ボリビアは2008年5月4日、「国際紛争の解決手段としての戦争を拒否」し、「いかなる外国も軍事基地の設置を禁じる」新憲法を採択する。エクアドルも2008年4月1日、「外国軍基地を国内に置くことを禁止」する新憲法草案を制憲議会が賛成多数で可決され、2008年内に国民投票にかけられる。

*スイスは、自国軍を保有しつつ中立主義を宣言して国際社会から承認された「武装中立国家」 以上

20世紀の豫言

(1) 無線電信及び電話：マールコニ氏發明の無線電信は世界諸國に聯絡して東京に在るものがロンドン、ニューヨークにある友人と自由に對話することを得べし。

(2) 遠距離の風：數十年の後歐洲の天に散霧暗濛たることあらん時、東京の新聞記者は編輯局にいなから電氣力によりて其状況を早取写真となすことを得べく、而して其写真は天然色を現象すべし。

(3) 野獸の滅亡：アフリカの原野に到るも獅子、虎、鱉魚等の野獸をみることを得ず、彼等は僅に大都會の博物館に餘命を繼ぐべし。

(4) サハラ砂漠は漸次野に化し、東半球の文明は漸々支那、日本及びアフリカに於て發達すべし。

(5) 七日間世界一周：十九世紀の末年に於て少くとも五十日間を要したり世界一周は、二十世紀末には七日間を要すれば足ることなるべく、また世界文明國の人民は男女を問はず必ず一回以上世界まん遊をなすに至らむ。

(6) 空中軍艦、空中砲臺：チエムペリン式の空中船は大に發達して空中に軍艦隊の空中に修羅場を出現すべく、從つて空中に砲台浮ぶかの奇觀を呈するに至らん。

(7) 蚊及びのみの滅亡：衛生事情進歩する結果、蚊及びのみの類は漸次滅亡すべし。

(8) 暑寒知らず：新機器發明せられ暑寒を調和するために適宜の空氣を送り出すことを得べし。アフリカの進歩も此爲なるべし。

(9) 植物と電氣：電氣力を以つて野菜を成長することを得べく、而してえんどうはだいたい大となり、菊、牡丹、バラは緑、黒等の花を開くものあるべく、北寒帯のグリーンランドに熱帯の植物生長するに至らん。

(10) 人声十里に達す：傳聲器の改良ありて、十里の遠きを隔手たる男女互にえんえんたる情話をなすことを得べし。

(11) 寫眞電話：電話口には對話者の肖像現出するの装置有るべし。

(12) 買物便法：寫眞電話によりて遠距離にある品物を鑑定し、且つ買物の契約を盡へ、其品物は地中鐵管の裝置によりて瞬時に落手することを得ん。

(13) 電氣の世界：薪炭、石灰共に尽き電氣之に代りて燃料となるべし。

(14) 鐵道の速力：十九世紀末に發明せられし葉巻煙形の機關車は大に成せられ、列車は小家庭大にてあらゆる便利を備へ、乘客をして旅中に

ある無からしむべく、ただに冬期室内を暖むるのみならず、暑中には之に冷氣を備すの装置あるべく、而して速力は通常一分時に二哩、急行ならば一時間一五〇哩以上を進行し、東京、神戸間は二時間半を要し、また今日四日半を要するニューヨーク、サンフランシスコ間は、一晝夜にて通すべし。また動力は勿論石炭を使用せざるを以て、煤煙の汚れなく、また給水の爲停車すること無かるべし。

(15) 市街鐵道：馬車、鐵道及び鋼索鐵道の存在せしとは老人の言語にのみ残り、電氣車及び圧搾空氣車も大改造を加えられて、車輪はゴム製となり、かつ文明國の大都會にては街路上を去りて、空中及び地中を走る。

(16) 鐵道の聯絡：航海の便利をさざる無きと共に、鐵道は五大州を貫通して自由に通行するを得べし。

(17) 暴風を防ぐ：氣象上の觀測進歩して天災來らんとすることは一ヶ月以前に予測するを得べく、天災中の最も恐るべき暴風嵐らんとすれば、大砲を空中に放ちて變じて雨となすを得べし。されば二十世紀の後半期に至りては難航、海しよつ等の變無かるべし。また地震の動搖は免れざるも家屋道路の建築は能く其害を免るるに適當なるべし。

(18) 人の身體：運動術及び外科手術の効によりて人の身體は六尺以上

上に達す。

(19) 醫術の進歩：藥劑の飲用は止み、電氣針を以て苦痛無く局部に藥液を注射し、また顕微鏡とエツキス光線の發達によりて病源を摘發して之に應急の治療を施すこと自由なるべし。また内科術の領分は十中八九まで外科術に移りて後には肺結核の如きも肺腹をてき出して腐敗を防ぎ、パチルスは電氣によるを以て若も苦痛を与ふること無し。

(20) 自動車の世界：馬車は廢せられ、之に代ふるに自動車は廉價に購ふことを得べく、また軍用しても自轉車及び自動車を以て馬に代ふることなるべし。從つて馬なるもの僅かに好奇者によりて飼養せらるるに至るべし。

(21) 人と獸との會話自在：獸語の研究進歩して、小學校に獸語科あり、人と大猿とは、自由に對話することを得るに至り、從つて下女男の地位は多く大によりて占められ、犬が人の使いに歩く世となるべし。

(22) 幼稚園の廢止：人智は遺傳により大に發達し、且つ家庭に無教育の人無きを以て幼稚園の用無く、男女共に大學を卒業せざれば一人前と見做されざるにいたらむ。

(23) 電氣の輸送：日本はびわ湖の水を用い、米國はナイヤガラの瀑布によりて水力電氣を起して、各々其全國内輸送することとなる。

3) セミナーで使用された礼拝式文

十A MORNINGPRAYER

- 司式者： 主よ、私たちの口を開いてください
- 会衆： 私たちは、主の誉れを現します
- 司式者： 栄光は、父と子と聖霊に
- 会衆： 初めのように、今も、世々に限りなくアーメン
- 司式者： 主をほめたたえましょう
- 会衆： 主のみ名をたたえます

詩編第95編

主に向かって喜び歌い|| 救いの岩に声を上げよう
感謝に満ちてみ前に進み|| 賛美の歌で神をたたえよう
主は偉大な神|| すべての示申にまさる王
地の深みは主のみ手に|| 山の頂もまた主のもの
海は脚のもの、主はこれを造られた|| 乾いた地も主は造られた
身を低くして伏し拝み|| 造り主、主のみ前にひざまずこう
主は私たちの神、私たちは神の民|| 私たちはその牧場の民、そのみ手の羊
栄光は、父と子と聖霊に初めのように、今も、世々に限りなくアーメン

聖書

14日;マルコによる福音書10:46-52

一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコに出ていこうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください」と言い始めた。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、私を憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは、「何をしたいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

信仰告白

私は神を信じます。神は愛であり、すべての人間にこの大地を与えられました。
私はイエス・キリストを信じます。彼は私たちを癒し、私たちをすべての抑圧から解放するために来られました。私たちは神の聖霊を信じます。それは真理に目を向けるすべての人々の中で、またそうした人々を通して働かれます。
私たちは信仰の共同体を信じます。それは全ての人々に奉仕するために生み出されました。
私は信じます。私たちの中に働く罪の力を打ち破り、公正と平和の国をすべての人間のために打ち立てられるという神の約束を。アーメン
(アジア・キリスト教協議会 インドネシアの信条)

主の祈り

●司式者：主よ、憐れみをお与えください

○会衆：キリストよ、憐れみをお与えください

●司式者：主よ、憐れみをお与えください

◎一同主の祈りを唱える

天におられる私たちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように。

私たちの日ごとの糧を今日もお与えください。

私たちの罪をおゆるしてください。私たちも人をゆるします。

私たちを誘惑におちいらせず、

悪からお救いください。

国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。アーメン

特祷

●司式者：慈しみ深い神よ、苦しみと痛みに満ちたこの世界にあなたの愛を満たしてください。私たちの過ちを正して、私たちに平和を愛する心を与え、隣人とともに歩み、悪と闘う勇気をお与えください。地上のすべてを創られた主よ、どうかこの世界に平和と和解、慰めと一致をお与えください。私たち一人一人が与えられた資源を分かち合い、地球上のすべての命を尊び、ともに生きることができるよう。主イエス。キリストによってお祈りいたします。

○一同：アーメン

4)訪問箇所の案内

(「第4回日韓聖公会青年セミナーしおり」から)

①平和ダムの紹介

金剛山の近辺を発源した北漢江が韓半島南西の方を向けて291.3kmを矢のようにかかって流れて華川破虜湖を経て春川,ガピョン,清平を抱いて八堂で南漢江と合流する。北漢江の幹に付いてこれ以上行くことができない最北端に2005年2段階建て増しし、工事を終えた。平和ダムが位置する。全長601m、高さ125m、貯水用量26億3千万トン、低幅が260mである。

大規模に軍事分界線南側9km地点に建設された。これにより漢江は全体数量の12%を失った。金剛山ダムでDMZを経て平和ダムに至る北漢江19kmの水域は水路が流れない川になった。1986年、金剛山ダムの危機に対立して建設されたが現在は水文化展示館、人工青空、憩い場などを取り揃えて安保観光客を含めた多くの観光客が訪れる場となっている。

②DMZ?

Demilitarized-zoneとは、軍事的非武装地帯を意味する。DMZは、休戦による軍事的直接衝突を防止するために相互日程間隔を維持した緩衝地帯のことを言う。したがって、非武装地帯では新たに軍隊の駐屯や武器の配置、軍事施設の設置が禁止されている。すでに設置された軍隊と関連施設は、撤収または撤去しなければならない。韓国でのDMZは、1950年～53年に進行された朝鮮戦争の停戦協定によって成立された。DMZを法的側面で見ると特定の地域に対して非武装化を宣言した国際法の措置である。それゆえにDMZ非武装地帯は国際法によって、設定される地域において、これらを見張るための機会もやっぱり国際法に基礎して創立された制度的装置だと言える。また、政治軍事的側面で見ると、現実的な戦闘行為を中止して暫定的な平和を保障することで軍事費の統制ないし、平和維持の手段と認められている。

DMZの範囲

停戦協定書には、非武装地帯に対する南界線、及び北界線の範囲と内容が区画設定されていて明示されている。これによって大韓民国のDMZは西海岸の臨津江河口で東海岸の江原道固城に至る全長248kmの軍事分界線(休戦線)を設定している。軍事分界線を中心に南北にそれぞれ2kmを指定して4kmの空間を置いて軍隊の駐屯や武器の配置を禁止するようにした区域を言う。

DMZの意義

DMZの設置と民間である出入りの統制と規制によって、50年余りの間DMZと民統線北方地域に自然生態系がまた回復して貴重な生態資源をおさめることができるようになった。この結果、接近地域は国内だけではなく世界的な自然生態系の報告がなされるほど、生態的価値が高い地域で高く評価を受けている。このような生態系を継続するだけでなく、世界で唯一の分断の象徴的事物としての安定的価値によって全世界的な関心地域になっている。また、歴史において、渡来から始まる南北交流協力の本格化時代、ひいては南北統一の時代を考慮して見ると、この地域は南北統一の前進基地、生態系の宝庫、そして観光と歴史の教育の場に活用されることが出来る機会の地となっている。

5) ソウル市内グルーブ行動計画

(「第4回日韓聖公会青年セミナーしおり」から)

※韓国青年作成の資料です

A“南山韓屋村&南山Nソウルタワー”

南山韓屋村文化体験日程表

時刻	場所	16日
14:00-14:50	ユン氏家屋	農楽講習
	泉雨閣	タル踊り講習
	バクヨンホ家屋	礼儀講習
15:00-16:00	泉雨閣舞台	ドンレヤユ
16:00-16:50	ユン氏家屋	農楽講習】
	泉雨閣	タル踊り講習
	バクヨンホ家屋	礼儀講習
17:00-17:40	泉雨閣舞台	フュージョン音楽
17:50-18:20		十八技試補
19:00-20:00		チヤン劇白雪姫
11:00-18:00		共同庭
	バクヨンホ家屋	光復節 (テグキ古の姿展 テグキにドット描き)
	ユンテックヤング齋室	伝統韓服体験
	キムチュンヨン家屋	生活文化体験、食べ物 (スンツブ、ジャガイモ蒸し)

行き方:地下鉄3,4号線 忠武路駅\3番出口から徒歩10分

ペ・ヨンジュンが主演した<スキャンダラー-朝鮮男女相熟之史>の撮影地でも有名だ。ゾ・ウォン(ペ・ヨンジュン)の“あなたが私を愛した瞬間、私の愛が変わった”というせりふでスック夫人(チョン・ドヨン)の心を傷付けた場面を撮影した。

そして道は編身首(大工のリーダ)イ・スンオップの身分が高くないのだが当時最高の大工が建てた自分の家というところが面白いのだ。派手ではなくても地味な美しさが目につく。今は‘ダサホン’という伝統茶屋に使われていて軽く伝統の食べ物とお茶一杯を楽しむことができる。

ユン・テック・ヤング齋室も珍しい元字形の韓屋だから人目を引く。何より北村と比べると家の中の内部をくまなく見られるというところが魅力。五つの韓屋すべてを展示空間に再現して昔の韓屋の日常を詳しく見られる。

多様な行事と体験プログラムも南山韓屋村だけのメリットだ。韓屋村の広い庭ではゼギ蹴り、ユンノリ、投壺のような伝統の遊びが起る。大人には幼い時の郷愁を思い出して子供達には韓国の伝統の遊びの楽しさを教える。外国人にも結構面白いものだ。恋人と一緒にタイムカプセル広場の上側にある望北模でソウルの景色を見ながら愛をささやいてもよからう。ナムサンゴール韓屋村の古めかしいスカイラウンジだ。

南山Nソウルタワー

利用時刻	展望台:10:00-23:00 テデイバミュージアム:10:00-22:00
利用料金	7,000ウォン
行き方	忠武路駅2番出口で02番バス乗車後、ソウルタワー下車

Nソウルタワーの入口に立てば一番先に目に入って来るのはかなり大きいN字ロゴ。

南山(namsan)のNと共にNew Natureの意味も持っている。南山という自然の壊に発展するソウルの新しい風景を表現しようとしたようだ。フェンスにかかっている南山タワーの新しい指折りの名所だ。恋人たちはそれぞれの希望を盛り込んで南山タワー周辺のフェンスに錠をかけたりする。特に新しく生まれたNソウルタワーのハイライトは夜間照明ショー。毎日午後7時から夜12時までタワー全身は毎時ごとに他の色で光る。

「ソウルの花」というテーマで花が咲く姿を光で形象化したこと。タワー全体を送信塔、展望台、全身、プラザ層など四つの区間で分けてそれぞれに他の光で演出されて、季節とによって刻々と光の色とパターンも変わる。タワーだけではなくタワー周辺あちこちで派手な照明を楽しむことができる。ルーフテラスにある光のシャワーではシャワー取っ手を回して自分が好きな色を演出して「写真を撮ることができる。世の中の美しい光をすべて集めておいたと言っても過言ではないほどにNソウルタワーの夜は昼より華麗だ。エレベーターに乗って展望台1階(T1)に上がれば韓国伝統の料理とソウルの全景を見られる韓食ファミリーレストラン「ハンクック」が出る。

外国人とNソウルタワーを訪問したら「ハンクック」で韓国の味をもてなすこともよさそう。

展望台の2階(T2)、スカイカフェーではお茶とデザートを楽しむことができるしソウル各名所がガラスに表示された「ウィンドーガイド」はまたもう一つの楽しみだ。デジタル展望台と呼ばれる展望台3階では32台のLCDモニターを通じてソウルの600年の歴史といっしょに360度パノラマで開かれるソウルの景色を鑑賞することができる。展望台頂上(T5)階には回転レストラン「N Grill」がある。

B “景福宮&仁寺洞コース”

スケジュール

時間	場所	活動
11:00—1:30	大聖堂	聖餐式⇒昼御飯
1:30—2:00	景福宮の前	歩いて景福宮まで移動(2時まで集合)
2:00—3:30	景福宮	守門將交代式翻覧,景福宮勸覧
3:30—4:00	景福宮駅	景福宮駅にあるギャラリーを観る⇒仁寺洞へ移動(4時集合)
4:00—6:00	仁寺洞	仁寺洞翻光
6:00—7:00	韓国伝統料理食堂	夕食
7:00—7:15	明洞	LOTTEデパートの前(7時15分まで集合)
7:15—10:00	明洞	ショッピング
10:00	明洞駅	明洞駅(10時まで集合)

景福宮（キョンボックン）

600年の歴史をそのままに伝える李朝時代の正宮・景福宮!ソウル市内の宮殿でナンバーワン!ソウル市内にある5大王宮の中でも最も規模が大きく、また建築美に優れた宮殿と評価されるこの景福宮は、1392年に「李氏朝鮮王朝」を建国した李成桂(太祖)が造営した王宮として1935年に完成しました。1592年壬辰倭乱(文禄・慶長の役)により消失し、現在の建物は1867年に再建されたものであります。また景福宮内には勤政殿(クンジョンジョン)、慶会楼(キョンフェル)、慈慶殿(チャギョンジョン)、慈慶殿峨眉山煙突(シッチャンセンクルットツ)、交泰殿峨眉山煙突(キョテジョン・アミサンクルットツ)、勤政門(クンジョンムン)と行閣(ヘンガッ)、風旗台(プンギデ)、敬天寺跡十重石塔(キョンチョンサジ・シッチュンソッタツ)、法泉寺智光國師の玄妙塔(ポンチョンサ・ジグァングッサ・ヒョンモタツ)などなど数多くの文化財(国宝7点、宝物一國室と重要文化財の間11点)があります。また敷地内には国立古宮博物館と国立民俗博物館もあり、ソウルに来たら必ず行っておきたい場所ナンバーワン!

仁寺洞（インサドン）

骨董品や画廊、茶道具店、韓国茶専門の喫茶店、木工・金属・漆器・紙工芸品店など、古き良き香りに満ちた通りです。ショーウィンドウには、大小の筆がびっしり並んでいたり、民画や文官・武官の衣装に付けた文様の絵が飾ってあったり、思わず一軒一軒覗いてみたくなります。古美術品は国外持ち出し禁止のものも多いので注意してください。また、昔のデザインをそのままに作った工芸品もあります。古いものや細工の込んだものは高価ですが、おみやげにぴったりな小物も揃っています。

明洞（ミョンドン）

明洞は、ソウルの中心地にあって、ソウルの銀座と呼ばれています。周囲には、南大門市場をはじめロッテ・新世界といった百貨店が集中する最高のショッピングロケーション。ソウルの魅力がぎっしり詰まったソウルの繁華街明洞はいつも人であふれています。明洞には、一流ブランドのブティックからカジュアルなデザイナーブティック・カバン・アクセサリー・流入衣類・スポーツ用品専門店・化粧品ディスカウントショップといった様なファッション店舗がひしめいています。

6) 感想文

日韓青年セミナーに参加して

日本聖公会横浜教区
伊藤久実

終えてみると日々プログラムに追われるような感じで、あっという間に最終日を迎えたという印象です。

実際のプログラムと、事前に思い描いていたものとはいろいろ違いがありましたが、今回初めての参加で、準備会にも参加出来ずにいたので、毎年このようなものなのだろうとギャップに対してはあまり気にしていませんでした。逆に、最終日の夜に日韓でセミナー（キャンプ）の認識が異なっていると気づいた時は驚きました。

韓国側から言われたことで、個人的に反省したことは「交流する気があるのか」「お客様のようだ」という点です。正直今回のセミナー参加の動機は、DMZのトレッキングに興味を持ったからです。韓国と日本の関係は考えていかなければならないと思いつつも、私の中では過去の過ちに対する責任をどう捉えるかということで、過去にとどまって物事を考えようとしていたようです。韓国という国・特に今の韓国に対しての興味はさほど無かっただけに、気まぐれに参加してしまったとセミナー中に反省することもありました。言葉に関しては、韓国の青年たちに感謝しています。皆一生懸命日本語を話してくれようとしていました。また、ふたを開けて見たら予想外に参加者が若かったということで、積極的に交流することを諦めてしまったところもあります。韓国だけではなく、今回が初めてだからという理由で日本側の準備等もすべてお任せしてしまった点など、私自身が一貫して「お客様」でした。

今回「平和を作りあげる」方法など、ワークショップや講義で学びました。一日や二日ではなかなか消化することが出来ませんでした。時間が経って少しずつ理解できて来ました。いくら大きな問題（国レベルのこと）を解決のしようと思いつけようとしても、些細な葛藤がさらに生み出されていってはいつまでたっても平和な状態にはならない。最後の最後に韓国からあのような意見がでたの

は、双方にとって良かったと思います。

今回の一件で、次回からは片方（の国）に負荷がかからないように改善されることを期待します。焦らないで、ゆっくりと少しずつ解決していけたらと思います。

最後に、先にも述べたように「お客様」のような参加の仕方をしてしまい、皆さんには本当にお世話になりました。教区から出たことがなかったので、他の教区の人たちと一緒にできて良かったです。ありがとうございました。スタッフ・教役者の先生がたにも大変お世話になりました。お礼申し上げます。



青年セミナーに参加して

日本聖公会中部教区
伊藤友里

昨年沖縄青年大会に参加してから「平和」について大きな問題を軸にして考えるようになり、今回の日韓セミナーも引き続き「平和」というテーマを日本と韓国の両国間における問題を中心にして考えられる機会と思い参加に至りました。平和のダム、ベルパークそしてDMZの訪問では、朝鮮戦争によって南北と分断してしまった民族の悲しみや、日本の戦争に対する責任の重さを感じたように思います。しかし、今回はこれらがメインという

日韓聖公会青年セミナー

日本聖公会中部教区
西川 亘

わけではありませんでした。個人レベルでの「平和」について考える取り組みや学習が主であったと思います。その場では、何とかその状況を理解することに必死で、一体これらが何を意味するのか、何に関係するのかなどは全く分からないまま作業を進め、結局最後の最後まで分からなかったというのが正直な感想でした。

けれども、韓国から戻ってきて私自身の中でわずかながらにも少しの変化がありました。それは、以前よりも相手を理解しようとする強い気持ちの変化であります。今までも相手を理解しようとする気持ちは常にありましたが、実際は自分を中心にして理解をしようとするため、少しでも自分との利害が一致しないことがあれば相手を不審に思い誹謗中傷をしてしまうなど、または何も出来なくストレスを溜めこんでしまう傾向がありました。まず、相手と私は異なり、考え方も受け止め方も異なる。それらが分かったうえで話し合うことが何より重要であることに改めて気付かされました。そのようになると、相手が話す一言ひとことを正確に整理し処理することが、一番確実な相手への理解だと私は考えます。

セミナーのどの活動がこうした学びを導き出したとは言えなく、セミナー全体の活動を通しての学びだと私は思います。

大きな問題から「平和」を考えることも大切ですが、最終的には個々人同士の「平和」が問題であり大切であると実感できたセミナーだったと思います。



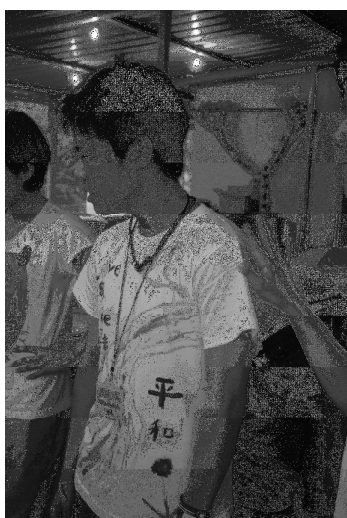
今回のセミナーで私が一番驚いたのは、韓国の青年たちが日本語を理解している度合いが、私の想像以上だったからだ。日本語を選択し、勉強をしている青年もいて、私たち日本の参加者と会話することができた。日本語を話すことはできないが、ある程度理解できるという青年もいた。そのおかげで我々日本側の参加者は、主に日本語でコミュニケーションをとることが出来た。私にとって一番不安であったのは、韓国の青年たちとの交流であったため、これで少しずつ慣れていくことが出来たのである。

このセミナーに参加する前、韓国に対して特別に興味を持っていなかった。それどころか事前準備会で、日韓の歴史などについても初めて知るようなことばかりだった。そこで、改めて自分が韓国についての接点が全くなく生きてきたのだという事実を痛感し、この事が韓国へ行くという決意を一層固めることになった。

セミナーが始まってから数日は、初めてで感覚掴めない事もあり、積極的に韓国の青年たちに歩みよっていけなかった。それでも、韓国の青年たちはとてもやさしく、積極的に歩みよって接してくれた。例えば日本語がわからなくても英語やノンバーバルな動きで気持ちを伝えようとしてくれた。そのような姿勢を見て、初めて自分の中でもっと韓国の青年たちと話をしたり、コミュニケーションがとりたいたいという強い気持ちが芽生えた。それが私自身とても新鮮で、暖かい気持ちになった。

しかし、自分でも知らない内に韓国の青年たちに対して甘え過ぎた部分が多々でてきて、今だから客観視できるが、その姿はまるでお客様といった形になっていた場面も多くあった。それは韓国の青年たちの方が敏感に感じ取っていたらしく、最終日の夜に初めて韓国の青年たちから胸の内を明かされた。韓国の青年たちは、日本の青年たちが自分たちと仲良くしようとする気持ちが、態度に表れていないことに寂しさを覚えたという言い分であった。それをきっかけにして、通訳の方々の懸命なサポートもあって日韓の参加者がそれ

それがこのセミナーを通して抱いた思い、疑問、感情…溜めていたものを一気に吐き出すが如く主張することができた。また、全員の思いを分かち合うことが出来た貴重な時間を過ごすことができ、今となっては今回のセミナーで一番心に残るプログラムとなった。なによりこの討論会の間は、我々日韓の青年たちはそれぞれが属する国など関係なく、純粹に人と人との意見のぶつかり合いという場であったように感じたことが、私の中で最も印象的であった。



平和を築く

日本聖公会中部教区
山田拓路

韓国人参加者の中に、あるディスカッションのとき「私の祖母は日本人に連れて行かれた。」と私たちに語った青年がいた。このような歴史に対する葛藤を私たち日本人参加者に向けて話すことは、きっと辛かっただろう。それでも、歴史からくるわだかまりを共に清算しようとの思いから、彼女はその言葉を口にしたのだと思う。また、最終日前夜に、韓国人参加者は、本当の気持ちを語らないままこのセミナーを終わらせたくない、私たちに対して正直な思いをぶつけてくれた。おかげで私たちは、語気を荒げ、涙に声を詰まらせることもあったが、互いに溜め込んできた思いを分かち合うことができた。

互いの中にある隔てを乗り越えるというこ

とは、そこに隔てなど無いかのようにふるまうことを言うのではないと思う。むしろ、私たちを隔てているものは何かをよく見て、知り、自分の立場から相手の立場へと近づくために歩み続けることを言うのではないか。

今回のセミナーで、韓国人参加者たちはその一歩を踏み出してくれたのだと思う。そんな彼らからの語りかけに、私たち日本人参加者も誠意をもって応えたい。

日韓聖公会の青年が、たとえその数は少なくとも、韓国と日本の間の対話を続けていくゆるぎない姿勢を持ち、確信をもってその姿を世に示していくことができれば、きっとそこに平和が築かれると信じる。



日韓聖公会青年セミナーに参加して

日本聖公会京都教区
浮田倫太郎

今回のキャンプでは、「日韓の葛藤の解決」ということがひとつのキーワードとなってプログラムが組まれていた。プログラムはどれも興味深い内容ばかりで、どのような学びとわかちあいができるのか、楽しみであった。しかし準備にあたり、いざ「葛藤とは何か」と考えてみると、テーマそのものに戸惑いをおぼえてしまった。「葛藤」とは何だろうか。日韓の間に横たわる葛藤とは何か。大きく考えれば考えるほど難しくなる。歴史認識のずれ？ 帝国植民地時代の戦後未処理問題？ 文化先行の交流？ 平和をおびやかそうとする戦争？ 日本の憲法9条の改変？ 考えれば考えるほど、なるほどさまざまな思いが葛藤としてみえてくる。私は、さまざまな葛藤を捻出し、

知識をもとに葛藤を捉え準備をすすめた。だが、私が心に留めた多くの葛藤は、本当の意味で自分の中に生まれた葛藤ではなかったのかもしれない。

「華川という場所はとて素晴らしい場所ですよ」と知り合いから聞いていた。プログラムは詰め込みではなく、ときに体を動かしたりし、キャンパー同士の活発な交流もできた。自然の中で、自然の恵み、人との交わりを確かに感じた。非日常の空間で、楽しいキャンプは進む。ただ、不安もあった。とても楽しいけれど、葛藤の解決について、なにかを学んだか？ 知ったか？ ここで何を心得て帰るのだろうか？

ソウルに戻ってきたのちの17日、平和実現に向けた葛藤解決の具体的実践のセッションの中で、今回のテーマについて、大きな理解を得ることができた。葛藤とは何であるか、またその解消に向けた具体的な実践方法を得た。他者間の葛藤の解消のためにはただ漠然と未来を見るのではなく、lived history、remember history の認識を共有し、どこまでも対話を貫いていく。対立する相手、敵対する相手とも積極的に対話をし、しかもその際には、自分の主張をもしっかりとし、とことんお互いの対話をすすめる。

しかしながら、この時点でも、日韓の葛藤は、自分自身からすこし遠くにあるようなもの、自分に関係する大きな問題だが、その内容が大きすぎるがゆえに、核を見失ってしまっているかのようなのであった。

フェアウェルパーティーが近づき、そろそろ別れの時が近いと思った時、韓国の青年から、「もう少しお互いを深めたい」との話があった。わかちあいを深めるのかと思ったが、韓国の青年の口から堰を切って出てきた言葉は、この日までの両国青年のキャンプの持ち方、とくにキャンプへの日本側の参加者の姿勢についてであった。

韓国の青年はキャンプ中たくさんのもてなしをしてくれた。マッコリをふるまってくれ、夜食を作ってくれた。だが、楽しい語らいの中で、私は大切なことを見落としていた。

日本側のキャンパーは、日本の青年同士でもともと仲がよかったこともあり、日本側だけで固まって盛り上がっていることも多かった。韓国の青年にとってみれば、交流する気が少ないようにみえたらう。また、夜食を作

ってもらって食べたきり、後片付けもせず酔っぱらって寝てしまっていた。台所では韓国の女性参加者が一から十までしてくれていた。なんの配慮もできていなかった自分が人として恥ずかしく、みじめであった。

韓国の青年の発言に、はじめは衝撃を受けた。なぜ、今ここでそのような話を…。でも、これこそが今回ここに集った意味であった。韓国の青年たちのこの話がなければ、私たちはうやむやな交流を経て、お互いの心にわだかまりを残したまま、笑顔をとりつくろい別れていたことだろう。

はじめて隠れていた真実を知った。相手の気持ちを痛いほど知った。そして、自分自身を痛く知った。そこに葛藤が起こった。深夜2時まで5時間話した。葛藤の解消のための対話。敵対する相手とも対話し続けること。その日の日中、学んだことだ。みな、学んだことを胸に、一人ひとり語った。そこには妥協というものはなかった。ただ相手を素直に受け入れるのではなく、自分の思いもしっかりと伝えあった。当然、それは苦しい過程であった。けれども、その過程が大切であり、大きな結果を導いた。

葛藤がひとつ、解消された。平和というものを大きな次元で捉え、大きなうねりとして平和の実現に向け動いていくことは大事だ。でも、平和は常に隣の人との間にある。その、一番大事なものにあらためて気付かされた。そして、今回のキャンプを通じての経験は、非常に大きな自信になり、今後の日韓キャンプへの明るい展望さえもみえた。

韓国と日本の青年が、同じ葛藤を同時に体験し、それを青年同士の交わりのなかで、積極的な語り・対話を行うなかで、解消しえた。つまり、お互いの中に、大きな大きな、ほころびのない平和を築いたのである。

このキャンプを通して、常にまもり導いてくださった主なる神に感謝いたします。

「葛藤」と「平和学」

日本聖公会京都教区
佐藤由佳

初めて日韓セミナーに参加して、どんな毎日になるのだろう、日韓の歴史問題にどっぷ

り浸かる日々になるのかなあとある程度の覚悟と緊張を持って参加しました。振り返ってみますと、日韓の問題を取り上げる場に居られず、韓国の青年の声を聞けなかったのが残念でしたが、テーマの「葛藤を越えて、平和の世界へ」をそのまま実際に体験して学ぶセミナーに出合ったことはとても面白かったです。

日本と韓国は似た文化もありますし、個人と個人では分かり合える部分がたくさんあると思いますが近い国がために起こってきた国と国の過去の戦争や加害問題など様々な「葛藤」を抱えたまま現在に至っています。この長いスパンの「葛藤」を私たち青年がこれからどう乗り越えていくのかという課題を抱えていると思います。

今回のセミナーではその葛藤を考える上での一つの助けとして平和プログラムが紹介されたのではないかと思います。実際の平和プログラムではグループ実習がどう平和と絡んでくるのか分からなかったこともあり戸惑いも多かったのですが、日韓の青年やスタッフが混ざって声を出さずに新聞紙でタワーを作ったり、図形をつくったりと、体を動かす作業はとても楽しかったです。終わってみると、言葉を発せずとも相手のことを考えて動くこと、自分から与えることが大切だということを経験させていただきました。個人的には、葛藤を感じた時、妥協せずにお互いに言いたいことをぶつけることが大切、そうして最後にはお互いを理解して妥協よりもっと良い解決につながる、そんな解決方法があるということが一番の発見でした。表面的な穏やかさが「平和」ではない、そこに至るまでのいろんな「葛藤」を一つずつ整理して乗り越えていくことが必要なのだと感じた数日間でした。こんなに「葛藤」という言葉を考え、聞いた日々もありませんでした。

高校の修学旅行以来の韓国でしたが今回は韓国の青年の飲みっぷりとスタミナに驚きつつ、積極的に交わってくれたり夜遅くまで持てなしてくれたりした温かさにとっても感謝しています。と同時に甘えすぎて申し訳なかったです。

私は部分参加だったので、残りの2日間参加出来なかったことを非常に残念に思っていますが、お見送り会をしてくれてメッセージをくれたことはとても心に残っています。韓

国語が話せたらなあとお感しました。限られた時間の中で非常に濃い時間を一緒に過ごしたことが私たちのこれからの交流とともに互いを思い出して平和につながっていくのだと思います。日本側の貴重な仲間と出会えたことも感謝しています。また会いましょう！



日韓セミナー感想

日本聖公会京都教区
松山健作

「葛藤を越えて、平和の世界へ」という主題で、青年が集い2009年の日韓セミナーが始まった。主題は、非常に響き良い、聞こえ良いフレーズだが、よく考えてみると重く、難しく、何に注目点が置かれているのかが、具体的に見えないという点を持っていたように思う。また、それに用意されたプログラムが、この主題について克服できる内容であったのだろうか。そのように「葛藤を越えて、平和の世界へ」と想起するようなプログラム設定がなされたかどうかを考えたとき、非常に疑問点を感じざるを得ないセミナーになったような気がする。

しかしながら、私はこのセミナーに参加して、一つ大きく感じた事は、韓国人と日本人の考えのズレ、すれ違い、価値観、思考方法などなどを考えたとき、そこから現代的「葛藤」が生まれることを痛感した。また、その現代的「葛藤」が歴史的「葛藤」に連結する可能性もあるだろう。参加されたメンバーには、そのような気持ちが、より理解していただけるかもしれない。

例えば、セミナー中において、「韓国人と日

本人と分類して考えることが多いが、それは果たしてどういう意味を持つのか」という議論があった。それを聞いていて、戦後まだ間もない時に、映画監督である大島渚が「自分は世界人であるから、日本人も朝鮮人も関係ない」というような発言をした記録を目にしたことを思い出した。彼は一人の人間としてのグローバルな人間同士の関係を想起したのであった。非常にわかりやすく、理解できるし、共感できるような気がする。しかしながら、現代になっても現実的には、そう簡単に国境を越えてグローバルな関係が結ばれるかどうか。世界人として生きることができるかと考えたときに、このセミナーに参加した私は、まだまだ難しいように感じた。

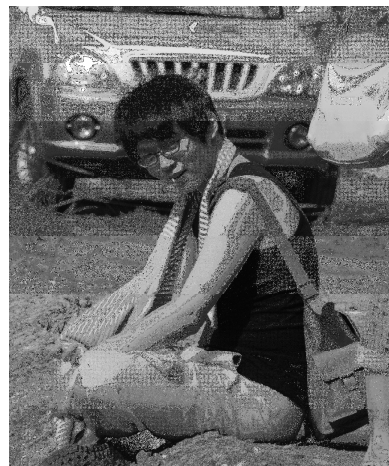
この感想において、ちくいち日韓にあるそのズレやすれ違い、価値観、志向性について、いわゆる現代的「葛藤」について例をあげる容量は、確保されていない。しかしながら、私が持っている歴史的「葛藤」について少し触れなければならない。日韓の間にある「葛藤」というワードを目の前にした時、常に歴史的な日本帝国支配下、第二次世界大戦、戦後補償などなどのいわば現代を生きる人にとっては、少し歴史をさかのぼって考えなければならないところの部分から発生する「葛藤」であると考えていた。

しかしながら、このセミナーに参加することで、「葛藤」というものは、常にいつの時代においても発生するものであり、むしろ発生しない方が自然的ではないように感じさせられた。私たちは、「葛藤」を持ち続けながら、未来について考えていかなければならないのではないだろうか。「葛藤」をもちつづけながら、平和について考えなければならないのだろうか。

そのような一種矛盾するような感覚を抱いた。「葛藤を越えて」とは、私たちにとって何を意味したのだろうか。互いの葛藤を「消しあう、忘れる、見ないようにする」そのようなことに力を注ぐのではなく、むしろ、お互いの葛藤は何なのかを露出し、それを互いに認め合いながら前進するというようなことが一つの方法であるのではないかと感じられた。

実際、セミナーでは、私たちの「葛藤」について簡単にシェアすることはできたかもしれない。しかし、それを解決する方法や、解決にいたる話し合いなどは、十分にできな

った。それらは、一週間という時間では到底不可能な課題であるだろう。しかしながら、日韓聖公会の中で続けられてきた青年交流の歴史、そしてそれに注がれてきたパワー、労力というものは、決して簡単にできることではない。この積み重ねが両国の協働の糧を築くものとなるだろう。また、それが「葛藤を越えて」ということにおいて、「平和の世界へ」と向かうということにおいての前進するように思う。これからも今までのように時間をかけて、あせらずに私たち前進し、平和について祈ることができれば、活動することができればと感じている。



日韓セミナーの感想

日本聖公会大阪教区
高木謙一

最も印象に残ったのは5日目の平和教育のプログラムでした。様々なワークショップを通して葛藤や平和を作ることについて考える時間をもつというものでした。

その中でも特に印象深かったのは、「平和を作るためには敵対する人たちとさえ、向きあって話をしなければならない」という話でした。考えの同じ人が集まると、確かに話はあうがそれだけで終わってしまい、変化は起こらない。意見の違う人達とも協力することが大事だと言います。

自分自身の弱さを見つめていくと同時に、相手の弱さを否定するのではなく受け入れる。難しいことだと思いますが、お互いの愚かな

部分を認めあえる人間関係を築けるようになりたいと感じました。

相手の弱さを否定するのではなく受け入れる。難しいことだと思いますが、お互いの愚かな部分を認めあえる人間関係を築けるようになりたいと感じました。



日韓青年セミナーに参加して

日本聖公会大阪教区
井上瑠美

2009年8月13日から18日の6日間、真夏の韓国の強い日差しの下、第4回日韓聖公会青年セミナーが行われました。日本全国から青年たちが韓国に行き、韓国でも青年たちが迎えてくれました。スタッフを合わせると総勢約40人でした。

最初の3日間は、華川（ファチョン）という朝鮮民主主義人民共和国に近い、山と湖の広がるところで過ごしました。そこはとてものどかで、韓国の青年達と共に平和のTシャツを作ったり、川に行ってヤマメを捕まえ、それを焼いて食べたり、夜には満天の星空の下、キャンプファイヤーなどの交流があり、自然の中でたくさん笑い合うことが出来ました。また、華川から船に乗り、朝鮮民主主義人民共和国が上流に建設したダムが韓国への水攻めをするためのものと捉え、その下流に韓国が建設した平和のダムや、何重のもの金網で区切られたDMZ（軍事的非武装地帯）など朝鮮戦争の南北緊張がいまだに続く場所を訪問することも出来ました。どちらも自然

豊かで鳥やトンボが自由に行き来しており、ただ人間だけが最新の武器を持ち、互いに金網越しに監視しているのが、地上に国境がない日本という島国に住む、戦争を経験したことのない私にとっては、とても違和感があり、目の前にある隣国がはるか遠くに感じ、怖いのもなく、悲しいのもなく、今まで味わったことのない気持ちになりました。

後半の3日間はソウルで活動しました。日曜は韓国で一番大きいといわれる大聖堂で聖餐式に出て、韓国の青年が用意してくれたツアーでソウルを観光しました。名古屋で行った事前研修会で考えた日本側からの発題、韓国側が用意してくれた発題について互いに意見し、話し合う時間がありました。今回のセミナーのテーマは「葛藤を越えて、平和の世界へ…」でした。戦争や日本が韓国に行ってきた偏見や差別などが起こす葛藤はもちろんでありますが、セミナー中、言葉の壁や文化の違いなどの葛藤を数多く感じました。時間はかかりますが葛藤と向き合い、互いに相手のことを理解しようと観察、推測し、調和しようと試みることで葛藤は超えられることを6日間を通して身をもって知ることが出来ました。セミナーが終わったから終わりじゃなく、これから私にできることはきっとたくさんあるでしょう。ここから何か始めようと感じたセミナーでした。

最後になりましたが、セミナーを準備して下さった日韓スタッフ、韓国の青年たち、セミナーに誘ってくださった方々、支援し見守って下さった方々に心より感謝しております。



2009 年度日韓セミナーでの学び

日本聖公会大阪教区
荻野直人

○葛藤の下に横たわっているもの

今回の日韓セミナーでのテーマは「日韓関係における葛藤」であり、発題の時間には韓国の参加者と日本の参加者が互いにひとつのトピックを取り上げて葛藤についての問いかけを行った。

日本の青年は、日本が抱える憲法 9 条に絡む問題を取り上げ、韓国の青年たちは文化交流の進展が日韓の信頼構築につながっていないという問題を取り上げた。取り上げた問題は異なるが、日韓の青年が互いに現在の日韓関係について無視できない葛藤を抱えているということを参加者は認識したのではないだろうか。日本側、韓国側という型にはめるだけでなく、それぞれ個人にとっても日韓関係において「何かもやもやした」葛藤を抱えているのだろう。セミナーが終わってしばらくの時間を置いてから振り返ってみたとき、私はそれぞれが抱えていた葛藤の中に共通した何かがあるように感じる。

日本の青年と韓国の青年は、戦争における支配・被支配関係を鑑みたときに、日本と韓国は加害者であって韓国は被害者である認識をもっている。そのような認識は、日韓が「過去にアジアで起きた戦争」という共通の土台に置かれていることを忘れさせてしまう。日韓が足元を見つめれば、そこには同じ舞台が設置されている。そのことを、日本人である私が主張することにすら葛藤を覚えずにはいられないが、事実はそうだろう。

○日韓関係だけにとどまらないために

過去の戦争を共通の課題として捉えるためには、他者を理解しようという姿勢が求められる。常に加害者であり続ける国家、集団、人間は存在しないのではないだろうか。同じように、常に被害者であり続ける存在もまたないだろう。これは人間関係における原則ともいえるのではないだろうか。この世界の中で、自分の存在を確立したい、確固たる立場に位置づけようとしたときに、他者に対する理解が遠のいてしまうのではないだろうか。自分は加害者なのか、被害者なのかというこ

とをはっきりさせたく、見切り発車で自分の立場を決めてしまう。自分の存在を明らかにしたいという思いは、時として相手に対して「お前は何者なのか」という問いかけになって表れやしないだろうか。

それは、すなわち民族主義にもつながっていく。今まで、人類を苦しめてきた問題は民族主義的な思想であった。私たちは、今回の日韓セミナーを通して、現在の世界を支配している民族主義的思想に対して疑いの視線を向けないといけな



2010 年

第 5 回日韓聖公会青年セミナー

日時：2010 年 8 月 11 日～16 日

場所：日本 長崎

1) プログラム概略

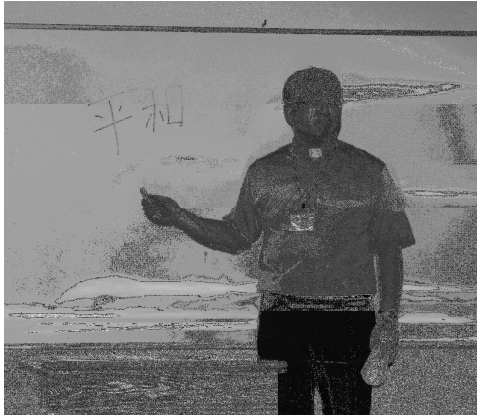


写真 1) 金兌昱司祭の説教



写真 2 人間知恵の輪

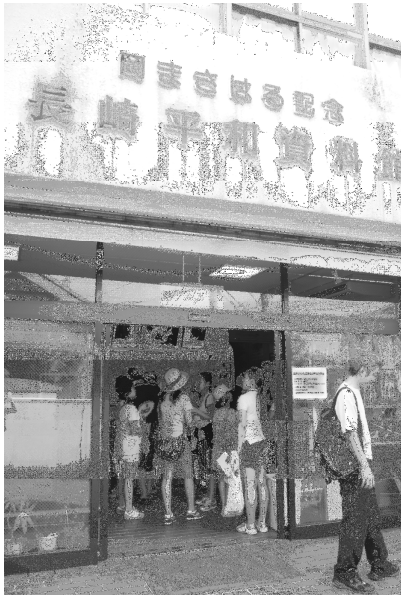


写真 3 岡まさはる記念長崎平和資料館

2006 年から始まった日韓聖公会青年セミナーは 5 回目を迎えた。今年 2010 年は韓国併合条約が結ばれて 100 年の節目の年である。

また、2010 年 5 月にはニューヨークの国連本部にて N P T 核拡散防止条約再検討会議が開かれ、核兵器抑止に向けた取り組みが世界的に注目された。

そのようななかで今年のセミナーの開催地として長崎が選ばれた。世界で唯一、広島とともに原子爆弾が落とされた長崎の地に日韓の青年が集い、ともに平和を実現するために学びわかちあい考える。今年のテーマは「主の平和」。人間が考える平和には限界があるかもしれない。平等でない思惑があるかもしれない。そうではなく、この世界の真の平和である主が求められた平和を求めてセミナーが開かれた。

▼1 日目 (8 月 11 日) ▼

当日午前中に対馬海峡を通過した台風の影響が心配されたが、ソウルからの飛行機は無事に福岡空港へと到着した。韓国側の青年と日本側の青年スタッフとで博多駅で昼食をとったのち、14 時 30 分に博多駅にて日韓両青年参加者が合流、バスで一路長崎へと向かった。

渋滞もなく、バスは 17 時に会場の長崎カトリックセンターに到着した。予定よりも早く到着したため、少し休憩したのちにまず開会礼拝が行われた。開会礼拝では大韓聖公会ソウル教区宣教局長の金兌昱司祭がセミナーを開催するにあたっての説教をされた。海の表面は一見穏やかで落ち着いている。けれども水の中はどうなっているかよくわからない、とてもおそろしい状態にある。平和も海に似ている。見かけだけの平和はたくさんある。けれども、一歩足を踏み入れた時、果たして本当に平和なのだろうか。実はとても恐ろしい暴力がはびこっているかもしれない。そのような見かけの平和ではなく、真の平和とはどのようなものだろうか、考えていきたい、と話された(写真 1)。

その後、簡単にオリエンテーションを行い夕食をとった。まだ日本側と韓国側にわかれて、やや緊張した面持ちで食事をしたが、昨年からの参加者も多数おり、昨年度の反省からか、日本側の青年が積極的に動き、韓国の青年たちに語りかけていた。

20時よりあらためてセミナーのスケジュールなどのオリエンテーションがあり、緊張をほぐしていくためのアイスブレイキングを行った。まずは日韓混合グループでの自己紹介ゲーム。車座になり、一人ずつ自己紹介をするが、2人目以降は「〇〇さんの隣の〇〇さんの隣の〇〇です」と、記憶して伝えていかなければならない。単調になりがちな自己紹介が盛り上がった。次に人間知恵の輪を行った。はじめは7人ほどのグループに分かれて行い、次に20名全員で行った。さすがにかなりややこしくなったものの、全員で「知恵」を絞って解くことができた(写真2)。アイスブレイキングで文字通り溶け合っていき、楽しくセミナーはスタートした。

夜は毎年恒例となっている交流会。今回はユースホステルなので、騒ぎすぎではいけない。それでも青年たちはお酒やジュースを飲みながら、大いに語り盛り上がりっていた。

▼2日目(8月12日)▼

2日目は1日中フィールドトリップを行った。朝ごはんを食べたあとは、路面電車の混雑を避けるため、3グループにわかれ時間差で宿舎を出発。

岡まさはる記念長崎平和資料館

まず目指したのは「岡まさはる記念長崎平和資料館」(写真3)。電車通りから記念館までの急峻な坂を登り長崎を体感する。「岡まさはる記念長崎平和資料館」とは日本で唯一の、近代以降の日本の侵略・加害責任についてまとめ展示している資料館として知られる。かつて長崎の地に、日本の戦争中の加害責任を徹底的に追求し、特に長崎の闇に隠されていた「朝鮮人被爆者問題」を掘り起し、真相を明らかにするための闘いを続けていた人物がいた。岡正治氏。岡正治氏は牧師であり、長崎市議会議員であり、長崎・在日朝鮮人の人権を守る会代表でもあった。多彩な活動を続けてきた岡氏は1994年、突然の病によって天に召された。そんな岡氏が晩年に心血をそそいでおられたことがある。それは「日本の加害責任を明らかにし、未だ残る差別を撤廃し、政府に補償の実現をさせるための資料館



写真4 御講演くださった高實理事長

の建設」だった。岡さん亡きあと、生前の岡さんの考えや行動・主張に共感し、岡さんの遺志を継ごうという人々が集まって、1995年、「岡まさはる記念長崎平和資料館」が完成した。

長崎に落とされた原爆の悲惨さ、悲しみを風化させてはならないことは確か。しかし、そもそも原爆投下にいたった戦争には、日本のアジア侵略の歴史が背景にある。この資料館は、韓国併合100年を迎える今日、その過去に触れもしない今の日本で、史実に基づいた日本の加害責任を学ぶことができる貴重な施設といえる。



写真5 長崎 26 聖人記念碑

見学するとともに、資料館の高實康稔理事長からお話を伺った(写真4)。資料館成立の経緯や活動の意図、加害の歴史の概略を教えていただいた。高實理事長はお話しの最後に

「次の世代に伝え、教育していかなければならない」と強調された。修学旅行生らも多数訪れる当記念館は、まさに教科書では学ぶことのできない歴史教育の大事な支えとなっているといえる。教科書やものの本では知ることのできない、おそろしく目を覆いたくなるような加害の歴史が横たわる。参加者は食い入るように展示を見て高實理事長にも熱心に質問していた。

一行は資料館をあとにして平和公園近くの昼食会場へ。移動途中、「長崎二十六聖人殉教碑」を見つけた(写真5)。二十六聖人はサン・フェリペ号事件をきっかけとして豊臣秀吉が行ったキリスト教弾圧事件である。豊臣秀吉は周知のごとく朝鮮出兵を行っており韓国人の憎悪は激しい。その秀吉が弾圧を行ったことを聞き、韓国側の青年には驚き怒りを訴える人もいた。

昼食は皿うどんなど長崎名物を堪能した。

被爆証言を聴く

食後、歩いて長崎市立山里小学校へ。山里小学校は爆心地近くに建つ学校で、原爆投下当時に甚大な被害をだした場所である。この場所で、被曝者語り部の城臺美弥子さんに被爆体験を語っていただいた(写真6)。山里小学校に通っておられ6歳の時に被爆された城臺さん。幸いにも投下時は長崎駅方面の山麓の自宅にいて直撃は避けられた。それでも爆風により家は全壊してしまったという。手製の地図やたくさんの写真資料などを用い語ってくださった。被爆された方々が高齢化していき話を伺う機会もなかなかないなかで、日韓両国の青年がともに過去の核兵器の被害に耳を傾け心に留めわかちあえたことは大きい。韓国では、原爆のことは教科書でもわずかに2行ほど触れる程度で、ほとんど何も教わらないという。今回城臺さんの証言に涙を流し聞き入っていた。核兵器の恐ろしさをほんとうに知った、という感想も聞かれた。

フィールドトリップ

証言を聞いた後、まだまだ暑い長崎の午後、「平プロ」実行委員である柴本孝夫司祭、早川成氏、山本尚生氏の案内で原爆資料館や爆



写真6 城臺美弥子さん



写真7 長崎原爆朝鮮人犠牲者追悼の碑

心地公園、朝鮮人慰霊碑などを見学した。原爆資料館ではガイドの方の案内も聞きながら、長崎に投下された原爆の実態をしっかりと学んだ。続いて訪れた「長崎原爆犠牲者追悼の碑」では全員でお祈りを捧げた。今夏、国連の潘基文事務総長が訪問し、その際の献花が残されていた(写真7)。爆心地公園には爆心地にモニュメントが建つ。このモニュメントは数回建てなおされており、そのたびに立派なものになってきたという(写真8)。毎年8月9日に原爆死没者が数えられ奉安されており、2010年8月9日現在で死没者は152,276名にのぼる。

この石碑には爆心地であることを示すプレートがつけられているが、そこには「原子爆弾落下中心地」と刻まれている。これは違和感を覚える。原爆は落下してきたものではなく「投下」されたものだろう。平プロのメンバーもこれを追究し市に訴えているが、この表記は変わっていないという。落下と投下では意味合いが大きく異なるが、まさか米国に配慮しての事ではないと考えたいが、加害と



写真 8 爆心地に建つ慰霊碑

被害の事実が歪曲されている現場といえるだろう。

続いて平和公園を尋ねた。ここは戦時中に浦上刑務所があった場所で、刑務所はコンクリート造りだったが爆心地近くのため全壊し受刑者は全員亡くなった。受刑者のなかには朝鮮半島出身の人もいたという。強制的な徴用かどうかは明らかではないが、日本に来ざるを得ない状況下で長崎に来て、そして被爆し亡くなった。被害者は日本人だけではなく日本の侵略によるさらなる被害者が生まれたということであらためて考えさせられる。

現在、刑務所の遺構が残され、近くには多数の石像が置かれている。世界各国から世界平和と長崎の慰霊のために寄贈された像で、中国からも寄贈されている。だが、中国の像のまわりだけ鉄作で囲まれ、四隅にはセンサーが設けられ、周囲は防犯カメラが睨みをきかす。大変残念なことに、かつてこの像に赤いペンキがかけられる事件が起こった。日本は中国に侵略し加害した過去がある。その過去を乗り越え被害者中国から寄せられた像であるにもかかわらず、ペンキをかける行為をする背景には、潜在的なアジア蔑視が存在する。戦後も謝罪どころか、一部国民の意識として加害を続けてしまっているのである。

わかちあい

この日は日本の侵略戦争の加害と被害の両方を学び、内容としても多くのことを吸収し、参加者はそれぞれたくさんの思いを抱いたようだった。わかちあいでは次のような声が聴かれた。「韓国で被爆体験を伝えます。」「日本

は加害を隠し続けている。教科書問題もそう。でも韓国でもベトナム戦争を隠している。このセミナーを通して、学んだことを実際的な「行動」につなげていきたい。」「強制連行は悲しい被害の歴史。原爆については日韓の視点はずいぶん異なる。お互いに学びわかちあうことがとても大切。」「客観的な歴史が大事。」「相手の側に立った」歴史をみる。」

▼3日目（8月13日）▼

強制連行の学び

午前中は宿舎にて、座学を行った。まず、朝鮮半島から強制連行され軍艦島炭鉱などで働かされていた徐正雨さんの追討ドキュメンタリーDVDを鑑賞した。徐さんが証言される強制連行の実態はとてもひどく、炭鉱での強制労働や砲兵工場での労働など、大変辛い思いをされたことを知った。戦後、徐さんは強制連行と労働の謝罪と補償を求め、三菱重工業や政府に強く訴えたがその願いは聞き入れられなかった。三菱重工業は強制労働を一切認めようとせず、工場内での撮影も許可せず門前払いにして締め出すという姿勢であった。

生まれた地から無理やり日本に連れてこられた徐さんの痛み・苦しみははかりしれない。人が人として生まれた地で育ち生活していく権利が奪われてしまう、人権を踏みにじる侵略の事実をまた学んだ。

DVD鑑賞後、高實康稔理事長にお越しいただき、日本の近代化以降の韓国併合に至る歴史と日本の加害・強制連行の歴史について時系列的に詳しく講義をしてくださった。資料館では一つ一つの事実を目を留めたため、一連の流れとして理解することができてよかった。日本の青年のなかには、初めて耳にする内容が多かったという声も聞かれたが、韓国の歴史教育ではこの点についてはしっかりと学習を行っているという。

軍艦島

午前中の座学を終え、一行は長崎港へと向かった。そこから船に乗り「軍艦島」へ。この島は正式には端島と呼ばれる、炭坑を有した島である。江戸時代、1810年に石炭が発

見され、その後細々と採炭が続けられた後、明治時代に入り大規模な採炭が進み、1890年以降は三菱の所有となった。早くもこのころ、島内に三菱社立の小学校が設立され住宅などが整えられ、島の周囲の埋め立てが始まった。大正時代には日本で最初の鉄筋コンクリート造の集合住宅が立ち並び、新聞各社が「軍艦と見まがう」と報道している。このころから「軍艦島」の名称はつけられていたようだ。さて、その後、石炭から石油へのエネルギー革命がおり、炭坑は1974年に閉山、住民もすべて島を離れ端島は無人島となった。現在でも大正時代からのコンクリート建造物などが半壊の状態で残り、「廃墟」として多くの人の注目を浴びており、世界文化遺産登録への動きもみられる。

ところが、この島こそが戦争の大きな舞台であった。地下900mの暗い危険な炭坑では、多くの朝鮮人労働者、強制連行された朝鮮人・中国人労働者たちが働かされていた。残念ながら、世界文化遺産化を目指している軍艦島の歴史として、この事実が語られることはほとんどない。その異様な軍艦たる姿もさることながら、島が歩んだまさしく「戦艦」としての歴史、アジア侵略の歴史を学ぶべき島といえる。

島への上陸に先立ち、ツアー会社にて乗船前に軍艦島の案内を受けた。5分間の島の紹介DVDも鑑賞したが、そこには1960年代に閉山するまでの軍艦島の豊かな生活や輝かしい軌跡が、三菱の発展とともに描かれていた。もちろん強制連行などには触れず…。午前中に見た徐さんの証言DVDで軍艦島での強制連行の歴史を学んでいた参加者は一様に違和感を覚えた。強制労働をさせられた当事者とは正反対の視点にたつ内容。依って立つ視点により、同じ内容が全く異なる描かれ方をする、「歴史認識」の一面を見た気がした。当日はあいにくの曇空で波が高い荒天となった。高いしぶきをあげながら進む船の先に、現在でも威勢よく建つ三菱重工長崎造船所のドックが見えた。そしてそこには最新鋭の装備をもつ海上自衛隊の護衛艦が建造中の姿をみせていた(写真9)。今日に至るまで軍事産業は息づいており、過去の侵略の反省もなさ

れるままに継続した歴史が刻まれている。軍艦島上陸に際しては、高い波の中をなんとか着岸することができ、上陸した。案内してくださったツアー会社のガイド小場田氏はカトリックの信徒で実際に若かりし頃に軍艦島炭鉱で労働経験ももつ方だった。多くの青年が船酔いに苦しみながらも、話に聞き入っていた。

軍艦島はいたるところが崩れ落ち廃墟となっていた(写真10)。危険性の問題から市が意図的に破壊した建物もあるという。軍艦島のなかでは、65年以上前の強制連行と労働の悲惨な事実がよみがえってくるようだった。島内には、強制連行された中国・朝鮮人労働者の住居や炭鉱、霊安室などが手つかずの状況で残っているという。案内を聞き、小場田さんにご準備くださった「いつくしみふかき」を歌い、全員でお祈りを捧げた(写真11)。話を聞く以上に、現場で感じるものは多かった。

分かち合い

その夜の分かち合いでも青年たちのあふれる思いが聞かれた。「どちらかの立場ではなく、イエス様の目で平和を見る。」「人の上に立つこと、お金をたくさんもって人を支配することが幸せなのか。命を落としてまで利益を得ようとする戦争は無に等しい。多くの命が失われた軍艦島も、利益は得たかもしれないが時代の推移とともに廃墟と化した。人々の幸せはあったのだろうか。」「(強制連行を学び)「たがいに赦し合う」というけれど、どうすればよいのだろうか」と悩んでしまった。でも今日、軍艦島でともに祈ったが、そのことで少し「赦し合う」ことができたような気がした。」

▼4日目(8月14日)

この日の日中は宿舎にて、これまでの振り返りをしつつワークショップを行った。「私たちが実現する主の平和」というテーマで、日韓両国の青年が劇を製作した。双方ともに約半日をかけてこれまでの分かち合いをして劇のシナリオを考えた。日本側の参加者は、分かち合いのなかで、「教育」・「伝える」ことをしっかりと行っていくことで、過去の加害を

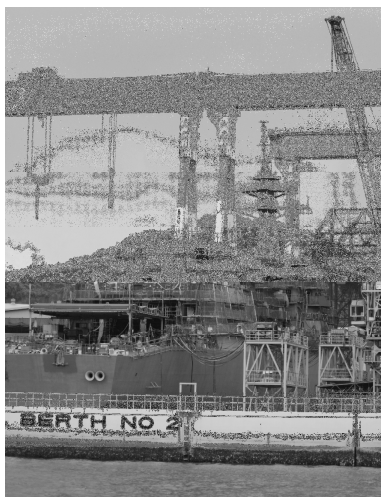


写真 9 建造中の自衛艦

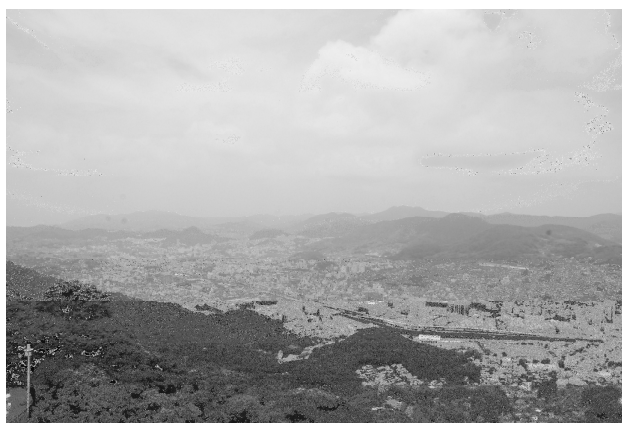


写真 13 稲佐山から爆心地方面を望む



写真 10 廃墟と化している軍艦島



写真 14 長崎聖三一教会



写真 11 軍艦島での祈り



写真 12 稲佐山で集合写真

反省し平和を築いていくことができると考え、20年後の未来の次世代への教育を主軸に劇を製作した。今回の青年セミナー参加者が20年後に自分の子どもに歴史の事実を伝えていく場面を描いた。

韓国側の青年は学校を舞台とし、強い者が弱い者をいじめ、弱い者がさらに弱いものをいじめる構図を描き、これを日本をはじめとする列強国の侵略にたとえて表現した。そして、数十年後の同窓会の場面では、加害者が過去の事実を認め謝罪し、被害者がそれを受け入れて和解し、平和の実現に向けともに「主の祈り」を捧げる様子を表現した。

日韓両青年が演じる劇の脚本がずいぶん異なっており、それぞれが感じ考えた主の平和が表れた劇となった。

夕方になりようやく劇は完成し、ビデオに収録した。その後、全員で稲佐山へ向かった。稲佐山は長崎随一の夜景スポットとして知られる高さ333mの小高い山である。麓から口

ープウェーで山頂へ上がり、長崎の夕景と夜景を楽しんだ(写真 12)。稲佐山から眺める夜景は絶景だが、陽があるうちに長崎市内を眺めると、あたかもジオラマのような光景が広がる。そして、稲佐山から北東方向に目を向けるとちょうど爆心地付近が目に入る。高度約 500m で炸裂した原子爆弾。やや斜め上を見上げ炸裂した上空を見つめ、そこから閃光・爆風・熱風が長崎市内を包んでいく様子をありありと想像することができる光景である(写真 13)。

グループごとに食事をとり宿舎に帰り、交流を深め夜が更けていった。

▼5 日目 (8 月 15 日) ▼

日曜日のこの日は、長崎聖三一教会の聖餐式に出席した(写真 14)。8 月 15 日、日韓両青年はセミナーを振り返りながら、敗戦・解放から 65 年経ったこの日を心に留めて礼拝を捧げた。

堀尾司祭ご夫妻と信徒の方々に温かく迎え入れていただき、お昼は美味しいうどんを御馳走になった。

その後、グループに分かれて長崎市内を自由行動。オランダ坂や大浦天主堂、中華街を見学しお土産などを見て回った。

いよいよ最終日の夜となり、ブッフエスタイルの夕食を囲みながらフェアウェルパーティーを行った。6 日間はあるという間にすぎ、日韓両国の青年は意気投合し非常に仲の良い関係ができあがっていた。

日本側の参加者・スタッフは浴衣に着替えて「炭坑節」を披露し、韓国の参加者・スタッフは日本でも人気が出始めていた「少女時代」のダンスを様々なアレンジして楽しい踊りを披露した。

その後も夜が更けるまで 6 日間を振り返っての思いを伝えあったり、楽しい話は尽きなかった。

▼6 日目 (8 月 16 日)

最終日は閉会礼拝の聖餐式を行った。加害と被害の実態を学び、和解と平和の動きを模索した 6 日間。参加者がみな主の体と血をうけて、これからの平和への行動をさらに高めていく決意を固め、会を閉じた。充実感の漂う青年の顔には、切れない友好と熱い思い、主の平和を求める信仰が輝いていた(写真 15)。



写真 15

2) 事前準備会資料

2010年日韓聖公会青年セミナー準備会資料 2010年7月18日(日)

戦後の日韓聖公会交流の歩み

日本聖公会青年委員会

委員長 司祭 野村潔

I、戦後交流の幕開け 百年持巧け

1965年：大韓聖公会最初の韓国人主教李天煥（イ・チョンファ）師の按手式に、八代斌助主教が出席した。李主教が、このときに1967年9月に「韓日親善会議」の開催を呼びかけ、日本聖公会は、それに応じ、12名の代表団を派遣した。

II、東京教区B（釜山）T（東京）プロジェクト

1970年代：釜山教区蔚山（ウルサン）教会へ4名の司祭を派遣（河野、長谷川、佐藤撤、田光）

III、日韓聖公会宣教セミナー

第1回：1984年10月／ソウル

日韓協働委員会の設置

IV、日韓聖公会宣教セミナーに対する批判：日韓宣教セミナーを考える会

V、日韓青年キャンプの実施：1995年／阪神淡路大震災復興キャンプ

VI、聖公会生野センターの設立

VII、日本聖公会の機構改革

日韓協働委員会の廃止→正義と平和委員会日韓協働プロジェクト

→1995年宣教協議会、1996年戦争責任告白

VIII、日韓聖公会宣教協働20周年：2004年10月／福岡

日韓青年キャンプの青年委員会への移管

共同声明の採択

・青年交流

・社会宣教の交流

・女性交流 他

IX、日韓青年セミナーの開始：2006年／河口湖

X、課題と現状

1、名称と内容

2、財政

3、機構上の問題

4、正義と平和に関する課題への取組をめぐって

以上

日韓併合百年とわたしたちの課題

日本聖公会司祭、立教大学チャプレン 香山洋人

今年は「日韓併合条約」から百年目にあたります。1910年8月22日に結ばれたこの条約によって朝鮮（当時は大韓帝国）は日本の植民地になりました。

しかしこの条約が結ばれるおよそ40年前から、日本は朝鮮を植民地として手に入れる計画を練り始めています。隣国朝鮮は地政学的にも政治理念的にも日本の近代化にどうしても必要だったからです。

近年、この条約そのものの不法性が論じられています。締結当日、調印に使われた慶福宮の敷地内では日本軍が軍事演習を行っていましたが、それが日本の閣議で協議されていた演出であったことを知れば、国際法の知識など無くともまともな外交的手続きではなかったことが分かるはずで、しかもかかわらず、日本の近代にとってこの条約は大変重要な意味を持っています。なぜなら、それまで長年に渡って武力による支配をもくろんでいた隣国朝鮮に対し、日本は近代国家として「国際法」の手続きを通じて支配政策を進めることにした、という国家としての方向転換が現れているからです。

そのための第一歩が1875年の「江華島事件」でした。測量に訪れていた日本船が給水のための上陸を試みると朝鮮側が発砲、日本はこれに応戦、賠償と通商条約を要求するという筋書きの「仕組まれた事件」です。ペリー艦隊による砲艦外交と同じ方法で日本は朝鮮の扉をこじ開けました。こうして無理やり開国させられた朝鮮に対し、欧米諸国も一気に通商条約を求めます。朝鮮はいきなり欧米列強の植民地争奪競争のただ中に飛び出すことになりました。そして結果的には、日本ただ一人が朝鮮を手に入れることになりましたが、背後には欧米列強の同意がありました。

強国同士の根回しによって世界を分割しあらかじめ取り分を決めておくという野蛮な国際政治は、「大航海時代」以来のやり方です。西欧年リスト教諸国が植民地を獲得していく過程とキリスト教が世界中に展開する過程が表裏一体であることはよく知られていますが、朝鮮と日本の関係においてもキリスト教は登場します。16世紀末、朝鮮に出兵した秀吉軍の主力はキリシタン大名でしたが、この人選は秀吉によるキリシタン弾圧政策の一環だっ

たともいわれています。また、このとき日本に拉致されてきた朝鮮人の中にはキリシタン信仰が生まれ、その後多くの朝鮮人殉教者が生まれています。

19世紀末、朝鮮が開国するとそれまで迫害されていたカトリックは息を吹き返し、続いてアメリカから長老派やメソジスト、英国からは聖公会が宣教師を派遣します。日本も朝鮮植民地支配の一環として仏教やキリスト教の協力を要諦し、日本の教会も朝鮮に宣教師を送り出しました。「支配者」として朝鮮に入り、日本人として朝鮮人に福音を伝道することの矛盾を知った織田樞次は、朝鮮の衣服を見につけ朝鮮語で伝道しています。しかしこれはきわめて例外的なケースであって、他の日本人伝道者たちは日本人だけを相手にするか、総督府の宗教政策に同調し、支配者として朝鮮人を見下していたのが実態です。しかし朝鮮のキリスト教は、海外宣教師の到着以前、朝鮮人自らの力で獲得した教会史上まれに見る自律的な信仰です。カトリックもプロテスタントも、それぞれ宣教師の到来以前に朝鮮人が自力で学び、聖書を翻訳し、礼拝が行われていました。これはアジアのキリスト教史において記憶にとどめたい事実です。

「日露戦争」（1904年）を機に、朝鮮は事実上日本に占領されました。ロシアをけん制し中国大陸からさらに南を目指していた日本の拡張政策の、いわば踏み台になったような形です。朝鮮にとって開国と近代化は日本への接近を意味していました。しかし日本の目的は朝鮮ではなく、自分たちはただ踏み台にされるだけであり、亡国の危機は目の前に迫っています。一方朝鮮国内には、列強に目を配りながらも独自の近代化によって自立の道を目指した改革運動もありましたが、これは失敗します。福沢諭吉が「脱亜論」を発表し、中国や朝鮮などを「東洋の悪友」と呼び、対等に交際する必要はない、むしろ欧米諸国がしたような同じ扱いをすればいい、という対アジア政策を提唱したのはこの頃です。このようにアジアを見下す姿勢は福沢個人の思想にとどまらず、近代日本の一貫したアジア観を形成したといってもいいでしょう。

こうして日本の植民地となった朝鮮の人々は多くの傷を負うことになりました。米も労

働かされた日本の戦争遂行の資源として奪い取られました。日本各地の炭鉱や土木作業現場で奴隷労働を強制したことや、女性たちを日本軍の性奴隷としたことは日本史の汚点であるだけでなく、今に至っても賠償も補償も行われていない事実は戦後民主主義の致命的欠陥です。大日本帝国以来、倫理観の次元において日本は何も変わっていないと批判されてもしかるべき状態です。過酷な植民地政策が多くの人々を苦しめただけでなく、今もその影響が放置されたままであることが問題です。朝鮮が朝鮮であること、自分が自分であることを36年間に渡って否定され続けた人々が味わった屈辱感、喪失感、絶望感は察して余りがあります。それに加え、植民地支配が終わったにもかかわらず、あれは間違っていたことだった、ひどいことをしてしまったという当然の反省がなかなか聞こえてこない。これでは被害者の痛みは癒えることがありません。そればかりか、あの時代を骨定し美化さえする人々が次第に声を大きくしている現実、犠牲を強いられた人、屈辱を味わった人々をさらに痛めつける結果となっています。

2001年「国連ダーバン会議」は、かつて当たり前とされていた奴隷貿易や植民地支配を問い直す国際的共通認識を確認しました。「当時としては仕方なかった、どの国も同じことをしていた」という正当化の論法ではなく、奴隷制度、強制労働などを必然的に生み出した「植民地支配」という同家政韓そのものが誤りであり、現時点から過去にさかのぼった反省と植民地支配が生み出した被害に対する取り組みを促す考え方が共有されました。

朝鮮に対する植民地支配の大きな問題は、それが「戦争」として認められていないという点にあります。中国との戦争、ロシアとの戦争、そして米英など連合軍との戦争というとらえ方がある一方、日本が朝鮮と戦ったという認識は公には存在しません。けれども、近代以降、日本が国外で行った最初の大量殺戮は、1894年11月、「東学」（民族主義的民衆宗教）に対する掃討作戦で農民軍3~40万人を殺したとされています。1909年、「日韓協約」（「日韓併合条約」の前段階の諸協約）の立役者だった伊藤博文を射殺した安重根（アン・ジュンゴン）は「抗日義兵の将校」であり、これはテロリズムではなく戦闘行為の一つだと主張して処刑されています。戦闘も大量殺戮もあったにもかかわらず国際法上の「戦争」ではなかったことから、戦後

朝鮮は対日戦争の戦勝国の中に加えられることはありませんでしたし、日本による朝鮮植民地支配の責任を追及することは自国の利益に反すると考えた欧米諸国によって、朝鮮は戦勝国とも被害国とも数えられず、これによって数え切れない朝鮮人たちが不条理な法的処遇を受け、今に至っています。

「日韓併合条約」は、韓国皇帝が自らの帝国を日本国皇帝（天皇）に譲渡する、という構造になっています。そしてそれこそが両国の繁栄と世界平和につながるのだと。もちろんこれは単なる詭弁ですが、その後の日本が行ったことは、武力を背景とした不平等条約の虚構の理念をすら実現していません。朝鮮の人々が犠牲を強いられ、今もそのダメージを受け続けているのはいうまでもありませんが、戦後、この問題こそ真摯に向き合わずに隠蔽し、そればかりか正当化すらして責任から逃れようと考えてきた人々によって、植民地支配に直接関わらなかった戦後世代の日本人までもが、植民地支配の罪過の責任を追及され続けています。その意味では、植民地支配の直接的犠牲者である朝鮮人と、その直接的加害者である日本人という二分法だけではなく、戦後生まれながらも植民地支配の間接的犠牲者となった多くの人々と、日本の戦後を支えることで結果的に植民地支配の継続に加担して来た多くの人々がいることを記憶する必要がありますし、そうした過去や現在の問題を知らされずに成長したあまり、海外の人々から無知をなじられ倫理観を追求されてしまう若者たちも、一種の犠牲者といわなければならないかもしれません。

「日韓併合百年」は過去を忘れ去った未来ではなく、歴史の中に過ぎ去っていった人々に顔向けのできる未来を作り上げるためのひとつの契機であることでしょう。日本による植民地支配が残した最大の傷は朝鮮半島の真ん中に刻みつけられた38度線です。北の独裁政権は自国民だけでなく隣国にも被害を及ぼしていますが、南に対しては事実上、植民地支配に対する賠償を行いながらも北だけを放置してきた日本にも正義にもとる弱みがあります。百年の区切りをきっかけに、神と隣人との誠実な信仰を再確認し、希望と和解の福音に仕える教会の使命を思い起こしたいと思います。

3) 訪問先の紹介

① 岡まさはる記念長崎平和資料館

長崎の地に、日本の戦争中の加害責任を徹底的に追求し、特に長崎の闇に隠されていた「朝鮮人被爆者問題」を掘り起し、真相を明らかにするための闘いを続けていた人物がいました。岡正治さんです。岡正治さんは牧師であり、長崎市議会議員であり、長崎・在日朝鮮人の人権を守る会代表でもありました。岡さんは1994年、突然の病によって天に召されましたが、晩年に心血をそそいでおられたことがあります。それは「日本の加害責任を明らかにし、未だ残る差別を撤廃し、政府に補償の実現をさせるための資料館の建設」でした。岡さん亡きあと、生前の岡さんの考えや行動・主張に共感し、岡さんの意思を継ごうという人々が集まって、1995年、「岡まさはる記念長崎平和資料館」が完成しました。

長崎に落とされた原爆の悲惨さ、悲しみは風化させてはなりません。しかし、そもそも原爆投下にいたった戦争には、日本のアジア侵略の歴史があります。この資料館は、韓国併合100年を迎える今日、その過去に触れもしない今の日本で、史実に基づいた日本の加害責任を学ぶことができる貴重な施設です。

② 爆心地公園

1945年8月9日午前11時2分。連合軍アメリカ軍の爆撃機 B29 から投下された原子爆弾が、この公園の上空約500mで爆発しました。現在公園になっている場所は、松山町と呼ばれ、原爆投下当時約300世帯の住宅が並び、1,860名の人々が生活していましたが、みな即死しました。史上2例目の原子爆弾投下の歴史を刻むため、その爆心地が公園として整備され、原爆落下中心碑などのモニュメントがおかれています。また、被爆当時の地層が保存され、当時の状況を知ることができ

ます。現在は「祈りのゾーン」として平和公園の一角を担っています。

③ 長崎原爆資料館

1996年4月、長崎市の原爆被爆50周年を機に新たに建てられた資料館です。この資料館では、被爆の惨状を示す多くの資料が保存・展示されています。また、原子爆弾が投下されるに至った経過や歴史などを、映像などを見ながら詳しく学ぶことができます。展示説明はすべて韓国語表記があります。

④ 平和公園

平和公園は、広さ18.6ヘクタールの総合公園です。昭和26年、原子爆弾の実相を訴えとともに、世界平和と文化交流のための記念施設として整備されました。陸上競技場からラグビー場、野球場まである広い公園です。よく知られる平和記念像が置かれるのは「願いのゾーン」と呼ばれ、ほかに「スポーツのゾーン」や「広場のゾーン」などがあります。ことに「願いのゾーン」は長崎刑務所浦上刑務支所跡で、強制連行を含む朝鮮人も多く収容されていたところでした。

⑤ 永井隆記念館

隣人愛による恒久平和を訴え、願い続けた永井隆博士。永井博士は著作活動などを続けながら、戦争で傷ついた子どもたちのために本を集め「長崎市立永井図書館」を設立されました。博士の亡きあと図書館は、博士の精神と偉業を記念し、「長崎市立永井隆記念館」となりました。記念館では博士の遺品・書画・原稿・著書などが展示されています。また建物の隣には博士が亡くなるまで2人の子どもと暮らした二畳一間の「如己堂」があります。

⑥ 浦上天主堂

キリスト教禁令が敷かれた江戸時代に信仰を持ち続けた浦上の信徒。明治維新後も弾圧を受けた浦上村の信徒たちは、1880年、ようやく自らの教会堂建築に乗り出します。30年もの勤労奉仕と献金活動によって、ついに1914年3月、石と煉瓦造りのロマネスク式聖堂が完成しました。しかし1945年、原爆投下により壊滅し、参堂していた信徒30数名が即死しました。その後、廃墟と化した天主堂は、広島原爆ドームとともに原爆遺産として注目されましたが、さまざまな要因のため1958年に全面撤去されました。その後、現在の新しい浦上天主堂が建てられました。

宿泊場所の長崎カトリックセンターのすぐ横を流れる川べりに、かつての天主堂の鐘楼が、原子爆弾に吹き飛ばされた当時のまま、土手にめり込む形で保存されています。

⑦ 軍艦島

正式には端島と呼ばれる、炭坑を有した島です。江戸時代、1810年に石炭が発見され、その後細々と採炭が続けられました。明治時代に入り大規模な採炭が進み、1890年以降は三菱の所有となりました。早くもこのころ、島内に三菱社立の小学校が設立され住宅などが整えられ、島の周囲の埋め立てが始まりました。大正時代には日本で最初の鉄筋コンクリート造の集合住宅が立ち並び、新聞各社が「軍艦と見まがう」と報道しています。このころから「軍艦島」の名称はつけられていたようです。さて、その後、石炭から石油へのエネルギー革命がおこり、炭坑は1974年に閉山、住民もすべて島を離れ端島は無人口となりました。現在でも大正時代からのコンクリート建造物などが半壊の状態に残り、「廃墟」として多くの人の注目を浴びています。ところが、この島こそが戦争の大きな舞台でした。暗い、危険な炭坑では、多くの朝鮮人

労働者、強制連行された朝鮮人・中国人労働者たちが働かされていました。残念ながら、世界遺産化を目指している軍艦島の歴史として、この事実が語られることはほとんどありません。その異様な軍艦たる姿もさることながら、島が歩んだまさしく「戦艦」としての歴史、アジア侵略の歴史を学ぶべき島ではないでしょうか。

⑧ 稲佐山

1000万ドルの夜景があなたの眼前に広がります。さあ、今宵、だれにこの夜景をプレゼントしますか??

さて、稲佐山は長崎市にある標高333m、東京タワーと同じ高さの山です。夜景はまさに1000万ドルの価値をもつ美しさで、北海道の函館、神戸の六甲山とともに日本三大夜景の一つに数えられています。山頂の展望台まではロープウェイを利用して登ることができます。夜景はもちろんですが、昼の町の眺めも素晴らしいものです。稲佐山の山頂からは、長崎市街がまるでジオラマ模型のように見えます。山の頂に立ち、長崎の町を見下ろしたとき、あなたは何を想像しますか?…夏の日差しに焼かれながら、あの夏の日思いを寄せてみるのはいかがでしょうか。

4) 感想文

青年セミナーに参加して

長崎で経験した事

日本聖公会神戸教区
井田桃子

日本聖公会中部教区
飯野 勉

私は、今回の日韓聖公会青年セミナーに始めて参加が出来て、多くの事が学びと経験が出来た事に感謝です。

長崎は、第二次世界大戦中、原子爆弾が落とされた所であり又日本で大きな造船所がありそこで朝鮮半島から、大勢の人が、ある日突然、日本軍に強制連行され、炭鉱や造船所で厳しい環境で労働した事実を聞き、「加害と被害」の両方を経験した長崎と経験しました。8月12日、岡まさはる記念館で大戦中、日本軍が朝鮮半島、中国で事、南京大虐殺、731部隊、強制連行をリアルな写真で展示してあり当時の日本の加害責任を見て、正直、悲しい、苦しいでなく、韓国の皆さんを見ることが出来ない自分がいました。

もう一つは、岡まさはる記念館で韓国側のガイドをしていた、女性のチョン・ウノクさん、祖国の功績や戦果を語るのではなく、日本軍に、惨殺されている写真、強制連行のことを堂々と説明している姿に私は、感動を超えた衝撃を覚えました。

長崎でガイドをしてくれた、高實さん、城臺さん、チョン・ウノクさんは本当に切実に心と魂で語ってくれました。3人の方の説明で共通していえる事は、「歴史の真実を知り伝える義務」でした。

韓国の青年と話していて、本当に楽しく、食事をして学びができました。キム・テウツク司祭が初日に、「今、韓国と日本は、水面上は友好ですが水面下では、まだギクシャクしています。この、6日間で水面下でも友好になりましょう」とキム司祭が言ったことは、私は、お互いに理解しあえる関係になることと思えました。100年前に、朝鮮半島で日本がしたことを私達は、知り学び理解した上に本当の友好が生まれ、平和が実現できる事を確認できた長崎でした。

今回のセミナーでは、日本の被害と加害両方を学び、ともに分かち合いをしました。

私が知っていること以外にも、あまりにも多くの残酷で目を覆いたくなるようなことを、日本がしていた知って、正直、「韓国が日本をゆるす日なんてこないのでは。」と感じてしまうほどでした。過去の事実を知るだけで、大きすぎる問題に対して何もできない、どうしていいかわからないという思いでいっぱいでした。

でも、おかまさはる記念館の高實さんと、被爆体験の語り部の城臺さんの話で、今回学んだことを勉強して終わるのではなく、他の人に伝えることが私たちの使命で、過去の勉強としてではなく、現在の問題としてとらえてほしいとありました。

それをどういう風実践していくかは色々あると思います。

私はまずは家族に伝えます。そして、今年は韓国併合100年を迎える年なので、ニュースや新聞にも多くでてい話題にもしやすく、一歩進めるチャンス年なのではないかと思えます。特に日本人は学校でもほとんど学ばないので、日本がどんなことをしたのか、また、日本が被害を受けた原爆でも2重被害にあった韓国・朝鮮人がたくさんいるということ伝えるだけでも、伝えた人に多少なり関心を持ってもらえるのではないかと思います。近年見られがちな、日韓の関係は過去の問題を何も知らず、知っていても無関心で交流を深めているように思えます。それではいつか、過去の過ちを繰り返してしまうかもしれません。また、憎しみや苦しみを抱えたまま、上辺だけの関係になってしまうかもしれません。そうならないためにも、私は一人でも多くの人に伝える ことから始めます。

神様の下こうして素晴らしい交わりに加えていただいたことに感謝します。

平和の種になるために

日本聖公会中部教区
荻野直人

1. 私の中にあるもどかしさ

韓国併合から 100 年目を迎え、日韓の歴史を見つめ返して現在の二国間関係について深く考えることは私たちにとって極めて重要なことである。そのような思いがあって、第 5 回日韓聖公会青年セミナーに参加した私であるが、参加するにあたっては心の中になにか歯切れの悪いもどかしさを同時に抱いている。そのもどかしさは、昨年参加した第 4 回日韓聖公会青年セミナーで私の中で大きなものになっていた。

日韓セミナーでのプログラムを通して、自分が日本人であるということを鋭く突きつけられ、考えさせられる。韓国併合 100 年目である今年の日韓セミナーでは、その刃は猶の事鋭利である。日本という国家が、あらゆる方法を尽くして朝鮮の人たちの尊厳を奪った過去を見つめることによって、私が加害者である日本人のひとりであることを強く自覚させられる。日韓セミナーの中で、私たちが歴史を見つめる根拠は東アジアの平和を創るという目的にある。東アジアの平和の実現にむけて、日韓セミナーに参加する青年は皆がひとつの目的をもった主体である。しかしながら、ひとりひとりが力強い主体となるには、歴史を見つめ問いかけるという過程を経ることは不可欠である。その過程において、参加者は加害者である日本人/被害者である韓国人といったアイデンティティを問われることになる。それは、アイデンティティが強められること二つの立場に分断されてしまうことでもある。つまり、未来の平和を創造する主体として統合されるために、敢えて過去を見つめて分断するという戦略をとっているわけである。

長い時間軸を基準として据えれば、先に述べたことに納得しているわけであるが、現在を生きている私はやはりその流れの中で翻弄されているわけである。同じ方向を向く仲間になるための過程の中で生きていることを認

識したところで、そう簡単に割り切れることができないのが私たちではないだろうか。「加害者としての日本人である私」と「韓国のみなさんとともに東アジアにおける平和の種として存在している自分」というふたつのアイデンティティの狭間にいることが、私の中に在るもどかしさを生み出している理由である。

2. 長崎的なもの

長崎という地は、歴史を振り返ることによって生まれる加害者/被害者という自意識から解放されるきっかけを与えてくれる。長崎には、原子爆弾の被爆地としての一面と、戦争勝利のため強制連行した朝鮮人に過酷な炭鉱労働を強いてきた一面が存在する。この事実、戦争が敵対する二者間のみという単純構造で行われるものではないことを語っているのである。戦争があらゆる要素によって構成されている社会の中で表面化する現象のひとつであるということを経験したとき、私たちが陥っている単純な思考から脱却できるのではない。

戦争を取り巻く様々なことを私は長崎で発見したように思う。次に私が気づかなければならないことは、その長崎的なものが日常に潜んでいることを感じることである。

3. 諸刃の剣であるアイデンティティ

長崎でいろいろなことに気づくことができた私であるが、結局のところ「日本人である自分とは何者か」というところに戻ってしまう。そんなことを考えていたら、在日韓国・朝鮮人や在韓日本人のことが頭に浮かんできた。国籍と居住地が異なる場合や、教育を受けた国と今住んでいる国が異なった場合など、様々なケースがある。その人たちのアイデンティティを規定するのはなんなのだろうか。それは、その人自身が持っている「思い」以外には存在しないのである。決して、国籍や居住地によって人のアイデンティティは決められるものではない。

ならば、私の「私は日本人である」というアイデンティティも私の心の中にある思いによって決定づけられているにすぎない。私は、

そこになんともいえない不安定さを感じてしまうのである。

第5回日韓聖公会青年セミナーでの学びと交わりによって、こんなことまで考えさせられた。

長崎の鐘が心の平安をもたらしてくれる

日本聖公会横浜教区
伊藤友里

「アア ナガサキノカネガナア〜ル」。

韓国の参加者の女の子が、宿泊施設長崎カトリックセンター近くにある浦上天主堂下、天主公園前の道路のガード壁面に彫られた「長崎の鐘」の楽譜を口ずさみながら歩いている姿がとても印象的だった。

この歌は、永井隆の著書作をモチーフにしたものであり、平和への願いがこめられている歌として知られている。

日韓併合から100年目の節目を迎えての日韓青年大会は、長崎で行われた。修学旅行以来の長崎は、私に新たな一面を映し出してくれた。1945年8月9日、原爆が長崎に落とされた。原爆の悲惨さに憤りを感じ、二度と原爆が落とされることのないよう、戦争が繰り返されないことを願うことだけが私の平和に対する思い・願いでしかなかった。セミナーを通して、被爆者が日本人だけではなくたことを知り、その背景として日本が戦時中にアジア諸国に行ってきたことを知り、どれほど自分が無知であったか改めて気づかされた。それは同時に、日本の戦争責任を認識することであり、戦争を体験していない私は認識することで責任を請け負う、それが平和への構築の一つであるのではないかと思った瞬間であった。

そして、責任を請け負うことは、事実を知ることである。事実を知ること、まさに、「いま・ここ」を意識することである。過去のことはもちろん、現在世界で何が起きているのかを把握する義務があると考え。情報社会と言われる今日は、あらゆる情報が私たちの周りで氾濫している。「何が事実である

か」は、それを受け取る側の判断に委ねられている。一時の感情で、情報の判断が偏りすぎることもしこりうる。今後、私の判断が歪められぬよう、心の平安が保てるよう、神様がお導きしてくれることを願う。

長崎の地は、平和を願う場所であるが、それは私の心の平安をもたらしてくれる場所を意味するものである。『長崎の鐘』を韓国の女の子が口ずさんでいる姿を見て、深く感じた瞬間であった。

長崎で紡ぐ

日本聖公会北関東教区
川村マリ

私は8月11日から16日までの日程で、長崎で開催された第五回日韓聖公会青年セミナーに参加した。

総勢約20名でのセミナー、私にとっては韓国から参加した仲間と向き合い、ゆっくりと話すことが出来る好機となった。

関東で生まれて育った私には「長崎」は修学旅行定番の地、大戦での被爆地、キリシタン殉教の地といった「定型の印象」だったが、現地のプログラムにミを置くことによって、それらの表層の印象は見事に打ち砕かれた。

歴史に直面し、自分の言葉では表すことができない「時の重み」を実感すると同時に、連なる事柄に想いを馳せた。その中では特に高寛康稔さんの朝鮮併合についてのお話は殊の外、私には印象的だった。日韓の現代史を丁寧に分析され、支配と被支配の構造や朝鮮人被爆者問題を扱われるその姿勢には圧倒された。

強制連行には企業や民間人も関与していたこと、移り住んだ地で戦禍に見舞われた朝鮮出身の方々に直面すると、「国家権力が人間の生き様に介入、支配する時」「強い者に従属し命を得る日」の酷さ、惨めさ、浅ましさと悲しさで心が震える。

日本のキリスト教会が、朝鮮半島へ宣教師を送り込み、皇民化政策推進の手先となって「ふたつの神」に仕えた現代史を消し去るこ

とはできない。

翻って、私は長崎で得たものを今後どのように生かすのかを自問自答している。これはなかなかの問題だ。

私にとって日韓セミナーは昨年に続いて2回目の参加になった。幸いなことに物事や歴史を複眼的に捉える心がけを持つようになった。さらにセミナーで繋がる両国の知人、友人が増えた。欲を言えば、これから日本からの参加者をもっと増やす必要があると思う。

一方で悲観はしていな。セミナーや関連する場、集いを通じて「人間関係を紡ぐ」ことにささやかな参加を続けたい。

長崎の地に立てば、半島が近いことはもちろん、琉球や台湾、フィリピンとシェアすることも大切と気づく。海を越えて、友情や知遇の「糸」で織り成された布地が「平和」だと思ふ。政府の交渉や力に依存してはいけない。民が向き合うとき、それを持続することで新しい命が生まれると私は信じている。

日韓聖公会青年セミナーに参加して・・

日本聖公会中部教区
西川 亘

今回は2回目の参加ということで、プログラム全体を、余裕をもって見る事が出来たと思います。また、セミナーのスタッフとしてプログラムを企画の段階から知っていたので、心の準備も出来て、他人の意見にも耳を傾けて考える余裕があったのが良かったと思います。余裕が出来たことで、よりセミナー全体を見ることができ、色々な発見がありました。

中でも一番印象に残っているのは、その日体験したプログラムについての思いや考えを分かち合う時間での事です。韓国の青年たちとの歴史に対する向き合い方に、違いがあるという事が大きな発見でした。個人、または国による教育の違いで、同じ歴史を学んでも感じ方が違うのは当たり前かもしれません。しかし大きく違ったのは、韓国の青年たちは歴史そのものを尊重しているという感じがし

たということでした。

私は今まで自分の国の歴史について、学校の勉強としてしか捉えてきませんでした。しかし今回のセミナーを通して、それでは何も変えられないし、せっかく素晴らしいお話や体験をしても、今後活かしていけないということに、改めて気づかされました。

分かち合いをしていく中で、ある青年のコトバが私の頭の中に残りました。「一人の十歩より、十人の一歩」というコトバです。これは、簡単にいくことではありません。ですが、「百聞は一見にしかず」ということわざの通り、自分たちで実際問題が起きている場所に赴き、その現状やありのままの姿を見て、真実の話を聞く。これこそが、歴史を含めた様々な問題に対してとるべき行動であると気づかされました。

今はインターネットが普及し、世界中のニュースが、自宅からでも簡単に情報を得ることが出来ます。ただし、そうした情報は事実ではなく、一人の人が感じた考えかもしれません。だからこそ、自分の目や耳で可能な限り本物の姿を見ることが大事であるということが、今回のセミナーを通して分かりました。

今回のセミナーで得た、問題の起こっている姿を自分の目で見て体験することが大事であるということをお忘れずにこれからの人生を歩んでいきたいです。そして、自分が学んだことを同世代の人たちに伝えていき、十人の人の一歩踏み出す瞬間の背中を押せるようになりたいと思います。

今回の体験では戦争について深く考えさせられました。戦争については、人それぞれ色々な考えがあると思います。生命の軽さ、文化や個の完全なる否定や排除、国を任されているにもかかわらず、その任されている人のお粗末な考えやつまらないプライドによって、国民が犠牲にさらされていく。それが戦争というものなのだと私は思いました。

最後になりましたが、個人的には、初めての長崎で今まで知っているようで知らなかった戦争の歴史について学べて、とても有意義な時間が過ごせたと思います。きれいな景色やおいしかった食べ物、一緒に笑い会えた仲

間、とても楽しかったです。今回のセミナーに関わった日韓両方のすべての参加者、スタッフ、の方々、そしてこの夏のすばらしい体験に感謝したいと思います。

これからの日韓関係にむけて

日本聖公会中部教区
山田拓路

「私は、日本人が過去の過ちを謝ったら許そうという思いを抱いていたことがありました。しかし、今では、条件をつけるのではなく、まず私の方から許そうと思うようになりました。」

8月15日、長崎聖三一教会でお捧げした聖餐式において、大韓聖公会の金兌昱司祭が語られた説教の要旨の一部です。

この言葉に私は驚きました。韓国併合の歴史を学び、炭鉱における強制労働の現場を訪れた後だったこともあり、「こちらの謝罪もなく許すなんてとんでもない、申し訳ない」と思ったからです。同時に、私は自らの姿勢が問われたように感じました。

日韓の関係が語られるとき、「なぜ日本人は自分の先祖（過去）の過ちを、今なお謝らなければならぬのか」という問がしばしば話題に上ります。

しかし、私はこのセミナーを通じた様々な出会いから、私が謝るべきは、過去に日本人が犯した罪についてだけではなく、現在もお苦しみを与え続けている私自身の行為についてでもあると気付きました。

日本軍「慰安婦」への補償と記憶、朝鮮人被爆者に対する差別的対応、南北分断、在日韓国朝鮮人への差別、靖国神社への合祀…。これらは現在の私自身の問題であるにも拘わらず、知らず、関心を持たず、何も為さず、結果としてこうした状況を黙認してきました。

この加害性の自覚を土台として初めて、私達は韓国の方々と力を合わせて東北アジアの平和を築く一歩を踏み出すことが出来るのだと思うようになりました。

では、私達は、これからの日韓関係をいかに築いていけばいいのか。

私はこのセミナーを通して、韓国から来てくれた青年たちと親しい友人になることが出来ました。言葉が通じなくても何とかコミュニケーションを図り、少しでも通じたら大きな声で笑い合ったこと、またお互いの抱く感情に真剣に耳を傾け合ったことは、私の先入観を確かに覆し、血の通った友人関係を築くことになりました。昨年のごちなさを考えてと容易なことではなかったと思いますが、その経験があったからこそ味わえた喜びや楽しさもありました。

人に出会うことへの力は、それにしかないもの、知識やイメージを超えたものだと思改めて実感しています。私にとって韓国は、単なる隣国から、平和への思いを共有する多くの親しい友人が暮らす国となりました。こうした変化が両国民の一人ひとりに起これば、それは国家間の反感や争いを抑止する力にもなり得るのではないかと思います。軍事力によらない、人間同士の関係による安全保障、と言うのでしょうか。それが、どのような武装より、自衛軍より、核の傘よりも、未来あり、人間らしさある平和の作り方ではないかと思います。

これからも、互いの出会いと学びを積み重ね、築かれた多くの仲間たちとの関係を基に、現在も続く私の「加害行為」に責任をもって向き合っていきたいと思います。

今回のセミナーのスタッフの皆さん、参加者の仲間達、そして様々な形で協力下さった方々、殊に九州・長崎において計画の段階から親身になってお力添え下さった方々に心より感謝いたします。貴重な経験を、ありがとうございました。

